

自立した女と男を 人間らしい生活を 差別のない社会を
育み 創り出す

新しい家庭科

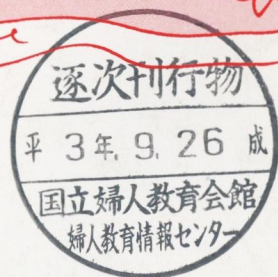
We

ウイ



10
1991

特集 買売春の構図



季節のうた

仙田敬子



水引草

深々と
森しづまれり
秋祭

●文化としての性 北沢方邦 2

●主体的に「性」を生きるために 角田由紀子 6

●アジアの買売春と戦争責任 谷口和憲 10

●「朝鮮人従軍慰安婦」問題 青木喜代江 14

―川田文子さんに聞く―

インタビュー 安達優雅子さん

―身体的に安全に大人だつてことを
まず尊敬してほしい―

(インタビュー・青木喜代江) 18

「買春ツアー」と女の痛み 桑畑美沙子 26

「ミス・長崎」とばつてん・うーまんの会 津田尚美 28

●MIKE相談室から 鈴木みち子 30

●じゃばゆきさん 大阪府立旭高等学校二年生 34

●平等時代のセックスライフ 安東尚美 38

連 載

新しい家庭科を創るために

●小学校 今、子供たちは―性の違いに目覚めつつ、その出発点で― 吉井路子 42

●中学校 中学で性教育にとり組んで 細田英理子 47

●高等学校 「女性学」の試み―女と男の関係性の変革のために― 寺島紘子 52

荒野のバラ 買売春の構図

―戦争は命かけても阻むべし― 田中裕一 58

家族と家庭科 高度経済成長と家庭の重視 酒井はるみ 62

男性学への契機―魔男の宅急便 世界の終りとハーフボイルド・ワンダーランド 諸橋泰樹 64

精田の夢 愛という神の餌 福田 緑・加藤由美子 68

あかきたな ヤツちゃんとタンゴ虫 現代衣生活考 「髪の毛は命」―朝シャンの定着 むらき数子 70

オホーツクの潮風荒く… 「センセー家族のいない人はどうすんの？」 江口凡太郎 73

波 家庭科の難しさ面白さ ―買売春を考える中で― 半田たつ子 74

○ひと 江口凡太郎さん 17

○こだま 「小学生が「死」を考える」を読んで 76

・イキイキぐるうぶ 57
・Weの読者会だより 81
・わたくしからあなたに 82
・泉 83
・十字路 84
・アンテナ 86
・編集後記 88

春の売買 図構

文化としての性

北 沢 方 邦



いわゆる文明社会では、性の問題はなぜ性行為の問題に還元されてしまうのだろうか？

誤って未開とよばれている諸社会では、そのようなことはない。そこでは性の問題は、ひろくセクシュアリティやジェンダーの問題にかかわり、文化や思考体系の基盤をかたちづけている。

セクシュアリティとは、これもまた「文明」においては人間の性行為やその風俗習慣などのありかたに限定されてしまっているが、ほんらい生物学的な性（セックス）に対して、性やその欲求の表現のしかたにかかわる概念であって、たとえば鶴の舞や孔雀のディスプレイからホビ族のバタフライ・ダンス（若い男女の求愛の儀礼）やポリネシアのブアア・ブアア（若い男女の求愛の儀礼遊戯）にいたるまで、すべて

その種や種族固有のセクシュアリティの一表現である。

ジェンダーとは、これのみが人間に固有の記号表現にほかならないが、女性／男性という二分法（中国では陰／陽であるが）によって世界を分類する体系であって、これも近代社会でのみ誤って「男らしさ」「女らしさ」などという疑似セクシュアリティと混同されているものである。たとえばパプア・ニューギニアでは、鳥は雌雄や生態による自然分類とは別に、極楽鳥は女性、鷲は男性というようにジェンダーによって分類され、鳥の世界は神話的世界のメタファー（暗喩）になっている。またそこでは、宇宙の安定や豊饒はジェンダー・バランスによってのみ保証されるとして、男と女という性の対立とは別に、精液や乳という白い体液は女性、血という赤い体液は男性と考えられ、その両者が充実し、均衡するこ

とによって人間の世界の健康や繁栄がもたらされるとする。

アメリカ・インディアン・ナバホ族では、生物だけではなく雲や川や岩にいたるまで、あるいは数や方向といった抽象概念にいたるまで、すべて女性／男性のジェンダーによって分類される。たとえば太陽が昇り、沈む東と西は動的な方向として女性、この地域では気象の変化にもほとんどかわりがない静的な方向である南と北は男性である。ただ儀礼のときにえがかれる美しい砂絵では、東西軸は男である雷神の白・黒のジグザグ線、南北軸は虹の女神の白・赤の直線であらわされるが、これは女性である東西軸と雷神の性の交わり、男性である南北軸と虹の女神の性の交わりをそれぞれ示している。

こうした諸社会では、人間の男と女の性の交わりが、たんにセクシュアリティの次元にかかわるだけではなく、ジェンダー・バランスの考えにもとづく神話的思考や宇宙論の次元にかかわっていることはいうまでもない。たとえばブラッック・アフリカの多くの社会では、男や《社会》の意向にまったく関係なく女たちは多産であることに価値をみだし、誇っているが、それは多産を母なる大地の豊饒性と同一視しているからである。

またホピやポリネシアでは性の交わりは、近親相姦のタブー（その範囲は社会によって異なる）以外はまったく自由で

あるが、それはわれわれの社会のようにたんに快楽追求のためにあるのではなく、日本の古代社会の歌垣またはカガイの制度がそうであったように、神々の性の交わりに対応する現世の制度であって、同じくジェンダー・バランスの考えにもとづいている。

近年サモアでは性は基本的に自由だとするマーガレット・ミードの見解に対してフリーマンが異議をとなえ、サモアにも純潔や禁欲の概念があるとして大きな論争がおこったが、純潔や禁欲の概念はむしろ神々に対する儀礼的・神話的なものであって、両者の主張は矛盾しないとする最近の見解は興味ぶかい。なぜならわが国でも、稲をはらませる雷神を誘惑するために、早乙女たちは儀礼上の《純潔》と《禁欲》をまもらなくてはならなかったが、それは世俗の場面で夜這いということばに象徴されるように性について自由であったことと矛盾しない。

いずれにせよこうした諸社会では、性や性の交わりは、宇宙論的なジェンダー・バランスに対応し、それぞれの種族に固有のセクシュアリティに裏うちされている。そこではひとびとの欲望も、自由であるがゆえに逆に節度があり、自分自身のコントロールがきくものとなっている。性は秘密のものではなく、子供に対しても開放されているから、性にかかわる情報やイメージもなんの刺激力もたない。こうした社会

に、性にかかわる《非行》や《暴力》あるいは《売買春》などといったことばが無縁であることはいうまでもない(近年第三世界にひろがっている売買春は、急激な「近代化」とそれによる貧困によってもたらされたものであり、彼女らにとつてはそれは純粹な経済行為なのだ)。

このように、誤つて未開とよばれている諸社会では、性は根本的に個人の問題であり、それぞれの個人の無意識を支配する神話的な思考が欲望やセクシュアリティをコントロールしている。ところがわれわれの社会では、性は一見自由であり、個人の問題であるようにみえながら、根本的には国家や社会によつて管理され、コントロールされている。それが欲望の肥大や、性にかかわる非行や暴力、あるいは売買春の根源であるといつても過言ではない。

われわれの社会、あるいは一般的にいって近代社会の基本的なメカニズムは、経済生産のためのすべてのものの合理化といつていいだろう。それに成功した国家は生き残り、その競争に破れた国家は、近年の東欧のように、国家体制さえも解体することとなる。こうした社会でこそ、合理化の結果として男はモノの生産の担い手、女は労働力の生産としての子供の生産と生育の担い手という、近代社会に固有の性別分業が発生する。人口政策とは、国家による後者の直接のコントロールにはかならない。

だが、労働力の生産という必要性にもかかわらず、性そのものは近代社会の合理化の過程からは排除される。なぜなら、労働力の生産に必要なのは、結婚による《健全な家庭》とそれにもなう《健全な性道德》であつて、快楽の追求としての性は、生産にひきつづけられるべきエネルギーの浪費にかならず、合理化にとつては有害な非合理性だからである。資本主義であらうといわゆる社会主義であらうと、産業社会の建設期には、キリスト教や儒教などといった伝統的な価値体系のなから禁欲主義的な倫理がえらばれ、教育を通じて社会を支配するにいたるのは、このような合理化のメカニズムのためである。

そのうえ合理化が進展すればするほど、非合理性の領域も拡大する。なぜなら、かつてフロイトがみごとにあきらかにしたように、《父》による欲望の抑圧は、その暴力的な反乱か、さもなければ神経症的な挫折をもたらすわけではないからである。《父》とは、《健全な性道德》や禁欲的な労働倫理を要請する父権的な社会そのものであり、そのような要請にもかかわらず、そうした社会に性の非行や暴力、あるいはいわゆる性倒錯——《健全な性道德》が存在するから同性愛などが《到錯》とみなされるのであつて、同性愛を制度化している「未開」はかなり多くある——や売買春がはびこるのは、むしろ抑圧の強大さを示すものといつてよい。戦前の日本の

公娼制度などは、国家権力による非合理性の直接のコントロールであって、明治以後の天皇制を頂点とする父権的なものの抑圧が、いかにきびしいものであったかを物語っている。

現在のわれわれの社会には、一見そのような抑圧の影はないようにみえる。だが国家や社会による欲望や性の管理や、それによってもたらされる抑圧は、ただ目にみえない、あるいはかくされたレベルに変換されただけである。この意味でわれわれの社会は、欲望や性についても管理社会であるといえるだろう。

その最大の問題点は、欲望の徹底的な商品化であり、それによって生れる疑似セクシュアリティの網が社会全体を蔽ってしまうことである。

ここではまず、欲望そのものが人間ほんらいの欲望ではないことに注意しなくてはならない。すなわち、ひとたびは非合理性の領域、あるいは《私》の領域におしやられた性の欲望も、《私》の領域が開発すべき広大な消費の領域として経済的な復権をとげるとともに、欲望一般と同様に消費を刺激する開発の対象となる。むしろ性の欲望は、その中心的な対象といってもいいであろう。なぜなら、たとえば自動車や家庭用電機製品のように性にまつたかわりのない商品の広告にさえ美女が登場して魅力をふりまき、それらの商品がアメリカ語の意味で《セクシー》であること、すなわち感覚的

・機能的・心理的にアピールすることを語りかけているからである。広告にかぎらず、すべてのメディアでは、人間は人間一般ではなく、男であり女であることが強調され、しかもセクシーであることに価値がおかれる。すべてを疑似セクシュアリティの網でおおう社会とは、そのような社会である。

そこでは現実にはひとがひとと出会うとき、それは人間に出会うのではなく、異性または同性に出会うのであり、とりわけ男にとっては、そのとき女をはかる価値の尺度は、セクシーであるかないかである、といっても過言ではない。なぜなら、社会をおおっている疑似セクシュアリティの網は、近代社会であればつねに経済生産や合理化の主役であった男の視点や必要性からつくりだされたものであり、またそのために開発されてきた性的な欲望の所産に他ならないからである。そのような疑似セクシュアリティの網の目のなかでは、女はつねに、意識的であれ、無意識的であれ、性的な欲望の対象でしかない。

国家権力や社会の価値大系による強制的な抑圧の影がうすれたとしても、このような消費社会から、性にかかわる非行や暴力、あるいは売買春の暗い影が消えさることはない。それが不幸なことに、誤って未開とよばれる諸社会よりも劣った、われわれの「文化としての性」なのだ。

(きたざわ まさくに・構造人類学)

春の売買 図構

主体的に「性」を生きるために

角田由紀子



性の不平等が離婚へ

弁護士という仕事のおかげで、たくさんの男と女の姿を「離婚」という舞台でみてきた。「離婚」とひとことでくくってしまったけれども、そこに見られる男と女とその破綻の姿は千差万別だ。しかし、私の経験では一つだけ共通項があるように思われる。二人の関係が、とりわけ「性」にかかわる関係のありようが、非常に不平等なものであるということだ。いまの世の中では平等な男と女の関係を築くことは、なかなかむずかしいから、誰でも多少は不平等な関係のなかに生きていく。けれども、破綻したカップルではその不平等さが「性」の場面において際立っているのだ。

いろいろ問題や不満はあるけれども「性」のありように、二人が満足しているとき、その関係は継続していく。逆に

「性」のありようが満足できるものでないとき、他の点での満足は打ち消されるようだ。日常生活の関係のありようが平等でお互いを大切にしようものではないとき、「性」の場面でのみ平等であるということはない。日常生活の場面では他人という存在が介在したりして、二人きりで向きあわずにすむせいか、問題は顕在化しにくい。ところが「性」の場面では、裸の人間関係の質があらわにされてしまう。二人きりの空間という場面設定が、男から遠慮や配慮や他人の眼にどう見えるかなどという気がねをはぎとり、彼は正直に本音を見せる。「性」の場面で本音で行動する夫の、その本音が傍若無人に相手のことなどお構いなしというものであるとき、妻は深く傷つけられていく。そしてある日、我慢と忍耐の限界に達してしまい、彼女は離婚の決意を固める、というのが私が眼に

した共通のプロセスだ。妻は「性」の場面に象徴される自分の姿に、「人間」が押しつぶされることを実感するのだ。自分が豊かな感情をもった人間であることが否定されたまま、夫の前に存在させられるとき、自分が「人間」から夫の性欲の「対象物」に転化させられてしまったことを確認させられるのだ。「性」が人間存在の核にあり、いわば心身の統一体であるため、ここで傷つけられたときの傷はいやしがたく深いものになり、時に人の存在の基盤さえ揺がす。「性」についての自由な意思決定が無視されることは、人間としての存在そのものを、丸ごと否定されたのと同じ痛みを与える。

性の自己決定権が、女性の自立にとってかくも重要なものであることを、不平等さの軋みのなから、女性は学ぶのだ。

結婚の中の性の状況

一九九一年五月に「週刊ポスト」誌が「現代人の行動と意識」調査委員会を組織して、二千組の日本人夫婦（計四千人）を対象にわが国ではじめてという大規模調査を行った。この調査は一組の性関係を男の側・女の側から照射したときうかび上がる実像を通じて、現代の性だけでなく、結婚・夫婦・家庭を考える手がかりを得ることを意図して行われたという（以下、この調査結果からの引用は、財団法人日本性教育協会発行の「現代性教育研究月報」一九九一年六月号による）。興味を引いたのは「自分がしたくなくても配偶者とセック

スをするか」という問いで、「夫の七割が、まったくしない（二九％）、ほとんどない（四二％）」としているのに対し、妻は、ほとんど毎回（三％）、しばしば（二二％）、たまに（五五％）も含めれば七割がそういうことがあると言っている。また、夫の七割が、妻がセックスをしたくないと思われるときでも要求すると答えている。妻は、夫がしたくないと思われるときには、六五％が要求しないとしている。

さらに「配偶者とのセックスの『きつかけ』は」という問いに対する答えは、夫が愛撫やキスなどで誘う（五八％）、夫が言葉で誘う（三七％）。これに対して妻が言葉で誘う（八％）、妻が愛撫やキスなどで誘う（一四％）であった。

この調査対象夫婦の平均年齢は、夫が四三・九歳、妻が四〇・五歳で夫・妻ともこの九割が初婚というから、結婚生活のキャリアは一七・八年というところだろうか。回答者の七八％の夫はサラリーマンであり、妻の五四％が何らかの職業をもつ、日本のごく普通の中年夫婦たちである。

このデータに明らかのように、七割の夫がしたくないのにセックスをすることはないのに、七割の妻はしたくないのにセックスをしており、そのセックスもほとんどが夫の誘いかけによる夫主導型のものであるということだ。調査によると妻がしたくなくてもセックスを求める夫たちは、またかなり的高率で買春体験者である。夫の四八％が婚外性体験がある

と答え、その六八%が買春体験者である。この数字に見られる夫たちの性意識は、相手の女性の意思と無関係に、自分の性的欲求を満たしてよいとするもので、結婚生活の中の「性」に女性が著しい不平等を感じている実態がわかる。

女性たちの意思表示を妨げるのは何か

結婚生活の中での性のかなりの部分が、妻の意思を無視したり、尊重しなかったりというレイプまがいのこの実情は、妻たちが「性」について意思表示しない、あるいはできない事実と裏腹である。その一つは、男性たちの意識であらう。男たちが結婚をする目的として、本音をいえば無償のセックスと身のまわりの世話が手に入ることだといわれる。「結婚」という国家公認の法制度の枠組の中に入ってしまうえば、もう安心、何をしてでも許されるという意識があるらしい。結婚にこぎつけるまでは、二人の関係維持のためにそれなりにあれこれと多少面倒でも手続を踏んでいた男性も彼女を妻の座にすえてしまえば、逃げられる心配はないと考えるのだろうか。二人の関係は結婚をしたときから始まると考えるのではなく、やはりそれは安定した場所のゴールなのだ。

このような男性の結婚観に加えて、男の性を生殖と快楽に二分し、生殖の性は家庭内で、快楽の性は家庭外でとしてきた「伝統」的意識がある。多くの男性たちは結婚生活の相手との間で快楽の性を築こうとは、はじめから考えていないの

かも知れない。そういう意識の男性をよしとして結婚した妻の方でも、結婚生活に生活保障以上に、豊かな性愛などというものを求めたり、期待しないのかも知れない。女性がそういう期待を抱かない、あるいは抱けないのは、快楽の性は結婚の外でという男性の性の二重基準をうけいれるように知らず知らずのうちに、刷り込まれてきた成果でもある。

日本の女性たちは長いこと、女が「性」を口にするのは、はしたないこととしつけられてきている。まして、自ら快楽としての「性」を追求することなどんでもないこととされてきた。「性」において主体であることを封じられ、客体としてのみ存在させられてきたという歴史を、一人一人の女性はどこかに引きずっている。そのことが、女性たちに今でも「性」についての意思表示を困難にさせている。

女性たちの意思表示を封じ、性的自由を奪ってきたのは、これらにとどまらない。法の世界に眼を転じてみよう。そこでは結婚制度の中の「性」には、極めて限定された自由しか認められていないのである。

たとえば、夫が妻を殴って性行為を強要しても犯罪にはならない。同じことを他人にすれば、彼は強姦犯人として二年以上の懲役という刑罰を受けるというのに。強姦した夫を処罰しない法律の理屈はこうである。そもそも結婚した以上、夫は夫たる身分に基づいて妻に性交を要求する権利を手に

し、その反面、妻はこの要求に応じるべき義務を負ったのだから、たとえ強姦であろうと、それは夫たる者に許された権利行使である、と。こういう「理屈」が、私たちの生きていくこのいま、法の世界では生きているということだ。先きにあげた調査で、妻がしたくないといってもセックスをしまうと正直に答えた七割の夫たちが、この法律の「理屈」を知ったうえで、そのように行動していることはあるまい。しかし、彼らの行動は、法によって是認されているのである。

「性」の客体から主体へ

法律までもが、結婚した女の性的自由を否定しているこの厳しい現実のなかで、女性はどうのようにしたら「性」の主体になれるのだろうか。「性」の主体となることは、すなわち人生の主人公になることだ。

「性」はかけ値なしに、二人の人間関係の質を反映するものだ。「性」が人間のいのちを豊かに花開かせる力をもっているからだろう。社会的地位や経済力やもろの人間の属性をすべて取り去り、対等な地平に立つ「ただの人間」として真向かうことによってしか「性」のもつ快楽は味わえないようだ。もちろんこの「ただの人間」は主体性をもった人間だ。

女性が男性と対等な地平に立つことは、この性別役割分業社会ではとてもむずかしい。男性と女性は縦関係におかれ、女性は自分の存在意義を男性をはじめとする他者によって定

義されるからである。「女性である」ことは、その人生を「女役割」に固定されることである。女役割は家事にしろ育児にしろ、他人の世話をし他人からその仕事を評価されることではじめて成り立つ。自分で自分を定義し、評価することは女役割からはあり得ないことである。また、女性は女役割を割りふられることで、自分の世界を狭められ、他者や社会との広いつながりを断たれ、自分の力による自己実現の快感を味わうことも禁じられていた。

そもそも女性は「性」について物言うべきでない、快楽を求めるべきではないと強要され続けてきた歴史的背景のもとでは、女役割に押し込められた女性が、「性」の場面でも自分の感情や身体に忠実になろうとしてもどうしてよいかわからない。従うべき「自分の感情」すらあいまいとなっていたのだ。何が楽しいのか、何を欲しているのかを自分ではつきりとつかめなかったのだ。他者による定義に慣らされてしまうと、感情の中身まで他者の定義を許してしまう。

女性が自分で自分を定義すること、すなわち自分の主人公になること、を奪ってきた性別役割分業をはじめとする女性抑圧の制度や思想を打破しなければならぬ。

女性による自己定義・自己計画こそが女性の心身のありようをそのまま肯定し、「性」においても自立した人間であることを可能にするものだ。

(つのだ ゆきこ・弁護士)

買売春の構図

アジアの買売春と戦争責任

谷口和憲



七月二十四日、私の所属する「アジアの買売春に反対する男たちの会」は、『従軍慰安婦』問題に対する日本の男たちの加害責任を問う」と題して集会を開いた。当日は、まず琉球放送制作のビデオ「真実は消せない―映画『アリランの歌』沖縄ロケ」を上映し、その後、「在日韓国民主女性会」の金子スズキさんに、在日韓国人女性の立場から、日本の朝鮮に対する植民地支配の歴史や、現在の在日の人々の法的地位に関する問題を交えて、「従軍慰安婦」問題について語っていた。

金さんのお話の後、私はこの集会の司会者として、「日本人」そして「男たち」のこの問題に対する加害責任を前提に、これから私たちは何を行うことができるか、ということ

を論議しようと思っていた。しかし、そのような私の思いとは裏腹に、最初に会場から発言した戦争体験者の男性の話を、私は啞然とした。彼は従軍慰安婦の遺体を焼いた時のことなど、戦場での体験を話すのだが、その話し振りはどう見ても「反省」のひとかけらも無く、得々と話しているように思えてならなかったのだ。いつまで続くか分らない彼の話を私が中断すると、彼は何を思ったか「日本は徴兵制を敷くべきだ」と言い放つ仕末だった。また、同じく戦争体験者の男性が、日本だけではなく多くの国が侵略の歴史を持っていると、「侵略戦争」を一般化し、この問題に対する日本の加害責任を曖昧にしかねない発言をした。さらに、別の男性は自分が東京帝大出身であることを繰り返しながら、「全て戦争が悪い」とこれまた加害責任を曖昧にし、自分は従軍慰安婦を買ったことはないので、「日本の男たちの加害責任を問う」

という集会のタイトルに侮辱されたような感じを持つと、主催者側を間接的に批判した。

もちろん、このような発言ばかりではなかった。「日本人」として、「男」としての、この問題に対する加害責任を指摘する発言もあった。しかし私には、六十代後半から七十代と思われる戦中派の彼らの発言に、今さらながら、過去の侵略戦争に対して加害者意識を持ち合わせなかった、戦後の日本人の典型的な姿を見たようで、集会が終わった後も重く暗い気持ちに支配された。

この集会の約半年前、私は彼らと同年代の、ある中国人男性に会った。彼は南京大虐殺当時、奇跡的に助かった生存者のひとりである。名前は潘开明^{パンカイミン}さんと言ひ、現在七十三歳、南京大学の学生寮の守衛をしていらっしやる。彼には、南京大学の日本人留学生・舟木智幸さんと、日本語学科の中国人学生・朱亜さんのおかげでお会いすることができた。私はこの二人の通訳によって、南京大学の学生寮で二時間ばかり潘さんから当時の体験談をお聞きした。――以下はその要約である。

潘さんは小さい時から貧しく、大変な苦勞をしてきた方である。十六歳の時に両親を肺病で亡くし、弟二人と妹一人を

人力車を引きながら育ててきた。学校には行っておらず、現在も字は全く読むことができない。

一九三七年八月十五日、彼が二十歳の時、南京で日本軍による空襲があり、10メートル程しか離れていない所に爆弾が落ちたために、彼はそれ以来右耳が聞こえなくなってしまう。そして、その空襲の約四カ月後の十二月十三日、日本軍は南京を占領することになる。

占領の翌日、潘さんは国民党の兵士ではないかとの疑いをかけられ、日本軍に連行された。国民党の兵士であるかないかの日本軍の判断の基準はでたら目で、潘さんの場合、人力車を引く時にできた手の豆を、銃を持っていたためにできた豆であると判断され、また、仕事中に被っていた帽子の日焼けの跡を、兵隊帽を被っていたためにできた跡であると判断された。

彼は他の二十人程の中国人と一緒に、狭く寒い部屋に、水も食事も与えられず三日間詰め込まれた。その後、南京の中心にある中山路という通りに、他の三百人程の中国人と共に集められ、後手に縛られ、煤炭港という揚子江の港まで一時間半程歩かされた。

そして……、その煤炭港で日本軍は彼らに対して機銃掃射を行ったのである。悲鳴とともに人々の体が回りから倒れてきて、そのまま彼は気絶してしまった。

目が覚めたら明るい月が出ていた。彼は自分が死んで鬼になり、「死の世界」にいるのだと思った。回りは死体だらけで、彼の衣服は血にまみれていた。しかし、その血は他人の血であり、自分の血ではなかった。彼は運よく弾に当らず、奇跡的に助かったのである。

命からがら難民区にもどった後も、日本兵に生命を脅かされる毎日だった。ある時、彼の住んでいた家に三人の日本兵がやってきて、二階に住んでいた子連れの二十代の女性を強姦した。強姦の後、下に降りて来た日本兵は、彼に、女性の衣服や金目の物を自分たちの兵舎に運ぶよう命令した。彼がそれらを兵舎に運び終わると、その日本兵たちは彼に銃を突き付け、お前は国民党の兵士だろうと言って脅した。彼は必死でそれを否定して、地に頭を伏せ、両手を合わせて命乞いをした。すると日本兵は大笑いをしてその場を立ち去った。

また、彼は、毎日午後四時頃、たくさんの中国人女性がトラックで連れ去られ、翌日にはほんの僅かの者しか帰ってこなかったのを目撃している。

以上の話を、潘さんは涙を流しながら語った。そして最後に次のように付け加えた。

——話すと思ひ出して辛いので、本当はあまり話したくありません。今は中国と日本は友好的な関係になっており、日

本人も広島、長崎の原爆で大変な苦勞をしているので、あまり話したくないのです。私の人生はもう長くはありません。私たちの世代は中国人と日本人はうまく行かなかったけれども、今こうして、あなたたち、若い世代は仲良くしているのです、これからその関係を大切にして、平和な世界を作ってください。

日本軍にこれ程までの目に合いながら、日本人である私に對して、彼が広島・長崎のことを氣遣ったことに、私はほとんど言葉も無かった。私は潘さんの真の意味での人間的な「大きさ」「豊かさ」に心を打たれるとともに、今後、本当に中国や他のアジアの人達と良い関係を作ってゆきたいという思いが、自分の中に根付いてゆくのを感じた。

さて、潘さんと、前述の戦中派の日本人男性は、その「生きる姿勢」に於て、余りにも対照的である。日本人からひどい目に合いながらも広島・長崎のことを氣遣う、潘さんの人間的な「大きさ」「豊かさ」を思うと、在日の女性たちを目の前にしてもなお、その加害責任を曖昧にしようとする戦中派の日本人男性に對して、私はただ恥じ入るばかりである。しかし、彼らは私の父親、もしくは祖父の世代の人たちである。過去の戦争に對する戦後の日本人の加害意識の無さと、その無責任さは、一方で私のような戦後世代が、彼らのよう

な父親、祖父の世代の加害責任を明らかにすることを怠ってきたためであり、その意味で私のような戦後世代にも大きな責任があると言わざるを得ない。その結果、在日の韓国、朝鮮、アジアの人々に対する差別は相変らず存在し、また、何の罪悪感もなくアジア各国への買春ツアーが行われているのである。

今、私の手元に一冊の本がある。書名は『東南アジア男のひとり旅』。著者は庄子利男と言い、一九五七年生まれで、ほぼ私と同じ世代である。出版社は例のKKベストセラーズである。男たちはこの本によって、アジアのどこの国のどこに行けば、いくらで女性を買うことができるか、容易に知ることができると。取り上げられている国、都市は、香港、マカオ、台湾、韓国、フィリピン、中国、タイ、グアム、シンガポール、バリと、いずれも戦時中日本が軍事侵略を行うか、軍事的脅威を与え続けてきた所ばかりである。

私はこの本を初めて見た時、出るべくして出た本だという感想を持った。まさしくこの本は、現在の日本人男性のアジアへの関わり方を端的に表わしているからだ。すなわち、経済大国ニッポンの「円」の力によってアジアの女性を「物」のように扱う、差別、蔑視の姿勢が貫かれている。これは戦時中の軍事侵略とともに女性を強姦し、「慰安婦」として狩り出し、アジアの女性を「物」のように扱った、当時の日本

の男たちの態度と本質的に何の変りもない。その意味でこの本は、私たちの父、祖父の世代のアジアの女性に対する関わり方を、現代の状況に合わせて、戦後の世代がうまく受け継いだ「成果」と言えるだろう。

逆の言い方をしてみよう。この本を読んでアジアの国々へ喜々として女性を買いに行く男たちが、日本の過去の軍事侵略、性侵略の歴史を反省することができただろうか？むしろ、「戦争中は皆が被害者。『加害者』『被害者』の区別がない」とか、「誰が悪いということはない。戦争が悪かったんだ」という、従来日本人の取ってきた責任を曖昧にする態度の方が都合がよいだろう。もしくは、全くの「無関心」かどちらかだろう。過去の戦争に対する日本人の加害者意識の無さは、現在の日本の経済的優位のもとで、日本人男性のアジアでの買春行為を容易にしている。また逆に、日本人男性のアジアでの買春行為は、過去の戦争に対する全くの無関心や、責任を曖昧にする態度をもたらしめている。まさしくこのふたつは「共犯関係」にあると言うことができる。

私は「日本人」であり「男」であり、この「共犯関係」に埋没しやすい立場にある。しかしそのような自分の立場を検証しながらも、この「共犯関係」に正面から対決してゆくこと、それが今強く求められていると私は思う。

(たにぐちかずのり・アジアの買春に反対する男たちの会)

春の売買 図

「朝鮮人従軍慰安婦」問題

——川田文子さんに聞く——

青木喜代江



重い沈黙を破って、韓国の女性団体や女性の研究グループが、「朝鮮人従軍慰安婦」の問題で、立ち上がり、日本でも、この問題が論議され始めています。「従軍慰安婦」について、ノンフィクション作家、川田文子さんにお話をうかがってきました。川田さんは、沖縄在住の元慰安婦、チェ・ボンギさん（仮名）の半生を書いた『赤瓦の家』（筑摩書房）を'87年に出版しています。

——「従軍慰安婦」を知らない世代がもう多くなっていますが川田 日本軍が侵略して行った先々に必ずといっていいほど慰安所が置かれましたから、戦地に行った日本の男たちは、みんな知っています。ただ、日本の遊郭と同じように、慰安婦たちが貧しいがゆえに売られてきたのだらうと、多くの兵

隊が思っている節があります。しかし、実際には日本軍によって組織的につれてこられたのです。日本軍はシベリアに出兵した時、戦死者より性病にかかって戦線に出られなくなる兵隊の方が多かったといわれます。その反省から性病による兵力削減を防止するため、慰安所が考案されました。

また、南京虐殺にみられるように侵略地では、婦女暴行があたりまえといった風潮がありました。こうしたことでは軍が占領地支配を円滑にできないわけで、治安維持の目的もあつたのです。それで'38年、軍直営の「陸軍娯楽所」が開設されました。'44年、国民総動員の中で女子挺身勤労令が出ます。兵隊に出た男たちの労働力不足を補うため女も働けというのですが、それが国内だけでなく、当時植民地であつた朝鮮にも適用されたわけです。

軍需工場とか、被服廠などに狩りだされた人もいますが、朝鮮半島から挺身隊として出た約八割は慰安所に送られたといわれます。ですから、韓国では挺身隊は慰安婦と同義語で使われています。

——なぜ、朝鮮の女性なのでしょう

川田 朝鮮から連行された慰安婦は、八万とも、二十万人とも言われています。前戦から少し後退したところに慰安所は作られるんですが、朝鮮女性が約八割、あとは日本の芸娼妓、現地の女性も慰安婦にされています。

なぜ、朝鮮の女性が多かったかというと、「性病にかかっていない、健康な女性」が目的ですから、若くて性体験のない、植民地の女性に的がしぼられたわけです。十五歳から二十五歳ぐらいの女性が対象になり、一部既婚者もありました。日本の芸娼妓は性病の点で心配があったのです。

——ポンギさんも挺身隊の一人だったわけですね

チェ・ポンギさんの半生は、日本と朝鮮・日本と沖縄があった近代史をそのまま体現しています。

渡嘉敷島、座間味島、阿嘉島に慰安所が置かれました。この三島は最初に米軍が上陸した島で、住民の集団自決おきています。ポンギさんは渡嘉敷島にいましたが、ものすごい空襲があり、米軍上陸直後に当時七百名いた住民のうちの三百名が自決したのです。

ポンギさんの仲間は、女子挺身隊として、ほとんど強制連行の形で日本につれてこられています。軍需工場で働くとか、軍の炊事、せんたくをすればいいという形でつれてこられ、慰安婦にされたのです。朝鮮半島の町や村々で、慰安婦狩りは、この村は何人出せ、というように割当てで、警官と役人によって組織的に行われ、貧困家庭の女が連行されました。

——今、この問題が表面化したのはなぜでしょう

川田 日本が三十六年間にわたって朝鮮を植民地支配した結果としての強制連行、被爆者、サハリンの離散家族の問題など、一部を除いてほとんど戦後補償も行われず放置されており、日本の戦後責任が問われています。歴史から抹殺されようとした従軍慰安婦問題は、ようやく目が向けられ始めたばかりです。敗戦で朝鮮総督府は、挺身隊に関するあらゆる資料を抹殺しようとしたましたが、国会答弁でも明らかのように、その姿勢は現在も変わりません。一切伏せられているわけですから実態を明らかにするためには証言しかないわけですから、慰安所に関わりのあった方々は高齢になっていますから、証言を得るには今が最後のチャンスではないでしょうか。

77年、私が売買春について調べていることを知っている友人が、ポンギさんのことを教えてくれました。友人は、ポンギさんは日本の軍隊によって沖縄へ連れてこられ、それによ

って大きな損害を被っているのだから、国に賠償責任を問えないかと考えたんです。ところが、相談に行った弁護士は「日韓条約で、韓国に対する代償は済んでいる」ということが障壁となって、まず不可能だろうと言われました。

90年六月六日の参議院予算委員会でも本岡昭次議員(社会党)が強制連行に関連して「従軍慰安婦」問題を追及しました。この質問に対し「従軍慰安婦は、国家総動員法に基づいた徵用業務と関係なく、民間の業者が勝手に連れてきたもの」と答弁したのに対し、韓国の女性たちが一斉に反発し、真相究明の動きが広がりました。それに呼応して、日本人の間でも「従軍慰安婦問題を考える会」が結成されたのです。昨年の秋から準備にとりかかり、今年一月に第一回目のシンポジウムを開きました。在日の方と日本人と半々ぐらいの出席者だったんですが、反応がまったくちがうんです。在日の方からは今まで、「知ってはいいても語れなかった」という反応が多かったですね。在日の多くの人は父親が強制連行されていて、自分の家族史の中で、悲惨なことがあって、そこから想像すると、その何倍、何十倍、何百倍もおそらく悲惨であるう女子挺身隊のことなど、とても考えおぼえないという部分と、人のことより、まず自分のこと、在日のかかえている問題で考えなければならぬことがたくさんあるというんです。

——川田さんが売買春に関心をもっておられるというのは

川田 『赤瓦の家』の冒頭にも書いたんですが、日本の子守歌の中に間引きをうたう子守歌があって、びっくりしたんです。子守歌は子どもを寝かしつけたり、やすらかにするためにうたわれるかと思っていたのですが間引きをうたっているのです。これは、松永伍一の『日本の子守歌』(紀伊国屋書店刊)に書かれていて、それによると、日本の農村では間引きという人口調節が行なわれてきたわけですけど、間引きを免れた女の子が長じると子守奉公に出され、さらに長じると芸娼妓に出されるという系譜がある。貧困層では、一生働きづめに働く女と、一方に性を売って生きていく女に分かれるんじゃないかと言っているんです。

私は働く女として農漁村のおばあちゃんたちの聞き書きをし、また、部分的には女の性が売買されることについても取材していたのですが、一冊の本にまとめたのは、『赤瓦の家』がはじめてでした。元慰安婦であったポンギさんの存在を知った時には戦慄したものです。

従軍慰安婦の問題と、じゃばゆきさんや買春ツアーとつながって、現代にも同じ形があるかこの問題に入ってくる人もいますが、私の中では、そうかんたんにつながらない。それより沖縄戦というものが、どんな戦争であったのか、当時の植民地の人びとがどんな状態におかれたかということをもっと深く知ることの方にエネルギーをそそぎたい。そのことを

やらずに現代も同じだというふうに言うことは上すべりにな
ってしまふような気がします。沖縄の戦争の実相は何も伝わ
っていない。植民地に生まれたボンギさんが体験した艱難辛
苦は、私たちの想像力をはるかに絶している。植民地の貧困
は日本にあった貧困と次元がちがう。そうしたことが伝わっ
ていないんじゃないかという、そっちの方が強いですね。

男が女の「性」を買うということでは、共通性はあると思
うし、経済侵略を背景にして必ず性侵略が行われることは普

今年の四月から家庭科の教師として教壇に
立った江口凡太郎さん。北海道では初めての
男の家庭科教師ということで注目を浴びてい
る。

68年東京生まれ。中学・高校時代を茨城で
過ごす。ご家族はご両親と弟さん。高校の頃
から灰谷健次郎に魅かれ国語の教員になろう
と考えていた。が、北海道教育大学教育学部
旭川分校の国語科の受験に失敗、男は採らな
いだろうと冗談で書いた第二志望の家庭科に
合格していることが分かった時、浪人するの
が嫌になったのと、お母様を始め周囲の強力
な勧めもあって、家庭科に進ま
れたという。

やり出したら、暮らしてきた
つもりなのに、食べること、着

遍的な問題としてあるとは思いますが。従軍慰安婦の問題も、
そういう意味では現代に通じるものがあります。一方に仕事
をする男がいて、家事・育児をする女がいるという性別役割
分業がある限り、性が売買されるその構図は、絶対になくな
りません。その意味では家庭科を必修にする運動と従軍慰安
婦問題はつながっています。

「従軍慰安婦問題を考える会」の問合先 〒101 千代田区神
田錦町一の一の六 大手町共同法律事務所 福島瑞穂

ること、すべてが知らないことだらけ、「育
児学」での胎児期、乳児期の学習では親との
関わりを改めて考えさせられ、親がどんな気
持で自分を育てたのか、自分の生育史を思い



「オホーツクの
潮風荒く……」の

江口凡太郎さん

返しながら、また年の離れた弟さんの育った
過程も考え合わせて興味深く、これはいける
と思ったという。

また名取弘文さんの授業を知って、こんな
こともやっていいのか！と衝撃を受けた。

ちょうどその頃、新聞記者をしていらしたお
母様を通じてウイのことも知り、『We』と『家
庭科新時代』、『ひと』（太郎次郎社）が愛読書
となった。卒論は迷わず『食べ物を教える』
で感銘を受けていた熊本の桑畑美沙子先生に
師事。引き続き卒業後は熊本に留学、一年間
修行に励むことになる。

熊本でのたくさんのお土産を抱えて再び北
海道へ。

しかし、現実には厳しかった。引き算や定規
の読み方もわからず、就職のための単位を貰
うことだけしか頭になく生徒たち。どうした
ら授業を成り立たせることができるか、新米
家庭科教師は日々奮闘しているという。その
奮闘ぶりを今月号からの連載『オホーツクの
潮風荒く……』で書いていただきます。（河村）

安達倭雅子さん

イ
ン
タ
ビ
ュ
ー

—身体的に完全に大人だってことを

まず尊敬してほしい—

・インタビューー 青木喜代江

二週間前に“性教育”を考える人々とツアーを組み、スウェーデン、ノルウェー、オランダなど北欧を周って帰ってきたばかりの安達さん。向こうで見たり、聞いたりしたお話をうかがって、改めて禁止でおさえこまれた日本の高校生の“性”を考えさせられた。

12年間、電話相談員として電話の向こうの子どもたちと接する仕事をつづけてこられた。

毎日切実な声につきあっておられる安達さんから、先生や親には見えない子どもの“生と性”について、お話をうかがった。

(7月3日、原宿のグリーンファンタジア・ロビーにて)



■プロフィール

1937年、大分県に生まれる。明治大学文学部卒業。
79年、子ども110番[※]開設から相談員としてかわる。
※熟年110番[※]を兼務し、今に至る。
〈著書〉『私と彼とそのあいだ』(筑摩書房)
『電話の中の思春期一語り合う性』(ユック社)
〈共著〉『日本の子殺しの研究』(高文堂出版)
『もしもし聞いて』(潮出版)、『女の人権と性』(径書房)など。

◆電話の向こうの子どもたち

——「子ども一一〇番」というのは？

安達 「79年に開設された子どもの電話相談です。

今年20周年をむかえる「赤ちゃん一一〇番」というのがあるんですが、それが八年目の時、赤ちゃんが子どもになって、聞いてくることが教育がらみになってきたことと、ちょうど国際児童年だったこともあって、「子ども一一〇番」が開設されました。ダイヤルサービス株式会社という民間の会社の中にある電話相談機関です。

今、相談専用に使われる三台の電話をしていますが、夕方五時から九時までの四時間、ひっきりなしにかかっています。四人の相談員で当たっていますが、相談員同士、しゃべるとまもなくいくらい、受話器を置くと、ベルがなる。

——どんな相談でかかってくるんですか？

安達 「子ども一一〇番」とネーミングする時、実は「子ども」とつけて、どのへんを対象にするのかで、賛否両論あったのですが、小学生から高校生まで、時には大学生の相談も入ります。

男の子の場合は性に関する電話が多く、高校生で百本のうち七十本、中学生で六十本、小学生も六十本の割合です。女

の子の場合は、高校生で三十本、中学生、二十本、小学生、二十本ぐらいの割合です。

ただ、この数字をどうみるかですが、日本の性教育って生殖型、純潔教育型で、女の子はおさえこまれているために相談は少ないですが、実は、内容的には心配なものが多いんです。「妊娠した」なんて言うのはもう事態が動き出しているんです。

男の子の場合、性教育では放り出されているから、男は強くて、積極的でなくてはいけないという伝説から「性器が小さいんじゃないか」とか「こんな形でいいのか」という性器のことや、オーガズムのことでの相談は、悩ましくはあっても性行動上は停止してどうってことないけど、女の子の「妊娠したらしい」「中絶する」ということになる、男の子のレベルより深刻ですよね。

——具体的には、どんな相談ですか

安達 「妊娠したらしいんだけど、どうすればいいのか」とか「どうやって調べるのか」って聞いてくるんですが、もう、めっちゃくちゃなんです。妊娠週数の数え方を知らない。

たとえば、今度月経があるなって思う予定より少なくとも二週間みてなかったら、医者に行き、そこで判定してもらおう。生まないんだったら11週までに中絶してしまわないと、妊娠中期に入り、話がややこしくなる。だから10週頃までに

「優生保護指定医」という看板のあるお医者さんを捜せ。で
きるだけ大きな病院を捜すこと、お医者さんによつては、お
説教する人もいるけど、それは仕方ない、聞きなさい。それ
に、二度と同じことを繰り返さないような手だてを打たなけ
ればダメ。もっと避妊の勉強をしない、とか話をして、ど
うしてもどこに行くかわからない子には、だいたいの住所を
聞いて近所の私立の大学病院を含めて、大きな病院をいくつ
かおしえて、その産婦人科に行きなさい、と言います。

それから、中絶って「どんなことをするのか」と不安な思
いで聞いてくる子がありますが、知らないで怖いと思うことは
ありませんね。

実は、六月に性教育の勉強で北欧に行ってきたんですが、
スウェーデンでは、十四歳になると全員、学校で連れて行っ
て、洋服を着たまま内診台に上がってみるんですって。知ら
ないで、想像で恐怖するより、事前に原寸大を理解させると
いう、これを教育とか大人の責任とか言うのでしょね。

◆だれのための「避妊」か

——日本では避妊を学校でキチンと教えているところは、あ
るんですか。

安達 妊娠能力をもっている子に、避妊を教えるのは、性教

育の初歩だと言うと、「それは何をしてもいいということに
なるから、イヤだ」というのが日本の大方の大人の考え方
です。

私の上の娘は、都立高校だったんですが、女の先生で「パ
スポートを使わない生涯を終わる人はあっても、避妊をしな
いで生涯を終わる人はない」が主張で、綿密な授業をして下
さったんです。子どもにノートをもらったんですけど、たと
えばこんな授業をしているんです。事前にする避妊——ピル
や基礎体温のような避妊法の方がいい。突然その場でやらな
ければならない避妊には、こういう困難なことがある。ペッ
サリーなど事前にできるが、おしなべて日本ではあまり使わ
れていない、とか。

先生方の集まりで私や相談員が「性教育について話をし
て」と言われれば、「性交と避妊」を重点的にやります。で
も先生方はやはり怯えます。私たちが行って、生徒に話をす
るのはまだいいんですが、自分が話して、もし、生徒が実験
したらどうするか、と。

こんな話があります。五、六年前スウェーデンに行った時
ストックホルム大学教育学部の女子学生に会ったんです。通
訳を通してスウェーデン語で話しました。学生寮に住んでい
て、前の部屋の男の子とカップルなんです。「結婚するの？」
って聞いたら、「それはわからない」って言って、「彼が二十

二歳、私が二十歳だから、三十ぐらいになってこれでお互い人格が大丈夫だと思っただけでも遅くない。それまでは事実婚でいい。」「避妊は、どうしてらっしゃる?」って聞くと、「ピルです」って言うんです。「失礼だけど、いくつから飲んでる?」と聞くと、「十六歳」だっていうんです。そして、「十六歳になった時、体が成熟してきた自分は誰かとセックスをしたくなるかもしれないと思った。でも、大学にも行きたいと思っているから、子どもは当分いらないうと思った」というんです。彼女の場合、ピルを飲みはじめる時、性的な相手がいるわけではないんですね。結婚しているとか、恋人がいるとか、そんな事情ではなくて、自分の性的な成熟の自覚に向かって飲むんですね。

高校生たちに避妊を教えると、セックスをするわけじゃないのになぜ教えるんだって言うでしょ。この考え方について彼女の考え方は示唆に富んでいますよ。

これは避妊を考える時の根本的な考え方の違いです。考え方の矢印の方向が違いますね。相手ができてから教育すればいい、テクニクをおぼえればいい、というのが一つの考え方です。矢印は他人の存在に向ってあるわけです。もう一つの矢印は、能力にそって、つまり成熟に合わせて、きわめて自立的に、個に向かって……。避妊については、彼女との出会いが、私にとってはたいへんなカルチャーショックでした。

たね。

◆「禁止」だけでおさえこめない性

安達 仕事の中で考えさせられるのは、「妊娠したんじゃないか」と言ってくる女の子たちに聞いてみると、性交した時期が、排卵の時期で、これはとてもナチュラルなことですね。大人たちは、文化的、後天的なもの、つまりもっと生活の瑣事に左右されて性交しますが、子どもたちはその点人間としてナチュラルな、すなおな感情で性交しますね。私は、子どもたちに、私たちは排卵期に性交したくなるという、その事実を知ってほしいのです。自分たちがそうできていることを知っていれば、排卵期の知的なコントロールが必要とあれば可能になるんじゃないかと思うんです。

これも、性交するはずがないから、教える必要ないということではないと思います。

——母親たちは、そういう教育はうけていませんよね。

安達 母親たちはおそろななかったかもしれないけど、今の今を生きているということから言えば、考えるということとはできるわけです。教育を受けなかったということではなくて、それ以降おこたっていたわけです。勉強しなかったら語れないのです。ですから語れないのならだまっていた方がいい

い場合もあります。子どもたちは失敗しながら考え、自分の生き方を切り開いていくだろうと思うんです。

大人のかかわり方次第で立ちなおれない子どもをつくってしまします。「取りかえしがつかないのよ、だから気をつけなきゃいけない」って言うけど「取りかえしがつかない」なんてメッセージをあたえるのなら、黙っていてほしい。どんなに失敗しても、取りかえしのつくものなんですね。妊娠して、自殺した少女がいます。それは大人が殺したんだと、私は思っています。避妊をして防ぐべきだったのに、妊娠してしまった時、緊急避難として、あるいは望まない妊娠の治療として、あるいは文化として私たちには中絶があるんです。それはうれしいことではないけど、そうやって軌道修正していきけるわけです。なのに「取りかえしがつかない」、「恥を知れ」って言われたばかりに、少女は死んでしまったわけです。先生方も、勉強しないで言うんだったら、事態が悪くなるから、言わないでほしいですね。

男女の交際を禁止するとか、中絶は悪だとか、性交したものは学校におけないとか、そういう考えが少女を殺していくものだし、子どもたちを堕落させていくものだと思います。「なんだ、これしき、大丈夫だよ」って言うのと、手あたり次第につき合ってもいい、性交してもいいと言ったように聞き違えて「そんなひどい考え方はない」「そういう考え方は危

険だ」って言われますけれど。そうではなくて、性の世界の失敗はいくらでも立ち直れる、軌道修正できるってことを教えなければならぬのです。今はただ、失敗したら大変とだけしか教えていないでしょう。

相談員をしていて、何が一番しんどいかというと、相談の中身によっては自分が「ズタズタに切られる」ってことです。つまり自分のキズついているところをかくして電話に出ることはできないのです。自分がダメな時はダメなんです。しかしそれはそれでいいと思っています。

自分が人生の中でつらい時期に仕事をしていて、つらいと思うような感覚は、子どもと一緒に考えたり、学んだりしているからだと思うんです。性の分野の相談や教育も、結局は大人と子どもはちっとも変わらないという自覚がスタートラインなんです。

◆身体的な「大人」

安達 先生方からよく、「性のことを、子どもたちに話す場合のサンプルになる話をしてほしい」と言われるんですが、そんな時、「私も、みなさんも、何が性的に幸せかを求めている人としては同じです。ただ、大人と子どもの違いって、性的なトラブルでいえば、大人の方が解決能力をもっている

にすぎないし、大人は性交しても退学にならないぐらいしか違うところはないんじゃないか」って言ったら、とても怒っていました。性的能力は、生きている証拠だと言ったのです
が通じないんですね。

——そのへんの通じなさは、何でしょう。

安達 彼らが「人間」であるという尊敬がないんですね。

私は背が小さいから、私より大きな小学生の豊かな体つきを見ると、素朴に「性的人間」として尊敬しちゃう。

六月に北欧に行った時、スウェーデンの性教育協会で聞いた話ですが、エイズ予防のために、今年の夏、この国のバスポートをとる未成年者には全員、コンドームとコンドームを買う方法を、何カ国語かで書いたブックレットが入っているブックレットを配るって言って、サンプルを一つくれました。

ツアーの中の一人の女性がそれを見て「まあ、こんな不潔なもの、この国はふしだらな国だ」「野菜を食べる日本人とは、もともと血が違う」って言って、捨ててしまったんですね。「この国に学ぶところは無い」って怒ってしまったて、私などは、こまったな、この方と話さなくてはいけないなと思っただけです。

ところが翌日、シュープリリン・ディナークルーズ（エビを食べながらの遊覧船）に参加したんです。船の中のディスコで高校生たちが踊っていたんですが、ダンスの好きな彼女

は、そこでいっしょに踊って、後でそれが高校生だって知って、昨日の「コンドームの件」を納得してしまったのね。見ることのすごさだと思いましたね。

先生方は、毎日子どものそばにいて、子どもを見ているわけですから、身体的に完全に大人だってことを、まず尊敬してほしいですね。

地球の歴史から見ればつい最近と言うべき石器時代、今の中学生ぐらいの年齢の子が、初潮や精通があれば、子づくりをすすめたわけです。子どもは、その集落が生きのびるための労働力になるわけですから。

ところが文化の発達は、身体的には大人でも、「社会的に大人でない」というひずみをつくったわけです。そして、それに対する「手だて」がない、「教育」がないのが今の状況です。北欧などでは、それを考えはじめているんですが、日本はまだ、それを禁止で押さえ込み、処罰でなんとかなっている。当り前のことですが性的に能力を持っているわけだから発揮する可能性は充分あるという単純明解な認識だけでも必要ですね。

◆高校生の売春構図

安達 ストックホルムには、二千人の売春経験者がいると、

ビヤネール多美子さんがお書きになったものの中にありましたが、買売春する人の集まる通りがあって、私もそこを車で通りました。車の運転手さんが、彼女たちのことをよく知っていて、「あの人は昼間は学校の先生をしている」とか「地下鉄に勤めてる」とか言っていました。

翌日、市当局に行って話を聞いたんですが、スウェーデンでは、売春は個人の権利として、違法ではないんですが、売春経験者の今後の社会適応が悪いと言っています。つまり、麻薬に走ったり、精神的な症状がでたり……と。職員が何人かずつ、三交代で夜、パトロールして売春婦たちと話をして対策を考えているようです。

その方が言っていたんですが、売春には、二通りの型があると言っていますね。一つは今日、食べるお金をえるため身を売る売春コロンビアスタイルです。スウェーデンは福祉が発達していますから、飢えるということは絶対ないんですが、人間はよりよい生活をしたいという経済的上昇志向をもっているのです、ここに売春の隙間があります。

もう一つは、「ボーイフレンドのために売春をしている女性がいる」と、言っています。男性に強制されているわけではなく女性の方は愛情だと思っている売春スウェーデンスタイルです。これは「ヒモ」ではないと市当局の方は言い張っておられました……。

生活は満たされているが、人とのコミュニケーションに貧しくて、孤独をもてあまして、その孤独が深ければ深いほど一挙に解決できるのは性交ではないかと錯覚するのが人間ではないかしら。売春という形で性交した人はいなくても、そういう孤独の癒し方、癒されることに夢をかけるのが人間だと思っんです。

スウェーデン型の売春は日本の高校生の売春と類似していると思うんです。家は相当の生活のレベルをもっていて、なんの不自由もなく見える子たちが案外売春をしているっていうのは、スウェーデン型だと、とてもよく理解できるんです。

——買春をする側は、どうなんでしょう

安達 たずねてみたんですが中堅サラリーマンだって言うんです。男性の場合はだいたいがきまったパートナーをもっている。結婚している場合もあるし、事実婚もある。子どもがいる場合もある。ところが男性が、この人の場合はうまくいっていない、他の人から見たらどう思われるかという確認に、男性性の確認のために、買春して女のところに行くって、市当局の担当者は言うんです。

そうすると、「それは永遠の男性のテーマですか」って聞いたんです。そうしたら「セクシャルアイデンティティの未発達な男性は、そういう形でしか自分を見ることができない。だから複数の女とかかわりたがる」と言っています。一枚

のカガミで見る能力を持ってないから、二枚の合わせカガミで自分を見ようとする。なぜ、男が買うかという、買売春構造のポイントがここにあると彼女は言うんです。

——日本の場合も、当てはまるんでしょうか。

安達 当てはまると思いますが難しい課題ですね。日本の場合、たとえばテレクラ（テレホン・クラブ）で、男と女が会うでしょ。「初めは映画みて、ホテルに行こうということになり性交する。帰りに一万円くれると言うから貰っちゃった。とてもいい人だし、また行くんだ」と言う。「それ、売春よ」と言うのと、「えー、うそー。男の人は、みなおごってくれるし、お金、くれるよ」なんです。「結婚」という形が、男は働いて、女は賄うという、金銭関係でみれば、お金を貰うことが愛情の証と思うのと同じ構造なわけです。

「だって、すごくやさしくしてくれるよ」って言うので、「やさしいってなに？」って聞くんですけど、そこを責める気がしないのは、結婚している男女の関係だって、本当のやさしさなのか、セレモニーなのかなんてことは、見やぶる術もないし、いつもそこで疑ったり、信じたりしているわけですよ。そこで売春している少女と私のちがいが、さてどれほどあるかって言ったら、ないのね。

——深刻な相談ばかりですか

安達 たわいないおしゃべりも、けっこう多いんです。「今

日ネ、あそこでネ、手を振ったんだけど、気付かないで、いじめられないかしら……」なんて、相手になっているとキリないような、質問でも相談でもない、おしゃべりも入ってきますよ。

私は、これは家庭の中の対話が、勉強に役立つものと、役立つもないものに分けられているせいだと思っています。「なんで雨が降るの」とか「今日、あそこでネコが死んでいた」とか話すと、親から「あっそう、それより宿題しておきなさいよ」と言われる。そこで満たされるべきものが、満たされない。そこを切られると孤独ですよ。

おしゃべりなんて単純な言葉で表せないほど、重要な意味があることを、私たちは忘れてしまっていないでしょうか。おしゃべりは、家族の実在証明だと思うんですが、家族団らんを電話の中で疑似体験しようとする子が、繰り返し、繰り返しかけてきます。大きな孤独を感じますね。

いっしょにおしゃべりをしてても、私たちは家族の代用品としての役目しか果たしていかないのではないかと思う時、すごく悲しいですね。子どもが本当に欲しているおしゃべりは家族の実在する団らんなんですから。

発言

「買春ツアー」と

女の痛み

桑畑美沙子

五坪程度の畑にトマトや茄子が小さな実をつけはじめるところになると、伸びた枝を副木にくくりつけたり、脇芽をかきながら思いだすことがあります。

急ぎの原稿を書くため、家の仕事をばたばたと片づけ、今や机に向かおうとしている時でした。電話のベルがなりました。「美沙ちゃん、ちょっと良かね」、子どものPTAで知りあった、近所のKさん。夫と酪農をしながら、七人家族の主婦・本家の嫁・PTAの役員と何役もこなす、明るくて元気な働き者です。しかし、その日の声は、何だか変です。「なんかあったと」「……ちょっと行つて良かね」。

玄関に入るなり、彼女は泣きだしました。ただごとではありません。でも、何の事態がおきたのか見当もつきません。理由を聞いて声を失いました。夫が台湾への買春ツアーに出かける計画が持ち上がっているというのです。

「娘のような、若か子と寝なしに三晩てよ。病気も心配かば

ってん、そんな姿が目にもちらつく。私は、そぎゃんとはいやー、我慢できん。今までだっちゃ、おかしかて思うこともあったたい。ばってん、そんな時は、後からわかったとて、今度んごと、わかつとて行つたことはなか。それに、そんな時もわかつた時点で、ぎゅうぎゅうの目にあわせてきた」「そぎゃん、嫌なら、行かんで言うたら」「言うたつよ。ばってん、聞かんとよ。おつがこん家のオツナ（大黒柱、親分というような意味）て言うとよ。農家嫁で、情けなかね、二十年近く、働きづめに働いたっちゃ、こぎゃんだん」「乳なんか搾っちゃおられんたい。さっき、じいちゃんとかばあちゃんに、ちょっと話がありますて、言うてね。『いくら、行かんでくれて頼んだっちゃ、Nさんな聞きなはらん。私は実家に帰つことになっかもしれまん』て」「ばあちゃんな『あん馬鹿が。ばってん、男はそぎゃんもん。Kさん我慢してはいよ』て言わすとよ」

彼女は、綿々と語ります。結婚にいたった経緯。嫁いできた当時の大家族の様子。じいちゃんとはあちゃんとの確執。生理とどしゃぶりのなかで田植えをし苦しかったこと。そんななかで芽生えた夫への性愛。子どもたちへの情愛……。話を聞きながら、足を地につけて人生を切り開いてきた、彼女の強さと優しさを改めて感じることでした。

その話のなかに、腰が抜けるほど驚いたことがありました。同じく、子どもを通じて知りあった近所の方のことです。なんだか元気がないわねと感じてしばらくすぎたころ、姿を見受けなくなり「別れなはったてよ」という噂を耳にしたのです。離婚の理由が見えてきました。夫が、韓国への買春ツアーにでかけ、帰ってきたら「良かったばい……」と微にいり細にいり、ツアーの様子を他人に語っていたというのです。その後、しばらくすぎてから、妻が仕事で知りあった男性に心を許し、それを知った夫が怒り、修羅場が何回か繰り返された後、妻が子どもたちを残して家を出たのだそうです。

予断と偏見かもしれないけど、買春ツアーに出かけ、それをしゃべる神経の男との家庭生活、推して知るべしです。ツアーの様子を他人に話すのですから、妻にはもっと露骨な描写で話したでしょうし、それを聞きながらの夫婦生活がどんなにか味気なく情けなかったことでしょう。他の男性の優し

さに心が揺れるも当然です。農村地帯で暮らす女たちの痛みが、びんびん響く思いでした。同時に、何も知らずに、噂を聞き流していた自分が恥ずかしくもなりました。

「あん人達んごとなるとが、恐かったい。そりゃー、腹んたつこともいろいろあった。ばってん、別れたくはなか」。

結局、その日暗くなって、「嫌なら嫌で、そんあんたの氣持がわかって貰えるように話すしかなかっじゃなか……」という私の言葉に送られ、「子どもたちが心配するけん」と彼女は家に帰りました。

やきもきしながら二、三日過ぎました。彼女からの電話です。「あんねえー、Nさんがツアーを断んなはったつよ」、明るい声です。彼女の家にでかけてみました。夫婦で乳搾りをしてながら、彼女の表情は底抜けの明るさです。「良かったねー。それにしても、どうして？」という私の間に、彼女は、乳搾りなどの仕事はストライキする一方で、「最後って思うて、自分の氣持を話したとよ」。Nさんが照れくさそうに笑いながら「おらんと、やってゆけんもんな」。

蛇足まで書くならば、予定通り、他の人々はツアーにでかけました。「しよんなかたい」と諦め、「良かなあー、あんたんとこは」と羨望し、あるいは「Nさんな、尻にしかれとんなはっとたい」と噂する妻たちの中で一人、Kさんに相

発言

「ミス・長崎」と

ばってん・うーまんの会

津田尚美

談した人がいます。その人もKさんに励まされ「行かんで欲しか」と夫に訴えたのです。その夫は、立場、上、ツアーには同行したものの買わなかったのだそうです。他の人々の「馬鹿ばい、あん人は」というあざけりの中で、その妻はKさんに語ったそうです。「良かった、頑張ってるみて」と。

今でも、農家の嫁は忍従を強いられています。なかなか状況は変わりません。しかし、彼女達のように、いわば「命を賭けて」周囲の人々を変えている人もいます。それ故に、変わらないように見える農村でも僅かずつ動いているのです。世の中を変えていく筋道を改めて学んだことでした。

一九八九年の春、長崎は旅博覧会開催のため「ミス・旅博」を募集した。公共の機関が審査員の主観的な美の型を基準にして、順位をつけ、賞を出す、というのだ。例年「ミス長崎」は観光地にはかせない、華となる、という。

何故若い女だけが華なのか、何故未婚でなければならないのか、生まれもった容姿の美しさを競わせる、これこそまさに男の価値感で決められた、男社会の慣行にすぎない。

観光地としての長崎の宣伝のため、客をもてなすための存在に必要ななら、その役割は、長崎の歴史を知り、美しさを認

め、誇り、未来を語れてこそであり、外国語でも案内でき、つまり案内好き、宣伝上手こそ競うべきであろう。それは若い女性にのみでき得ることではなく、男性もまた躍動的で明るく、華やかにでき得ることである。

「ミスコンテスト」の中にみる、女性蔑視とは、二十歳でもミセスは駄目、三十歳はもう、性の経験があったらどうかから駄目だ、という処女崇拜の根からみられる年齢制限である。

もう七、八年前のことであるが、コンテスト最終段階で、何人かのミス達を並べ、審査員の一人が耳をみせるように言

い彼女等が横をむいて髪をかきあげてみせた、という。彼女等は下世話に耳の型で女のセックスがどうのこうのという話は知らず、男同士では、知るものは知っていても口に出さず問題にならなかっただけにすぎない。

「ミス」の下地に何があるか、規定に両親の職業を明記させ、社交界の女性をのぞき、控室でたばこを吸っていたことで格下げ、とは人間の人格を無視した、人権問題である。「バスト」「ヒップ」のサイズを規定に入れて、競わされた行事でも、何年もくり返し行なわれてゆくうちに、女ですら「何故これが女性蔑視なのか」といい「女が美を競って何故いけないのか」と疑問もいだかず「例年の催し」となっていた。

私たち「ばってん・うーまんの会」では「抗議します」の書き出しで、目につく差別について、あちこちに「抗議文」を送ってきた。「ミス旅博」に関しても会報と一緒に、県へ、市へ、旅博事務局へと送り、また会いにも行った。

まず市の婦人対策室、室長から私たちと同じ視点で「旅博紀行」にのった「旅博を彩どる女性達よあつまれ！」に疑問の声が出た。つづいて市議会では高瀬あつ子市議が同じく「ミス旅博」について質問し、本島市長が「ミス〇〇選考は女性の商品化につながり遺憾に思う」と発言した。TV局がミスコン論議を報道したが、その中で、K大学助教授は「ミ

スコンはあれは遊び、非日常の領域、それを日常の論議で斬ると味気なくなる」という。遊びでなら差別してもかまわないとのことか、旅博関係者のコメントは「世界で普遍的に行なわれていることで問題ない」。よそがしているからうちがしてもかまわないとは……。

私たちは、今年も「ミス長崎」募集が始まる前に高瀬市議をまじえて「ミス長崎」について勉強会を開いた。そこには観光協会からも出席され「ミス長崎は観光地としてはなくせない」とのことだったが、今年は募集要綱や審査方法を改善して行うということで、年齢制限、バスト、ヒップ、ウエスト、両親の名前の明記を外し「コンテスト」の名称も省いた。私たちの意図がわかってもらえたのだろうか、言わない前より良くなって「先は明るい」とみていいのだろうか。今後は一年間の使いすてでなく、男女共に正規に採用して観光長崎の「スペシャリスト」として養成することを要求したい。

どこでもしているから、伝統だから、慣習だからということで行われていることを、もう一度男女平等の視点で、見直してみよう。あきらめず、気楽に。

〈事務所〉

〒850

長崎市古川町3-11-603

津田尚美方

☎ 0958-24-5076

MIKE

相談室から

鈴木みち子

知らない間に相談室とやらを始めてから十年もたっちまったんだなあ、とWeからの「原稿はまだですか?」の速達を読みながら、しみじみと思ったの。十年以上前から金髪にしてる私の髪を「十代の子がなつきやすいようにそうしてる」とアラヌかんちがいをして宣伝してくれた人もいる。トンデモネーヨ。イギリスのロックグループにしよく発されてやったんだよ。JAPANってグループがあったの知ってる? デヴィットシルビアンで究極の美の人がいたの知ってる? こーゆーことも知らないで「子どもがなつくから」とはよく言うよ。なつかない子もいるんだよ。人

の好き好きだけどさ。もっとメーワクなのは私の所には究極の性の相談ばかり来るんだろと思われることよ。人の言う「十代の究極の相談」ってナンだと思う? そーゆーインタビューに来た人に聞いてみたわよ。
「究極ってどんなの?」
「サァー」と考えたあげく「妊娠じゃないんですか?」ときた。大体大人ってヤツは(ガキみたいのも大勢いるけどさ)十代が性交で失敗するのを心配するふりをしてのぞき見をするのが多い。それでも少しのぞきたくなる。バカなマスコミは、「どうして妊娠しちゃったんでしょねー」とワケ知りに聞く。「そ

んなこともワカンナイノカヨ!」と水の一ぱいもひっかけてやりたくなるといふものだ。「ヒニンをしないで、あるいはヒニンに失敗したからでしょ」と答えれば「ハァ?」と言う。更にオイウチをかけるように「デモ:」と言う。大人が十代の人性(セクシュアリティ)をただこんな風にしかながめられない二十年一日の大人のノーマイズのしつこさと思いつ込みのヒドサが変わらなけりやいつまでたっても日本の性教育なんてオソマツの限りだと思ふよ。

人が何か書けば「パーセンテージが出ていないから実態がつかめない」という教組のオバハン。数しか信用出来ないような人は感性とかイマジネーションが欠落してるんじゃないだろうか。「一人一人ちがう」とセクシュアリティの本線をちゃんと学んだのかしら? 大人もヘリクツばっか学習しないで他のオベシキヨウをしないといまにしつべ返しを食うわよ。

そうそう、相談室の中身の話だったっけ。私は目に角立てて口角泡をとばして人に説教する気もドナル気もサラサラなくて、ちょっとオナヤミに休けい時間をとってあげること

くらいしかしてないし、それっきゃ出来ない。
(つていうとオリコウな人からしかられるんだよねー。ノリが軽いって)

夜中に「女の子紹介して」と高校の男の子からよく電話がかかって来る。

―家はアッセン業はしてないよ。と私

「だってともだちが言ったもん」と男の子。

―誰が言ってもしてないよ。女の子くらい自分で探さないよ。

「探せないから……電話してる」

―別に女の子いなくたっていいじゃん。

「そーかなア」

―そーだよ。死んぢやうワケでもあるまい。

「そりやそうだけど」

―女の子どうしたいの？

「やりたい」

―宿題か？

「バカ」

―ナーニ？ ナーニ？ (知ってて言わせるミ

ケコも悪いにゃ悪い)

「アレ」

―あれって？ THATかー？

「すんげーバカノ」

―ちゃんと言いな!!

「SEX」

―オマエナー、パートナーは自分で探して、

自分でイイと思って、相手も「絶対アンタな

らイイワノ」っていうまで努力してみつける

もんだよ。

「そんなもんか？」

―そんなもんだよ。明日から足に豆つくって

探しナノ。いいね。

「キツイ」

―ナマケモノー。

大かたこんな風なただけどさ。こーゆー男の子は多いのよ。人に紹介してもらった女ならEASYだろうって思ってるのよ。自分で責任をもつて人と対応するのがイヤだから、

後がメンドクサイからその部分だけは人にち

よいとごやっかいになれば人生に×はつかな

いだろうと思ってるんだ。オヤジと同じだ

よ、これじゃ。今時の女の子は大人が思っ

てる程EASYじゃないわよ。だから、アホら

しい、アッシーくん達のミツグくん達が登

場して涙ぐましい空努力をするんだわ。

あと深夜に多いのは、マスターシヨンの

お手伝いをしてちょうだい、というやつ。

世に言うイタズラでんわとはちよいとおも

むきが違う。

―アンタ、どこからかけてんの？

「自分の……へや……ハア!!」

―自分の電話もってんの？

「コキ、コキノ」

―コクなよ、失礼だよ。

「ちがう!! ってば。コキだよ」

―年寄りかア？

「電話の子どもだよ。やーだナー。シラケル

ナー」

―なんなのよつ。ヘンなでんわかけてくるん

じゃないよ。アンタあした学校に間に合う

の？

「間に合うよ。授業中寝てるもん」

―イネムリしてもボッキするよ。

「するする、この間恥かいちゃったよ」

―今カカないの？ (知らない人のために、マ

スターシヨンは、カクとかコクとかいうん

だよ)

「もうやめた」

―なんでこーゆー時間にこーゆー電話するの

さ？

「なんでって？」

―あたしそーゆー商売してないもん。あんた

いっつもカク時誰かに電話するの？

「しないよ」

「じゃなんで？」

「なんでもねー。困ったねー」

「困るような電話するナ。早くやって寝な。」

これもまた、早い話が強引にやれば女はEASYだと思ってる男の子の実態のうちのひとつ。今日ビの男の子は、どこかのオジサンたちの青春時代のように「マスをカクと、バカになる」なんてキョーフ心はもう持っていないよ。もつとも「一日何回までならいいですか？」と聞いて来た子もいたけどさ。「好きだけやれば？」と言っておいた。

こーゆートボケタ電話はともかくも、男の体って女の体以上に学習されていないんだわ。もつとも「外に出てるんだもの見れていいわよ。ナガめて学習すれば」って言うゴークツもいるけどさ。

そううまく行かないのが青少年というもので。青少年の時にセクシュアリティの学習のつみのこしをすると「不倫にアコガレルエツチなオッサン」になって、いわゆる下半身の性の追求に血道をあげることになる。リベラルなことを言ってるオジサンたちの中にもけ

っこういるんだ、この手が。うふふ！

体毛の濃い薄い、長い短い、背の高低、ホーケイみたい。こーゆーのを見て、ナニサ！男の子なのに！！って思う人がいたらそれもセクシャルハラスメントかも。

長い、短いというので、ハア！という相談があったからひとつ。高二の男の子。

「あのねー 言にくいんだけど」

「ナニ？ また、かけ直して来てでもいいよ、と私。」

「あのー、多分長すぎるの……」

「ナニが？」

「長さが」

「なかなか出ないのか？」

「ちがう」

「うんこの長さー？」

「チ・ガ・ウ!! アレの長さ」

「ワッカンナイカラー。ちゃんといいな」

「ベニス……キヤーノ（ナニがキヤーだ）」

「計ってもらったの？」

「ううん」

「彼女がそういうの？ 誰かのと比べたの？」「女なんていないよ。比べてない。自分で計ったの」

「ナンセンチあった？」

「二十五センチ」

「ゲッ！ どーやって計ったのさ？」

「巻尺で……」

「どこから」

「タマのうしろから」

「ベニスってタマの前からだよ。」

「ゲッ!! 短くなっちゃった」

「いいじゃないの、何センチだって、長くてカンチガイでもうれしかった？」

「少しねー」

「少しかよ？」

「うーん、ずい分とかナー。だって大きい方がいいんでしょー？」

「誰が」

「女の人」

「そりやゴカイというもののよ。小さかろうが大きかろうがうまく行く時はうまく行くしさ。そーじやない時は絶対うまくいかない、大きい方がいいって誰がいったの？」

「本とか」

「保健の本か？」

「何考えてんの？ 雑誌とか、ポルノ小説とかそーゆーやつ。やっぱ大きくてステキって言われたと思うじゃん」

「言った方はオセジかもしれないよ。」

「フツーは何センチなの？」

「決まりつてないもの。」

「基準ってあるでしょ？」

「ないよ、そんなもの。そんなことばかり考えてると心がイジケルからやめなよね。あんたのはあんたのいいんだからさ。」

「そうなの？」

「そーだよ。」

「でも不安だよ。イッキに短くなっちゃったんだもんよ。」

「知らないよ、計りまちがえたおマエが悪い。」

「そりゃそうだけどさー」

「これでいい、これでいいって思うしかないでしょうが。」

「女にキラワレない？」

「キラワレないよ、そんなことで。他の事は知らないけどさー。」

「本ただねー」

「本トーだよ。もしかして、アンタのを小さくとか言う女がいたらサイテーだからね。」

「ワカタタヨ」

「んじゃね。」

十年一日のごとく、「何センチですけど、いいんでしょか？」というのがベスト5の中に入ってるんだわ。ここ二年位、やけに多いの。大人は短くたってうまいこといったり、テクニクでごまかしたりできるんだらうけど、青少年はそううまくは行かない。

自分勝手に「TOO SHORT」と思い込んだら、カラから脱け出るのにエラく時間がかかるわけ。人には大声で言わなくともコンプレックスの内には入っちゃうと思うよ。日本特有の妙なキチョーメンさが「性教育」にも反映されていて、ナンデモ、データと数字にこだわすぎるキライがあると思うんですけどさ。

大人のつくった数値にナマナましい青少年はオビエるんだよ。もう性教育の中に数字をもちこむのはやめにしたら？ 少しもSEXYじゃないわよ、そういうのって。大人の価値観で性を（セクシュアリティのことだよ。

HOW・TO・INTERCORSEのことじゃなくて）規定出来るわけじゃなし、人格を数値で評価出来るわけでもないし。

いっつも言うんですけど、日本の性教育のヒドサの根源は「オトーサンとオカーサンがフトンの中で」がイントロになってるからなの

よ。ここから差別が生まれるって誰もいわないのがVERYフシギだよ。性教育なんて、教室の中でムリヤリ教師がテレながらノルマみたいになすからロクなことにならないんだ。

「性」なんて語ろうと思えばどんな科目でだって語れるのを、学校は知ってか知らぬか私にはわかんないけどトボケる。教師だから今更オペンキョウとか、知りませんと言うのとはともないと思うんだろけどさ。もっとも、子どもたちにカッコイイ性教育をしたい！なんて考えてる内は考えてる人の人性もうたがわしいもんだわ。

まず、大人のアナタノ、ソコのアナタ!! 自分のセクシュアリティのカクニンを。自分のセクシュアリティのカクニンをすると自分の日の丸度も同時に見えて、秋の夜長をすすにはいいかもよ。

じゃばゆきさん

大阪府立旭高等学校 二年生

大阪府立旭高校で、昨年九月に開かれた文化祭には、「家庭科」が教科単位で参加しました。二年生の女子約三百人が54班に分かれ、女性差別、環境、障害者問題など、社会的テーマについて研究発表がありました。ご担当の宮崎美代子さんから、各班のレポートと感想などの資料を送っていただきましたので、その中の「じゃばゆきさん」をとりあげた8組3班の合作の一部を紹介します。

(編集部)

◆買春ツアーに出かける日本の男たち

一九八〇年代に入って、日本人の海外旅行が急速に増えだした。そのうちの三分の一が台湾・韓国・東南アジアを旅行先を選び、しかも80%以上を男性旅行者が占めた。それが何を意味するかは、容易に推測できた……。

買春ツアーというのは、視察旅行、報奨旅行、親睦旅行などに名を借りて、その国の女性の体を金で買いに行く旅行のことである。日本人の団体による買春ツアーは、まず台湾からはじまった。かつて五一年間にわたって台湾を植民地として支配してきた日本人が、四半世紀もすぎないあいだに、今度は色情に

眼を輝かせて台湾に殺倒するようになった。

また同時期、韓国にも出かけた。日本人観光客は、それほど遠くない昔に韓国人の従軍慰安婦を二〇万人も強制連行し、皇軍の矢立てにした過去をきれいにわすれ、チョゴリの下に女性に眼を血走らせた。さらに新しい刺激や変化を求め買春ツアーの範囲は、広がられていったのである。

マニラの大きなホテルでは、連日五〇〇人ものホスピタリティ・ガールが裏口から出入りし、従業員専用エレベーターで日本人観光客専用の特別の階に消えていく。日本人以外の観光客は、その異様な光景をほとんど眼に

することがなかった。日本人観光客のためだけの特別なはからいであつたからだ。

バンコクでは、空港についた団体旅行はまず娼婦のいるところにバスで連れて行かれ、その夜の相手を予約した。また、ホテルのロビーでは集団見合いの席が用意され、眉をひそめる外人客を尻目に白昼堂々と値段交渉などが行われた。このようなシステムの背景には、日本の旅行代理店と地元旅行社とのキックバックシステムのあることを無視できない。圧倒的に日本の旅行代理店の力が強いために現地の経費はゼロに近くおさえられる。つまり、日本の旅行社がその経済的優位から、アジアの地元旅行社に買春観光を強要していたということである。

このような事実が増えてくると、各国で買春ツアー反対の声が高まった。韓国では、女子大生が怒りにふるえた手で、「われわれ女性の人権をじゅうりんして、われわれの祖国を日本男性の遊廓地帯とする買春観光を即時中止せよ」と書かれたプラカードを掲げた。

一九八一年一月、鈴木元首相がASEAN諸国を歴訪した際に、フィリピンとタイにおいて日本人の買春ツアーに対する強い抗議があつたのを受けて、買春ツアーを企画していた

旅行代理店が、日本旅行業協会から除名された。そして一九八二年、「旅行業法の一部改正」が可決され、「旅行業者は旅行者に対し」旅行地において施行されている法令に違反するサービスの提供を受けることを斡旋し、またそのことに關して便宜を供与してはならないとした。しかし、この規制が表面的なものにしかすぎないことは明らかで、いかにも買春ツアーを宣伝するパンフレットはなくなったものの、その気にさせる表現は残された。

日本人観光客には、買春観光に対するうしろめたさはあっても、罪の意識はほとんどなかった。むしろ、日本人のショッピングや買春も含めた観光収入が韓国・台湾・東南アジアの経済発展に役立っているという単純な論理があった。

たしかにそうかもしれない。しかし、買春だけは日本人の自己満足にすぎない。

韓国・台湾・東南アジアの女性たちは、そんなことで経済が発展することをのぞんでいるはずなのである。

買春ツアー反対キャンペーンの声が高まるにつれて、さすがに韓国・台湾への旅行者は減ってきた。しかし要は、家族や世間の手前行きにくくなっただけのことであった。

これによって、女を買いあさる日本人が潮の引くように去ってしまったのである。たとえそれが一時的な現象であったとしても、その日の暮らしさえままならない彼女たちにとっては死活問題である。

「日本人が来てくれないのなら、こちらから出稼ぎに行こう」。一九八〇年前後に、台湾・フィリピン・タイからのじゃばゆきさんが急増していったのは、こういう背景があったからである。じゃばゆきさんに対して「勝手に来た」ととるのも「相手国側の問題だ」と片づけるのも自由だが、原因の一端がそもそも日本人による買春ツアーにあったことをわすれてはならない。

◆買春ツアーに出かける男たちに対する日本の女性

表は、「夫がいわゆる買春ツアーで東南アジア等へ行くと言ったらどうしますか」との質問の解答である。

「行かないように言う」など答えた女性は、半数未満の44%。「信用しているので何も言わない」、「仕方ない」、「黙って送る」など、きつぱりと「買春はやめて」と言い切れない人が少なくなかった。

夫の買春を認めてしまう背景として、

	配偶者あり	配偶者なし
嫌だけど黙って送る	7人	3人
買春しないように言う	94人	29人
行かないように言う	61人	15人
信用しているので何も言わない	121人	10人
出張の場合仕方がない	38人	6人
何とも思わない	2人	2人
その他	35人	8人
回答なし	16人	32人

(注) 455人中、複数解答あり

1 昔は男性の生理として認められていた。

男の女性の自由をもち、妾をもったり、遊廓で遊ぶことは、むしろ男の甲斐性とすら呼ばれて、公然と容認されてきた。

2 夫婦で対等な性が持てない。

3 妻の側に、結婚を制度として守るために、ある程度浮気も買春も仕方がないという感覚がある(扶養されているという負い目)。

などが出された。

きつぱりと「買春をやめて」と言い切れない

い女性が多いのは、日本の女性をみくだした社会観や、昔からの女性差別（男尊女卑）などが、女性にきつぱりと言いい切れないようにしているのではないだろうか。

◆女性の家 HELP (HOUSE IN EMERGENCY OF LOVE AND PEACE)

●“HELP”とは何か？

“HELP”と聞いただけでは、一体何のことなのかわからないだろうと思います。おおよっぱに一言で言えば、アジア女性のためのかけこみセンターというのが妥当でしょう。もちろん日本の女性も含まれています。もう少し詳しく言えば、一泊三五〇〇円程度で最低二週間まで宿泊できたり、電話や直接訪問して相談できたり、いわゆる緊急避難所です。

●じゃばゆきさんにとっての“HELP”

じゃばゆきさんというのは、他国からたった一人で身売りをしにきています。地位も低く、生活も楽じゃありません。誰だって、こんな状況においこまれたら、逃げだしたくなります。しかし、一度、こういった商売に足をつっこむと日本の女性でも、なかなか足を洗えません。ましてや、他国から来た女性がそう簡単に、自分の国へもどることは出来ません。そのような中“HELP”に、かすか

な未来が見えるのです。“HELP”に行けば、宿泊している間に、家族に連絡をとったり、帰国の手続きとして大使館に行き、パスポートにかわる、アフィダヴィットの入手をしたり、心配事の相談をしたりして帰国を待つことができます。

●現状は……

しかし、日本人以外の女性で外国人登録をしていず、不法就労、不法滞在の場合、救助の法的根拠がないので、人種問題となっています。だから、じゃばゆきさんが、絶対幸せになれるとは言えません。まだまだ問題は深刻です。

●最後に

じゃばゆきさんのことを調べるまで“HELP”というものを知りませんでした。だから、ほとんどの外国人労働者は“HELP”の存在を知らないと思います。少しでも多くの人が“HELP”の存在を知り、たくさんの方が、はやく幸せになつてほしいと思います。どんなに思っても、私達には、そんな力はありません。しかし、同じ女性として、こういった商売がある限り、立ち向かっていかなければならないと思います。ぜひ一度、東京にある“HELP”に行ってみたいと思

います。

◆外国人が日本に入国するには……

①有効な旅券を所持し、②日本政府の入国査証を持ち、③上陸目的が入管法四条一項が定めているいずれかの在留資格がなければならぬ。

しかし、日本の政府は外国人労働者が入国することを原則として認めていないが、例外として、外国語教師や外国料理の調理人など、日本人労働者では補えない職種であれば許される。フィリピン女性が正式に入国できるのは、次のとおりである。

入管法4-1-1-9 タレント興業ビザ

二カ月ずつ更新し、六カ

月間収入を得ながら滞在

4-1-1-4 観光ビザ

一五日、三〇日、九〇日

のいずれかの滞在期間の

ために必要な所持金を持

つていなければならない

4-1-1-6 留学ビザ

週二〇時間のアルバイト

ができる

4-1-1-16-3 日本語学校などで就

学する者

許可なしでは、アルバイ
トはできない

また、日本人男性と結婚してしまい、一年
ほどで離婚すれば、入出国自由の権利だけが
残る。

しかし、いろいろな制約があり、簡単にとれ
ないのが現状である。

◆助けにならない売春禁止法

来日女性で、日本の法律を知って入国する
者はいない。入管法は、外国人の入国を基本
的人権の問題にしていない。単純労働を認め
ていないため、不法入国、不法滞在、不法労
働者として強制送還となる。法律的に救済の
道は狭く、人権は守られていない。その不利
な立場を業者が全面的に利用している。賃金
不払い、違法行為であるが、労働基準法に
よって、訴えることは難しい。

また、婦人相談所（全国四七カ所）あるい
は婦人保護施設（〇カ所）、婦人相談員（五
一六人）など存在しているが、じゃばゆきさ
んなどは、ほとんどが、出入国管理法上の問
題がある不法残留者というような形で問題が
あり、出入国管理事務所に送るしかなく、言
葉の問題などもあり、十分な受け入れ態勢に
なっていない。売春防止法などは、地理も言

葉もわからない外国人女性には、何の助けに
もならない。

◆摘発できない状況

旅券の偽・変造、偽装結婚が増え、ブロー
カー介在の組織化が悪質巧妙化し、暴力団の
売春強要も多発している。違反事件は増加し
ているにもかかわらず、入国警備官は、定員
削減で慢性的な人員不足である。そのために、
摘発に手が回らず、背後関係も十分解明でき
ない。

じゃばゆきさんのことは、ニュースなどで
何となく聞いたことがある程度で、くわしく
は知らなかった。しかしレポートを書くにあ
たって、婦人会館や学校の図書館で本を探し
て読んだ。レポートに書ききれない程、いろ
いろなことを知った。単なる家庭科の提出物
でなく、私達が本当に知り、考えとても良い
ものができた。今回、勉強したことを、これ
から何かに役立てたいと思う。（M・T）

日本に来て働く外国人はとて多く、年々
増えてきています。その職種は様々ですが、
女性が働くのは日本人でも大変です。外国人
女性が毎年たくさん自分の家族のために来、
ブローカーに多額の借金をし、只働きでスナ

ックなどで働かされ、唯一の収入が売春であ
ることを知って驚きました。ビザの期間や警
察の目を気にしながら、他国で働いている人
がこんなにいるなんて……各国それぞれに困
難な問題はたくさんあると思いますが、こう
した行為を許さず、なくすための解決法を考
える必要があると思います。（A・D）

じゃばゆきさんが日本でどんな生活をして
いるかなど全く知らないことばかりだったの
で、今回いろいろと考えさせられた。今まで
新聞にじゃばゆきさんとかの記事がのって
いても読まずにいたけど今度からは目を通すよ
うにしようと思います。（K・I）

じゃばゆきさんの問題は、私たちにとって
はあまりにも難しいことでした。夏休みの間
だけではそのすべてを知ることはできません
でした。しかし、研究してみてもよかったです
と思っています。じゃばゆきさんということばを
今までの私は興味本位で聞いていました。ど
れだけの苦労してきたのかもわかりません
でした。そしてそれらのことに対する日本の
また周囲の対応の冷酷さを知ることができま
した。この夏休みに私たちが理解し、考える
べきである問題を調べることができてよかつ
たと思っています。（M・T）

平等時代の セックスライフ

安東尚美

京都府八幡市で、ミニコミ『女性まちづくり通信』を出しておられる安東尚美さんは、身近な環境・都市問題、政治への取り組み方を女性解放の視点で問い直し、地域から発している方。「婚外子差別と闘う会」「出生差別の法改正を求める女たちの会」の会員で、非嫡出子差別を通しての発言はWeでもおなじみ。ここでは、同通信（No 16）からの抜粋と、去る五月十二日、安東宅で開かれた座談会の一部を紹介します。（編集部）

● 座談会

出席者は、味沢道明さん（関西育時連・メンズリブ研究会〈仮称〉世話人）、岩間裕子さん（主婦、フリーアルバイター、二児の母）、上野元氣さん（仮名・男性）（「男らしさ」の否定、女性との優しい関係を模索中）、大西宏枝さん（ただ今、無職）と、安東尚美です。

◆ボルノ・レイブ・買春者

味沢—今のボルノは、女性を性対象物としてだけ描いているので、少年・少女がこれらの情報だけに接していると、セックス以前の男女のコミュニケーションの持ち方がわからない人間に育ってしまう。大人だってボルノの影響を受けていて、女性とうまくコミュニケーションが持てなくて、セックスができない男が、レイブや買春に走るのではないか。日本が買春天国なのは、人権意識の欠如も一因と思うが。

安東—男たちにレイブや買春をやめさせるには、妊娠に対し責任を持たせると、セックス以前のコミュニケーションをよくするのが鍵なのかなと思う。仕事上の優遇と引き

ヘレディースコミック等では、普通の若い女性が、妻子ある男や、出会ったばかりの男と、避妊や育児について話し合うことも殆どなく、喜々とした表情でラブホテルの門をくぐっている。恋愛映画を見ても、「コイツラ避妊しとるのか？」あるいは避妊の場面を映さないのか？ ましてや男も子育てする気があるのかなど全然出てこない。あくまでフィクションなので、絶対妊娠しないことになっている。

今まで、現実社会では、こういう性表現をお手本にした女性が黙って墮胎病院の門をくぐることによって問題が見えなかった。女性

は、妊娠する可能性があるから、自動的に責任を取ることになるが、男性は、父親であるとな乗りを上げない限り責任を取らずにすむので、なるべく早く早くお金にかえて責任ののれをしようにとしがらだった。さもないければ、母親の親類が共同で育児に責任を持つ「母系制社会」に戻るしかない？ 婚姻届を出さない関係では100%完全な避妊が要求され中絶が強制される、あるいは事実婚なら認めるが男と同居して一对一の関係でなければ認めないとか言われる」

（岩間裕子・安東尚美 『女性まちづくり通信』No 16より）

換えに上司が性関係を迫るセクハラも、妊娠しても責任を持たないことが前提になっているから、取引材料として成立しているわけで、そういう面では売春と同じよね。

岩間―女性にとって望まないセックス、という点では、セクハラもレイプと同じだと思う。レイプは性欲だけという支配欲もからんでおり、社会が男性を抑圧していることも一因になっている。実は、私が妊娠中セックスを禁じられている時、私の夫もソープランドに行ったりした。男だから仕方ない、買春なら家庭に影響ないからと、なんとなく認めちゃったけど、性病のことを考えたり、売春婦も妊娠するんだと、同じ性をもつものの立場から話し合ったら、買春をやめた。

女性の立場で、ボルノをつくったら、セックスシーンだけの今のボルノに避妊のことも入っていて、セックス以前の男女の関係、心の交流が、たくさん出てくるものもできるんじゃないかしら。

上野―男女で幼児期から異なるおもちゃを与えられ、一緒にはあまり遊ばなかったり、体育や家庭科などを学校で男女が別々に学ぶ影響は大きいと思う。

セックスについて、いやなことはいやだ、

と言った方がいい。それでお互いが歩み寄れない時は、性の相性が悪いのではないかと思う。性の相性をみるという意味では結婚より同棲の方がよい、と娘には教えていきたい。性教育とは子どもにまず自分自身とパートナーとの関係について語れること。

ラブホテルに反対の人たちは、子どもの教育に悪いと言い、ウチの子が行くようになってほしくないと思うだけで、セックスの肯定面を教えていない。今の性教育は、学生のセックスや、不倫の関係で妊娠したらどうすればよいかみんな考えてみよう、という現実的な問題解決はまだ取り上げられていないので残念だ。

味沢―ラブホテルのように自由に安くセックスできる場所がもっとあってもいいのでは？岩間―でも密室化はレイプ、セクハラといった性犯罪の温床にならないかしら。フロントを通したり宿泊名簿に書いたり、監視カメラを置くとかして、それぞれが責任を持って、もっと堂々とやるようになればいい。

◆男と女の関係性を通して

上野―妻がフルタイムの仕事をするようになってから、疲れているからとセックスを拒否

することが多くなり、夫婦仲がまずくなつた。「女性学をやって色々発言しているのに家庭での家事参加は不十分だ」と妻に言われたり、セックスにも、それ以前の夫婦の時間を持つにも時間的なゆとりが必要だと思った。また男から誘わないとセックスできないのも疑問。離婚して父子で暮らそうかとも思い、悩んでいる。しかし、離婚した後で新しいパートナーが見つかるのか、男だつて不安だ。大西―男の性欲は押えがたいから結婚はそういう面の解決法でもある、と考えていた。ところが、それほど子供が欲しくないということもあり、夫はセックスに淡泊で、こちらが不満に思うくらい。しかし、ずっと共働きをしようと言つて結婚し、私の勤め先が遠くなつて退職した今も、家事をずいぶん分担してくれて、ハタからは「いい人に巡り会ったね」と言われる。

岩間―女性は小さいときから性表現の訓練をしていないから、自分からセックスを言い出しにくい。男の性欲は強くて常に押えがたいのではなく、カップルによって異なり、個人差の方が大きいように思う。

上野―男が受けてきた性教育は、小学生から男女別々の価値観で育てられ、「年ごろ」に

なるといかにして口説いて寝るか、になっている。妻以外の女性を愛して性関係を持っているAさんは、「一夫一婦制は近代以降のもの、以前の母系制社会では、男女とも複数のパートナーを持つことが比較的自由であった」と言うが、男女関係は一对一が自然なのではないか。妻や特定のパートナーの他に、異性の友人が何人もいる、性的な魅力を感じて、人がいる、というのも自然だと思ふけれど、だからその人とセックスをするというのは、違うのではないかなあ。一夫一婦制というのは自分の好きな人には自分の方を向いて欲しいという心情になつたものと思ひ、今まで、妻以外の女性との性的な関係は抑制してきたし、沢山のひととセックスする女性はパートナーにしたいくない、と考えてきたが……

生涯に何人も性のパートナーを持つがいつも一对一なのと、同時に複数の性のパートナーを持つのは、異なるように思ふ。女性が自立できて、子育てのために結婚しなくてもよくなつたスウェーデンも一夫一婦制が主流だ。味沢—ヨーロッパの一夫一婦制にはキリスト教の影響が大きい。日本では平安時代の「通い婚」などに母系制が残っていた。

安東—会つてすぐにラブホテルに行つて、名

前や住所、電話番号のわかるものを何一つ見せないで、お互いを殆ど知らないままベッドイン、という関係では、妊娠した場合、中絶せざるを得ないとこへ追ひこまれやすいし、出産した場合も、育児負担を女だけで背負うことになつてしまふ。

上野—Aさんについては、結婚しか責任取れない状況にありながら同時に複数と関係をもっている、という問題点もある。女性が「安全日だからいいよ」と言つて妊娠してしまつたら、それは女性の責任ではないか……

岩間—婚外セックスで妊娠したら、結婚して男に養つてもらふ以外、子産み子育ての方法を思ひつかないという女性が多数ではないか。だから現実には結婚するか、堕胎費用を出すしか、男には責任を取る方法がない、という考え方になると思う。こういう中で、女性の責任としてしまふのは、レイプやセクハラはやられる女が悪い、と言うのと同じではないか。

味沢—月経周期が二週間もずれちゃう人だっている。こうなると、安全日が危険日になつてしまふことだってある。女の身体は、結婚前は100%完全な避妊ができて結婚したら二、三回妊娠する、というように、うまくできて

はいない。産む、産まないはもちろん女の自由だが、結婚していなければ産みたいときにも産むことができにくい状況では、女には性的な自由がない、ということになる。

岩間—やはり、快楽を共有した分、男も苦しみも共有すべきだと思う。避妊はするが、失敗しても男女の共同責任で対処できる関係性をつくつていかないと。

◆〈子育て〉の共有化

味沢—やはり、一夫一婦制のもとで子どもをもつた両親だけが子育てに当たる、というありように問題があるのではないか。

私は料理教室を主宰し、レストランでもパートで働いて年収百万で生活している。大多数の人は、とにかく人並でないのと、スリムな暮らしができない。電気製品は女性を家事労働から解放したと言うが、非婚で子育てできるところまでは解放できない。

安東—非婚で妊娠し、福祉の助けを借りても産み育てたい、という女性がいてもいいのに、生活保護など受けにくくなっている（日本の保護受給率は欧米の十分の一）。「育児休暇」ができて、無給では、非婚の女性はいかなりの収入を蓄えないと子産み子育てはでき

ない。蓄えられる位の収入のある女性だと、育休明けには二重保育をしないとやっていけないような労働条件だろうし、既婚女性の場合も、育休中の母ちゃんを養うために父ちゃんに残業する、ということになってしまふ。岩間―出産で退職し、育児中は夫に養われていたが、働いていない、とは思わなかった。でも出産後の再就職は難しい。パートももっと労働条件をよくしていかないとだめだと思ふ。現在フリーターで気楽だと思ふところもたしかにあるけれど。

味沢―育児休暇のみでは依然として性分業は変わらない。セックスは自由だとしても、男女誰もが家事、育児能力を身につけ家族の垣根を低くし、独身男性も含めて周囲の沢山の大人が子育てに関わるようにしなければ。子育てを社会的に保障し、子育てに関わらずに仕事だけをしたい人からはがっぽり税金を取る。ただし、生まれてから十五歳くらいまでは、養育する人たちの何人かは安定したメンバーであることが望ましいと思うけど。

上野―子育てに関わる人は複数である方が、子供のイタズラに腹が立った時なんかも落ち着いていられるのいい。ただ、安定したメンバーであること、というのは、「夫婦と子

ども」という家族形態に執着した考えなのではないかな。

安東―家族の垣根を低くして誰もが育児に参加したら、と言うが、先ほどのAさんのように結婚して子どももいて、生活上の分担シテムができているので別たたくはないが、他の女性と性関係を持っている場合、婚内子は両親が育てるが、もし婚外パートナーの方に子供ができれば、婚内子と婚外子の養育環境の差別みたいなのが厳然としてあるだろう。素直な感情として嫉妬もあるし、子供が小さいうちは同居ないし近居しないと、保育園の送迎など手伝ってもらうのは難しい。

味沢―子育てを無視して労働市場が成立するこの社会は減じると思うね。それに、家事・育児を、ホームヘルパーやベビーシッターなど、ビジネスとしてお金の問題で片づけるのはよくない、と思う。私は家族のために料理を分担してきたが、これはお金では変えられない部分を持っている。育児をする人に給料を保証したり、労働時間を短縮したりするのはよいが、全てビジネスにしてしまうより、社会のシステムの中に子育てを組み込む、つまりある意味では家族を拡張できたらいいのではないか。

上野―欧米のように、他人の子供を養子に迎えて育てる人がもっと増えればよい。日本は血縁主義にこだわすぎている。

安東―親だけが子育てをしていると、子どもを亡くした親には子育ての楽しみがなくなり、子どもが障害を持った親には大きな負担がかかる。こういう面でも、生物学上の親以外にも養育者が複数いた方がよい。

上野―結婚している夫婦でも、生殖に直接つながらずセックスの占める割合は低いから、純粹にコミュニケーションを求めているセックスを楽しむことはできないのか……

大西―女性が妊娠の可能性を全く考えないでセックスを楽しむのは閉経以後だけと聞く。妊娠、となると自分だけの問題ではない、という気がする。

岩間―実年すぎて女性に新しいパートナーが簡単に見つかるかどうか、生殖につながり得ない性でも、夫や子どもを捨てて新しい男のもとへ走らないか、不安だ。

安東―「男性の性に対する考え方を問い直し、子産み子育てを社会的にきちんとフォローできる体制にしていかなければ」と、安心してセックスを楽しめない」と、女性の立場からは言わざるをえないですね。（まとめ・安東尚美）

今、子供たちは

性の違いに目覚めつつ、その出発点で――

吉井 路子

(大阪市立諏訪小学校)

「先生、服着て測ってもいい？ 脱ぎたくない。みんなに体重知られるのもイヤ」。

転入したばかりのE子が泣き出した。五年になって最初の発育測定のことである。とび抜けて体格が良く、体重も大人並みにあるE子は、胸のふくらみも含めて裸体を人目にさらすことを極端に嫌がった。他の女の子たちが、まだ男の子とはとんとど変わらない胸をさらして、教室で着替える姿とは対照的だった。一方の男の子も五年にしては小柄な子が多く、体つき同様、意識の上でもまだまだ幼かった。女の子と机を並べるのを嫌がったかと思うと、休み時間には女の子と車座になってハンカチ落としをしたりして私を面食らわせた。E

子がその後間もなく初潮を見たこともあって、発育に伴って生じる男女間の体の違い、同性の中での発育の違いを、素直に受け入れ、今までとはちょっと違った男女の関係としてお互いを認識し合えるような雰囲気を作らねばと思い続けた。新しいクラスを担任して、いつもまず子供たちと約束することは、『人は一人ひとりみな違うということ。その違いをまず認め合おう』ということである。みんな、それぞれの環境の中で、それぞれの親や周りの大人の思いで育てられて今があること。心身の発達にも大きな違いを生じながら育ってきたこと。だから何でも同じにできる訳はなく、同じに感じるはずがない。自分と違う、あるいはみんなと違う子の存在

を受け入れていこう。それぞれ人にはみな、同じだけの権利があり重みがあるのだから、と。

ところがこれが難しい。学校生活では入学した時から『みんなと同じ』という側面が一貫して強調される。そこからはみ出た子や遅れた子は、どうしても異端視されてしまうのだ。お互いを理解し合うための話し合いを何度となく繰返した。

そんな中である日「女のくせに」というR男の発言から『女らしさ男らしさって何だろう』という話し合いを展開することになった。奇妙でおかしい子供たちの発言の中に、我々大人の男性・女性に対する固定観念が浮かび上がってきて苦笑させられる。

T「R君が女のくせにって言ったんだけど、じゃあ男らしいってどんなこと？」

T男「野蛮なことをすること（本人は冒険家をイメージ）」

M子「困っている時助けてくれること」

Y君「力仕事ができること」

A子「スタイルが良くてかっこいいこと」

T「じゃあ女らしいってのは？」

H男「上品で静かなこと」

M男「男をいじめないこと」

E子「やさしいこと」

I子「お料理がうまいこと」

R男「スタイルが良くて可愛いこと」

（だんだん言い合いになる。女の子は「お金があって…」などと言い始める）

T「色々出たけど、男らしさ女らしさって違うものの？」

S子「男の子が、やさしいのが女らしいって言ったけど、困っている時に助けてくれるのが男らしいというのといっしょだと思う」

R子「男をいじめないって言うけど、私らだって女をいじめない子が男らしいと思うわ」

T「つきつめていったら男、女って特別に言い合う必要ないんじゃないの？ 男らしさ女らしさなんていらんないんじゃないかと思う人いる？」

（9人拳手。女の方が多い）

T「やっぱり必要だと思ふ人は？」

（18人拳手。残り9人は迷っている）

R男「だって先生、女がタバコ吸ってパチンコしてたら、なんか下品でイヤやんか」（やんちゃで行動力はあるが、すぐ女の子にでも手を出すR男が叫ぶ）。

T「あら、女の人はタバコ吸ってパチンコしたらあかんの」（大部分の子が女の子も含め、うなづく。前に座っているU子が「うちの母さん、タバコもパチンコもするで」と

つぶやく。U子の母は二年前に二人の娘を抱えて離婚し、今やっと小さなスナックを開いたばかりだ。

H子「お母さんがパチンコしに行くやろ。そしたら近所の奥さんたちが『まあ、あそこの奥さん、昼間からパチンコしてはるノ』ってヒソヒソ噂するやん。だからやらん方がいい」(H子の母は家にいて祖母と同居。良妻賢母の見本のような方である)。

T「どうして男ならよくて女は許されへんのやろ」

(みんな口々に言い合う)

R男「なんかイヤやわ(女がやること)が。それに体にも悪いし。空気なんかメッチャ悪いねんで」

S子「そんな男だっていっしょやんか」

M子「男の人がタバコ吸ったりパチンコしたりするのはな、会社でしんどい仕事いっばいしてるやろ、だから」(いっそもおとなしいM子がいっしょうけんめい言う。M子の母も祖母と同居していて、いわゆるしっかり者の主婦) T「じゃ、先生はみんなを相手に一日中働いてストレスいっぱいたまるから、タバコ吸ってパチンコに行ってもおかしくない訳だ」

(何人かの女の子うなづく)

N男「男が酒もタバコもできひんかったら何か気色悪いわノ」

(母が看護婦で当然夜勤もある家庭のN男が叫ぶ)

T「へーえ。男らしい条件に酒やタバコが入るん」

T男「ぼくタバコはイヤヤ。大人になっても吸えへん。体に悪いもん」

(男の子何人もうなづく)

N男「女は服や指輪ジャンジャン買うねんから、男は酒ぐらい飲んでもイヤやんか」

K子「女は炊事や洗濯して、子供の世話してって、いっばいするのに給料もらわれへんねんから、そんなん買ってもかまへんと思うわ」(焼肉屋を夫婦で経営しつつ三人の子育てででんでこ舞いの母を見ているK子)

I子「女の人は料理がうまくないと結婚でけへんと思う。旦那さんにおいしい料理も食べさせられへんし、お弁当かて作られへんやろ?」(クラス一気の強いI子が)

Y子「男の人も単身赴任するやろ。料理や洗濯がでけへんかったらアカンのちゃう?」

R男「でもな、男がそんなんするの何かみじめやわ」

S子「男は女に頼りすぎやと思うわ。仕事から帰ってきたら『お風呂ノ』。上ってきたら『ビールノ』。栓抜いてもらって『ハイ、コップ』ってついでもらって。自分でビールぐらい飲んだらいいと思うわ」(三人の子育てをしつつ働きに出ている母を見ているS子) (略)

これらの発言を聞いていると、母親が家にいてしっかりと家事をし、教育熱心で夫思いという家庭の子供たち、とりわけ女の子たちは、その母親を尊敬し、そこに女性の理想像を見ていると思われた。それに対し、共働きや母子家庭の女の子の多くは、母親の姿を批判的にとらえたり、男女は同じことをやってもいい権利をもっていると薄々ととらえたりしている。

同じ共働きでも男の子はつくす母親をあたりまえと思い、社会常識としての男女の権利（？）の差にはほとんど疑問を持っていないように思えた。ここにあるのは、ほとんど大人の常識そのものと言っている。これを客観化し、「本当にそう？」と問いかける作業から出発しなければならぬ。そして、子供たちが新しい価値基準を持つために、今の自分たちの男と女の関係をより平等なものに作り上げていく毎日の討論や点検が、同時に進行しなくてはならないだろう。

以上の話し合いで、男・女についての意識を少し掘り返しておいて、ダイアナ・コールス作・グループ ウィメンズ・プレス誌『アリーテ姫の冒険』第一章―かしこい王女―を読ませ、感想を書かせてみた。

姫が、いわゆる女らしさ（男性に従順で自分の判断を持たず、上品で美しいことを誇りとし、良い妻になることを願っ

ている）と訣別し、自分の意見をはっきり言ってしまったたり頭のいいことを披露してしまったり等自由にふるまったために、王子たちが求婚を取り下げる結果となり、結婚しないことを宣言するという荒筋である。

読み取ったことをきちんと押さえる余裕がなく、前時に話し合った男らしさ女らしさとの関連で感想を展開できる子が少なかったのは残念であった。以下は子供たちの感想である。

アリーテ姫はかしこいと思う。自分の好きな自由な生き方をしているからだ。王様は、自分の子供の自由を奪う嫌なやつだ。料理とか作らへん女と結婚したらぼくは、自分のことだけやって後は、ほったらかしにする。家庭教師は、アリーテ姫よりあほだからアリーテ姫をおこっているのかなあ。やっぱり男らしさ女らしさは自分の勝手かなあ。

（前原由喜夫）

私は、かしこかったって別にいいと思います。（略）ほめてばかりの王子様だったらいいやです。幸せになれたら、よほど悪くなければ別にいいです。（結婚相手のこと？）

それから、女の人よりも男の人の方がいばって、男の人が位が上なのか。お母さんとお父さんだってお母さんは、「お父さんはえらいんだから」と言ってお母さんの方が下です。学校に行ったら男の子は「お前ら女やねんからひっこんで

ろ。男の方がえらいんじゃない」とか言っているの、私はいつも（男の方が女より上なのかなあ）と思います。

（山中美代子）

結婚した人が自分より頭が良かったら、やっぱり嫌です。けど、自分が頭が良かったら気持ちいいと思う。王様は、男の人が頭が良くて女の人が少し男の人より頭が悪かったらいいと思っていると思う。結婚するしたら自分より少し頭の悪い人になりたい！

（入江仁美）

ぼくは、アリーテ姫と結婚はしたくない。あんな姫は嫌です。そんな姫なんか、ぼくにとっては、おそろしいです。

（栃尾 昌）

わたしは、アリーテ姫の考えは間違っていないと思います。が、あまりにも賢すぎると王子様も不愉快になると思います。だからアリーテ姫はもう少し気をきかせて、一応結婚しておいて、趣味を聞かれたら本を読むことと言っておいて、部屋にたくさん本を置いてもらうとか考えていたら、王様も喜ぶと思います。私がアリーテ姫なら、もうがまんがでぎなくなつて家を飛び出してしまうと思う。アリーテ姫は、がまん強い女の人だと思います。

（甲斐有美）

ぼくは、どうせ結婚するなら頭のいい人の方がいい。でも、お話では賢すぎたら嫌という人がいました。それは多分、女の人に負けたくないからだだと思います。

（高岡秀好）

わたしが王子だったら、ぜったいにチェスに勝ち、おせじなんか言わないだろう。あの王子は見せかけだけで判断しているとした。そういう性格は×。言いたいことははっきりと!! きらいだなあの王子。

わたしが姫だったら、要領良く、中身はしっかりして賢く、王様や王子様の前では朗らかに。そうしていればいいんじゃないかな？

（岡田郁美）

ぼくは、このお話を読んで（なぜ女は頭が賢いと結婚してくれないのかな）と思いました。でも、やっぱり、自分より賢い人と結婚すると嫌だなあと思いました。

（村山慶信）

やっと出発点に立ったところである。これからこう取り組み、こう変わったという報告になる訳であるが、取り組みの遅さから、ありのままの子供たちの姿しかお見せできなかったことをなさけなく思っている。

この課題は、最初に述べたように体の発達の学習と分けては考えられないものである。『子どもたちへ』Ⅱのちと愛のメッセージⅡ（製作バオ）のビデオを見せたが、内容の素晴らしさにもかかわらず、子供たちは十分にそれを把握できなかったようである。このビデオを手掛りに、二学期は一から性の授業を展開するつもりでもある。

新しい・家庭科を・創るために

中学で性教育にとり組んで

細田英理子

(北星学園女子中学・高等学校養護教諭)

私は札幌でフェミニズムの運動に関わり、女の問題にこだわって生きてきました。ここ何十年の私たちの運動により、

目にみえる制度上の差別はかなり減ってきたと思います。しかし、こと性に関してはオープンに語られにくい問題のせいか、旧態依然とした、男の視点で語られているものがまだまだ多いと思います。

私は仕事が養護教諭なのでフェミニズムの視点からも男女平等の性教育は必要と考え、五年程前から性教育に取り組みはじめました。高校の方は仲間に授業をみてもらい、アドバースをもらったりしていますが、中学の場合(特に性交についての授業)は去年はじめたばかりで、正直いってまだ手探り状態です。まだ不十分ですがとりあえず去年の中一での実

践を紹介したいと思います。

「月経・射精」についての授業

ロングホームルームの時間を一時間もらって三年前から実施しています。最初にアーニ出版の「ヤング性教育1からだ」(約15分)のスライドをみせます。これは月経・射精のしくみ、マスターベーションのことなどを一通り説明してあるものです。生徒は最初ちょっとザワザワしますが、概ねまじめに聞いています。そのあと男女の裸が載っている性教育掛図(アーニ出版)をみせながら、「大人になると性毛やわき毛がはえ、女の子は胸が大きくなり——」とまず眼にみえる変化を説明し、「変化は体の中でおきていて、赤ちゃん

■ 中学校では

を産める大人の体にだんだん変っていきます」と、月経の説明に入っていきます。決して汚ないことでも恥ずかしいことでもなく、体が大人になっていく、ごく当り前の変化であることを話します。

また女性性器の横からみた断面図をみせて「オシッコの通るところと、赤ちゃんが産まれる時の通り道にもなる生理の血が出るところと、便が出るところと、女性には三つの通り道、穴があります」と説明し、自分の体のことをよく知り、ふだんから性器になじんでおくことは大事なことで、家に帰ったら自分の性器をよく見て、尿道口や膣や肛門を確認するよう言います。

また月経がどう扱われてきたかも説明し、昔は汚れといわれ、それが理由で神社仏閣など女性が立ち入れない場所がたくさんあったこと。今でも大相撲では土俵は神聖な場所と主張して女性をしめだしていること。わんぱく相撲で地区代表になった女の子が、女であるという理由だけで決勝大会に出られなかったり、初の女性官房長官が優勝力士に総理大臣杯を渡そうとした際、女であるという理由で断わられた例なども話します。すると生徒たちからは「ナンデー、今でもそんなことあるの？ 差別じゃないの。」という驚きの反応が返ってきます。

「性交」の授業をしようと思ったきっかけ

射精の説明の際、月経と対比させながら「月経の場合、自分の意志と関わりなく、ある一定期間血が出ますが、射精の場合、自分の意志で出す場合（SEX、マスターベーション）と自然に出る場合（遺精、夢精）とがあります」と教えています。授業中にSEXという言葉が出てきて、生徒たちはちょっとびっくりしますが、この授業ではこういうことを質問しても大丈夫なんだなと思うらしく、ふだん疑問に思っていることを次々と質問してきます。年々質問の数がふえてきて、去年はベルがなってもあっちこちから手が上がり、三十分くらいすごい質問が続きました（後述）。

どんな質問にも一応きちんと答えようと思っていたので全て答えましたが、つくづく今のマスコミ性情報にふり回されているなと感じたので、急拠「SEX（性交）について」という授業をもう一時間もうつことにしました。

生徒からの質問と、この時の私の答

とっさに答えたのでちょっと不適切な部分があるかもしれませんが、オナニーはどうするのか——こういうことは基本的に人から教わったりする種類のものではないと思うけど、一応簡単

に説明します。一つは頭、イマジネーション（想像力）の問題、テレビや雑誌など性的な刺激をうけるものを見るなり、聞くなりして想像力をかきたてること。二つはその時性器のあたり（図を指さし）をさわること。女の人の膣の中は感覚が鈍くて、あまり感じないところなので、入口付近やそのまわりを。男の人はペニスをこすって射精。

。男の人はどうして気持ちいいの——おしっこたまった時、出したらスッキリするでしょ、そんな感じじゃないかと思う。膣は感じないというけど、ではどうしてSEXして気持ちいいの——そのあたり（外性器の図を指さしながら）をさわっている形になるから。一番大きい問題は気持ちの問題。相手のことをすごく好きだと……

。生理がない時SEXしたらどうなるか——まだ未成熟である証。気持ちよくないと思う。

。よばよばのおばあさんがSEXするとうどうなるか——基本的に他の年代と同じ。ただ分泌液は少なくなる傾向はあると思う。

。フェラチオってなに——私が答える前に「なめることだよ——」と他の子が答える。

。それってみんなするの、気持ち悪くないの——お互いそうしたければするし、必ずするものでもない。人それぞれ。個々のカップルの問題。

。男の人が女の人のおりものをなめるっていうのもホント？——そういうこともありうる。お互いそうしてほしいと思ったり、そうしなかった時にする。個々のカップルの問題。人それぞれ。

。汚くないの——汚くないよ。

。生理の血は汚いの——基本的に汚くないよ。

。初めてSEXした時どうして血が出るの——その質問に答える前に、皆必ず血が出てるかもしれないけど、それは間違いです。全然出ない人や、ほんのちょっぴりの人もあるし、人によって全然違う。どうして出るかという膣は伸縮性のあるヒダヒダなので、最初は伸びが悪くて多少無理がかかって痛かったり、血が出る場合もあるのだと思う。

。処女膜って破けるの——粘膜のヒダヒダなので穴に薄い膜がはってあるというのとは違う。破けるといいう方はあまり正確ではない（前の答をさらに補足説明する）。

。先生はSEXしたことあるの——個人的プライベートな問題だから答えないよ。こういうことは大勢の人にべらべらしゃべる種類のものではないんだよ。

。女の人が声を出すと男の人は気持ちいいというけどホント？ どうして声が出るの——思わず声を出してしまうという状態なのだと思う。しかし皆声を出すわけでもないし、女ばかりが声を出しても限らないし、人の感じ方は人それぞれ

れ。あとSEXは気持ちの問題が大きいと思うので、男にしろ女にしろ、相手が楽しんでいと思っただうれしいのではないかと思う。

。水のようなもの（おりもの）はなにに——だんだん体が大人になってくると（生理がはじまる頃）分泌液が出る。皆そう。大人になった証。心配いらない。

。レイプってなにに——一方（たいてい女）が望んでないのに無理やりSEXされること。これは明らかに暴力。SEXというのはお互いがそうしたいと思って両方が望んですること。一方が望んでないのに無理やりするのは犯罪だ！

。生理の時SEXできるの——やってやれないことはないと思うけど落ち着かないと思うよ。

。中学生はSEXしちゃいけないの——ウーン成熟してもって大人になってからの方がいいと思うけど。いいとか悪いとかの問題ではなく、そのことによって傷ついたりしないのか、幸せかどうかの問題だと思う。子供産んでも育てられないだろうし。

。外国人のキスは口の中に入れるんでしょ——日本人だって同じだと思ふけど。

「SEX（性交）について」の授業

授業の時私が話したことをそのまま書きます。

「この前授業をしてみて、性のことは汚らしい、何かいやらしいものだと考えている人が多いように感じたので、正しい理解をしてもらおうと、今日は妊娠のしくみ、SEX（性交）のもつ意味についてお話します。

☆どうしたら妊娠するのか

大人になると男も女もそれぞれ赤ちゃんのようになるものができてきます。男は精子で女は卵子。単独では赤ちゃんになりません。合体してはじめて赤ちゃんになります。どういうふうに合体するのかというと、男の人と女の人がSEXすることで卵子と精子が一緒になるわけです（性器の掛図をみせながら）。女性の膣の中に男性のペニスを入れて射精します。人間の体はともうまくできていて、ペニスは普通は柔らかいのですが、SEXをしたくなるとここに血液が集ってきて固くなり勃起します（射精の授業で説明済だが再度復習する）。膣の中で出された精子はどんどん上にあがっていつて排卵された卵子（再度復習する）と出会った場合は妊娠し、出会わない場合は妊娠しません。

☆SEX（性交）のもつ意味

①（「生命を産み出す」と板書しながら）祖父母、親、子、孫というふうに、SEXという行為があつてはじめて子供が産まれ、命がつかっていきます。SEXという行為がなかったら、人類は滅亡します。だから年頃になると男と女がひ

きあい、一緒にいたい、SEXしたいと思うようになるわけで、長い間続いてきた営みです。

②（「体によるコミュニケーション」と板書しながら）人に何かを伝えようとする時、言葉による伝達、コミュニケーションというのは重要ですが、言葉だけではなく、体に触れあったりしながら何かを伝えあうということもあります。それによってコミュニケーションといいます。例えばあなたたちが具合悪い時、親にお腹をさすってもらってとても安心したことがありますか。小さい子がむずかかったりしていても、抱っこして頭なでたりしていると機嫌がよくなったりしますね。SEXも男と女がいて、もっと理解したい、もっとよく知りあいたい、親密になりたいという体によるコミュニケーションの一つです。それで心安らいだり、より豊かになっていくことが本当の関係だと思います。雑誌などでは下半身だけの問題としてとらえ、おもしろおかしく書いたり、わざといやらしいものとして書いたり、性について一面的な見方をしている場合が多いです。結構ウソも多いし。SEXは一人の人間と一人の人間が無防備に裸で向きあうわけで、二人にとって結構重要な関係です。二人の価値観、生き方とかがそこに当然反映されてきます。いい加減な生き方やいい加減な考え方をすれば、当然恋愛やSEXにもそれがあらわれます。また未成熟だったり、自立していなかったり、無知だ

ったりすると、そのことで悲しい思いをしたり、お互い傷ついたりする場合もあります。自分をみがき人をみる眼を養い、成熟した大人になってから経験した方がより幸せだと私は思います。

生徒の感想

。今日の話を聞いて、性交は子供をつくる一つの方法で大切なものだというのがわかりました。自分たちの親もしてきたのかなと思うと変な気もしますが当り前（？）のことなんだと思うと、何とも言えないです。本当のことをいうと私は子供をつくるのが何となくこわくなりました……。

。今日、初めてSEXの事を性交というふうに言うことをおぼえました。今までは「生命を産みだす」とかあまり大切に考えずに、なんかきもちわるいとか思っていたけど、これからはそう思わずに違う考え方をしたいと思います。

。今日、授業うけて考えていたのとずい分違った。本に書いていることとも違う授業だった。性交がどんなものかわかった。

。避妊のことは高校になったら教えるっていったけどそれだったらもう遅いと思います。もう中学からやってる人もいると思うので中二・三になったら教えてほしいです。

新しい・家庭科を・創るために

「女性学」の試み

——女と男の関係性の変革のために——

寺 島 紘 子

(石川県立金沢二水高等学校)

「性教育」から「女性学」へ

十年前、本誌で「性と女性解放」というテーマの授業報告をさせていただいたが、私はその後もこの視点で授業を続けている。

この間、設立もない性教育の研究団体に所属し、「性」というテーマに首をつっこむようになった。しかし、中高生のセックスを否定的に語る「性教育」はいうに及ばず、逆に快楽として解放的に語る「性教育」も、女にとってはともに抑圧的に働いてしまうことに疑問を抱き始めた。

今、私は、「性」や「女と男の関係」についてはヒューマニズムの視点(多くの性教育は、これを第一義においており、フェミニズムの視点が欠落しているように思える)だけでは解けない、フェミニズムの視点がないと解けない問題だと思っている。この社会は、強固な男性中心社会であり、持って生まれた性によって、役割は固定的にしかも男性優位に分けられている。その中で男女の関係性はおのずと決定づけられる。結婚制度や恋愛や、異性愛に関する社会通念が、男女間の行為を規制しており、それらを支えるのが、自然で本能的と思われる「性」に対する観念、対幻想や家族幻想、さらに女らしさ、男らしさの規範や性別役割分業のイデオロギ

一といったものであろう。私は二年生の家庭一般で、およそ四十時間をかけて、表Ⅰのような内容の女性学を行っている。

少女たちの性と女性学の課題

小倉千加子は女の子の思春期を「自分の身体が異性の欲望によって消費されるために社会に流通する記号だ」という認識を持った時（『女の人生すごろく』筑摩書房）と定義する。つまり、思春期とは、少女が、男から性的に眺められる性であることを知った時である。さらに肉体的苦痛をとまなう胸のふくらみ、月経の発来、少女たちは、自分の性の宿命を知り、自分のからだを「男の子に捧げられている身」（ボーヴォワール）であることを知る。

思春期の拒食は、思春期の生きがたさからだと表現しているのではないだろうか。「やせているのが美しい」という社会に流通する記号がもつ強制力、少女から大人の「女」になることが、「男の性的客体として性交し、出産すること」——そういう成熟した女のからだを持つことに対する嫌悪と拒否、があるのではないだろうか。

「女」としての未来が、結婚し、妻となり、母となることで一人前となる。そういう閉塞的な生き方を方向づけられつつ、妊娠する可能性を持つからだとして男社会から厳しく管

理される。少女にとっては、何かを失っていくという喪失感、しかし、男社会と素手で闘うにはあまりにも無力である——。多くの少女たちはやがて諦念へと向かい、男の子と違う人生を歩み始める。自我を放棄し、男の期待に沿うように生きていこうと決意する。しかし、一方では社会が押しつける秩序や規範を受け入れていくか、それとも自我を放棄せずに主体的に自由に生きていくか、煩悶する。このことが、逆に少女を少年より内面的に豊かにし、聡明な女性として生きる可能性をもはらませている。思春期は少女にとって、自立と依存にひきまかれていく時代であり、女の人生の一つの分岐点であるといえよう。「女性学」はそういう少女たちにとって有効な学習となるだろうか。

それでは女性学とは何か。自分の生き方が男性によって決められ、支配されることを性差別ととらえ、この構造を明らかにし、自由で主体的な生き方、男女の自由な関係を模索するための学問である。そのために、男性中心に社会と人間を説明してきた既存の学問や、男性の手になる文化を問い直すのである。女性学を学ぶことによって、少女たちに、主体的に自由に生きていっていいんだ、という励ましを与えられたらと思うのである。

映画「カラーバープル」を見せる

「カラーバープル」は私の女性学を展開するにあたって重要な教材となる。アリス・ウォーカー原作、スピルバーグ監督のこの映画は、原作を読んだ時に感じたすごい衝撃力はなかったにしても、スピルバーグの人を魅きつけて離さない映画作りのうまさ、美しく感動的な映像にうなづいてしまった。この映画を三回に分けて上映するのであるが、生徒の期待がいかに大きいのか。幸いわが校には、大型ビデオ映写装置があり、映画館の気分が味わえる。

映画は、アメリカの二十世紀初頭から約四十年間、黒人女性の主人公セリーの人生を描いている。義父に強姦されて出産、二人の子は連れ去られ、十六歳で強引に結婚させられた相手は子持ちやもめで身勝手な男。彼は自分が食わしてやっている女に人格などみじんも感じない。セリーは自分を木にたとえて殴られるままになっている。前半は、醜く、教育もなく、それゆえに自分に自信を持ってないセリーが、受け身で生きる姿が描かれる。そのセリーが、夫の愛人であり、自信と生命力に満ちた自由な女、ジャグの登場によって変わる。ジャグを愛することでセリーの心に火がともる。自分の価値と尊さを知ったセリーは耐えることをやめ、自分自身の人生を

生きようと闘うようになった時、彼女の運命はひらけてくる。女性が社会から分断され「家」の中に囲い込まれ、その役割に拘束されているうちに、無気力で、受け身で、依存的な対応のしかたを身につけていく。セリーの物語は、女がおかれている普遍的な女性抑圧を描き、そこから立ち上がっていく女性を描いた物語である。すぐれた作品は人を救済する力がある。

視聴後、登場人物の役割、関係、心理、時代や社会背景、作品のテーマなどをおさえる。イブセンの「人形の家」のノラとも対比させながら、人形として父と夫に愛されることを拒否し、「自分の神聖な義務は、私自身に対する義務です」と家を出た無一文のノラと、仕事を持ち、自分の手で金を得る喜びを手にしていったセリー。この「自立」というテーマは、生徒にとっての課題でもある。

私は、映画や、少女マンガや、小説を教材によく使う。これらの作品を通して、人間関係のモデルを示しながら、できるだけ具体的に生き方や関係性を示したいと思う。

性的自由と

「性と生」の自己決定権について考えさせる

女性学の内容のうち☆印のテーマの内容は表Ⅱに示したとおりである。ここでは、女性に、性的自由がないという事実

から出発したい。「強姦」や「売買春」の問題をとり上げる時、日常の男女のあり方に強姦のひな型があり、売買春をうみ出す構造があるということをおさえないと、生徒は「気の毒な人」の問題として片づけてしまう。さらに人道上や、性道德の問題に帰結させ、自分を清く正しい倫理の側にいる人間として位置づけてしまふ。強姦し、買春する側の男性の心理についてもおさえないと思う。以下、「売買春」についてとり上げる時の、私の視点について述べたい。

まず第一点目として売春制度廃止運動は、私的な領域での男女関係を不問にしたまま、「結婚制度」を擁護し、「正しい」性道德を確保することを第一義とした運動ではなかっただろうか。しかし、売買春は私的領域の中の男女関係の反映として、うみ出されるという認識が必要なのではないか。富岡多恵子は『健康な家族』こそ、『非日常』の性のもつとも極端なカタチであるヒトの売春、買春を必要としているともいえる（『藤の衣に麻の衾』中央公論社）と述べている。

第二点目として、女性が生性的に、経済的に自立できないということは、結婚制度や性別役割分業と深くかわっていることをおさえない。メアリ・ウルストンクラフトは、今から二百年前に、結婚を「合法的売買春」と名づけ、結婚を売買春のひとつの形態であるとした。女性に労働権がないから経済的自立を困難にし、女は男の経済力に、結婚という形で依

存しなければならぬしくみになっていることを指摘した。女が個人として生きていくために経済力を持つことの必要性を訴えたのだが、二百年後の今日、女性も職場進出を果たしているとはいえず、職場では、周辺労働者として位置づけられ、家庭では家事・育児という二重役割を背負っている。男女賃金格差が物語る通り、女性がひとりで食べていける賃金を受け取っている人は少数派である。こういう現実の中で、女性が手つとり早く金を得る手段として、自らの性を商品化したり、それを利用する売春関連産業がこれほど繁栄しているのは、もつともなことのように思える。

第三点目として、売春婦は犯罪者なのではないということ。悪いのは、金の力で女の性を支配する買春であり、他人の売春から利益を吸いとるヒモや、売春周旋業者である。「望むときにいつでも売春をやめることができる限り、女性が自由に売春に入ることに干渉すべきではない（『性の植民地』キヤスリン・バリー・時事通信社）」という視点である。

私は売買春の授業を通して、女の性と生を主体的に生きるために、どうであつたらいいか生徒たちに気づいてほしい。男女の関係は、自由な個人と自由な個人との関係でありたい。そのためには、自分に関するすべてのことを、自分の判断で処理できる権利と能力——「性と生」の自己決定権を持つことが必要であることを、生徒に伝えたい。

表 I

今年の女性学の内容	
1	女性学とは何か
2	セックスとジェンダー（性差の検証と克服）
3	カラーパープルから
☆4	性暴力
☆5	メディアと女性
☆6	売買春
7	結婚（愛という名の悲劇から新しいパートナーシップへ）
8	思春期（自立と依存のはざま）
9	家族（近代家族の誕生と性別役割分業の発生）
10	生殖（からだ私たち自身、避妊、中絶、生殖技術）
11	労働（近代の二つの労働、職場と家庭の課題）
12	女性学まとめ（フェミニズムの歴史と現在）

表 II

性暴力	
1	性犯罪―罪は誰にあるのか
2	強姦の神話と真実
3	強姦と法
4	性暴力の定義の書き換え
5	女性たちによる異議申し立てと裁判への支援
6	子どもへの性的虐待
7	セクシャル・ハラスメント（女性の働く権利の侵害）

メディアと女性	
1	つくられ、利用される女性イメージ
2	ポルノグラフィ―性暴力を再生産する装置
3	押しつけられる「美」（ミスコンテストについて）
4	「表現の自由」と女性の性的自由
売買春	
1	公娼制の歴史
2	「からゆきさん」「従軍慰安婦」
3	売買春と法律（売春防止法の成立をめぐる、新風俗営業法、女性差別撤廃条約）
4	売買春をどうとらえるか（到達点と克服の努力）
5	女性はずいぶん買われるか、男性はずいぶん買われるのか

昨年の女性学をやり終えての生徒の感想で一番多かったのは、「自分のために生きたい」「個人でありたい」といった内容のものだった。また「興味があったのは、学ぶ対象が自分自身だったから」「女なんて、しょせん八方ふさがりねと思っていたけど、そうでもないことがわかった」などだった。中には、女を囚人にとえ、この学習が「囚人が自分の犯した罪を調べ、牢獄に閉じこめられるようになったプロセスを調べたようなもの」と述べた生徒もいる。

女性学を学ぶことによって自分の生き方や存在を問い直し男女の関係を見直すきっかけになってくれたらと思う。

売買春問題ととりくむ会

〈高橋喜久江〉

今年で三十五周年をむかえた売春防止法を獲得した、売春禁止法制促進委員会(三十三団体)の後身組織が当会です。団体加盟(十六団体)と賛助員制度をとっています。

一九七三年に発足したときは「売春問題ととりくむ会」としてでしたが、五年前より「売買春問題ととりくむ会」と改称しました。活動のなから観光買春、少女買春などを造語し、買春構造こそが問題であるとしてきたのですが、みずからがそれを表現しようと、会名変更にいたしました。

売春をうみだすものに貧困があることはいわば世の常識であり、来日アジア女性の問題がそれを象徴していますが、「経済大国」日本でなぜ売買春が横行しているのか、それは売買春、とくに売春業者を公認している制度、公娼制度が厳存しているからだと主張しています。せっかく先輩たちの苦闘の結晶「売春防止法」があるのに、他の法規によって売春業者を公認し、少女を性的搾取する買春男性は児童福祉法の対象にならぬなど、法律面の矛盾とたたかっています。日本の戦争責任を担うため従軍慰安婦問題にもとりくみ始めました。

機関紙として「売買春問題ととりくむ会ニュース」を発行し、賛助員(年会費三千五百円)におとどけています。

連絡先 〒169 東京都新宿区西新宿2の23の5 嬌風会内
☎03-5886-4041 売買春問題ととりくむ会

自己紹介ぶるうぐい

東京・強姦救援センター

〈中嶋 淑子〉

東京・強姦救援センターは、一九八三年九月の設立以来、強姦の被害者への女性スタッフによる電話相談を中心とした活動を続けてきました。私たちの基本的な考え方は、強姦は男性の女性に対する暴力であり、性行為ではないということ、そして、強姦の問題を考えるうえでは女性の意志が何よりも重要であるという二点です。

この社会の中には強姦の被害者に対する誤った考え方があするため、被害者も「私が悪かったのではないか」と考えて自分を責めたり、あきらめたりしがちです。

私たちは相談活動の中で必ず「あなたは悪くない」ということを伝えるようにしています。被害者は「私は悪くない」ということを本当に実感できた時、傷つけられた人間としての尊厳を回復するための行動をとり、被害から立ち上がっていくための大きな一歩を踏み出す力を見出します。

必要に応じて、センターと協力関係にある女性の医師や弁護士を被害者に紹介することもできます。また、寄付で成り立っている基金「あきらめない女たちへ」の中から弁護士費用の一部を無利子で貸し出しています。

連絡先 〒135 東京都江東区城東郵便局私書箱七号
東京・強姦救援センター ☎ 03-3207-3662
相談時間 水曜 p.m.七時～十時 土曜 p.m.三時～六時

買売春の構図

―「戦争は命かけても

阻むべし」―

1 「女」偏のバラード

「男」の字が、耐え、と力の音意を持ち、「女」の字が手を前で組み、体をくねらせて膝まずき、柔の音を持つと語源は説く。とはいえ俗流に言えば、女偏の旗色ははなはだ悪い。好い娘以外は惨胆たるものである。家に入れば嫁、鼻につけば嫌、古くなれば姑、肌が波立てば婆など序の口で、箒を持てば婦、三人寄れば姦しく、しなを作るのが姿の字源で、嫉妬は女偏専売だし、娼を売って男をだませば妖婦だし、春をひさげば娼婦、君側で悪をなせば奸臣である。玄宋に大唐帝国を潰させた楊貴妃の様な美人は「傾城」とされる。孔子も論語で女性を差別した。「女子と小人は養い難しと為す。之を近づければ即ち不遜、之を遠ざくれば即ち恨む」と。さらに下世話

にも、その我慢の生理的痛苦にすら「嫁の尻は五臓六腑を駆けめぐり」と揶揄する。こうした差別からの解放を目ざすべき教育にすらセクハラが絶えない。職員室で女性の教師に「今度一緒に寝よう」と公言したA教師、生徒と廊下歩行中の女性教師の乳房をすれ違いざま掴んだB教師……。そしてAやBが今を時めく校長なのだから塞がった口まで開くというものだ。差別は再生産され、学校が荒れるはずである。

下ネタは古今東西を通じて尽きないが、コールガール、C・キラーとの関係から国家機密がソ連側に洩れたとされた英国の陸軍大臣プロヒューモの事件は、マクミラン内閣を崩壊させた。「007」を地で行く感じだが、最近の彼女は、寒々とした晩年を生活保護でからくもしのいでいるらしい。

「裂帛の気合い」で登場したわが宇野宗佑首相も、あわれ「明鏡止水」と去ったが、三本指で「これ位でどうだ」と女性を値ぶみするなどもはや論外である。それにサミットでサツチャーが握手するかを論じるマスコミ、握手してくれたと喜ぶ首相、いやはや語るに落ちた政府である。同日同時刻に、ニュージャージーとロスに存在できたNHK会長も、派閥絡みもあつてその神通力を失った。だから厚顔なタレントは言う。「ばれたら女の勝ち、ばれなきゃ男の勝ちだ」と。

2 差別し、利用し、使い捨て……

女性差別と商品化と使い捨ての歴史は古い。皇位継承にも

政權保持にも、女性は手段化された。イザナミ神話で既に女性性は、「不浄」と穢あきぎの原点に置かれた。卑弥呼も女帝たちも姿を消す頃、才女たかめ額田王は弟から兄へ譲渡され、安見やすみ児は天皇（天智）から臣下（鎌足）へ譲渡される。近代になっても、谷崎潤一郎から佐藤春夫への夫人譲渡事件があるが、いつも女性の姿は見えないのである。藤原政權も平氏政權も女性を最大限に利用した。娘を筆頭きんづねの后に、その夫を聖武帝として即位させることを目論んだ藤原氏は、それを阻む長屋王を謀殺した。奈良そごうの敷地から出土する木簡は、生々しくそのドラマを語る。北条政子の一時期以外、男性の歴史の中で、女性には常に「不浄」と蔑まれ、「腹は借り物」と利用され、性の享楽の対象として商品化され、まこと使い捨ての歴史であった。トンネル工事に女性が入れず、森山官房長官も土俵に上がれず、女人禁制の霊場がまことしやかに伝えられ、家元制度存続の為、華道・茶道は女性作法教育化され、ミスコンは生き続ける。女性アナの「容姿が衰えた」と配転したTV局もあったし、労働省婦人局長まで男だし、私の調査では、某有名デパートの係長以上の管理職は、婦人下着売場に至るまで男性だけであった。玉の輿が「逆玉」の時代になってもである。

「女御更衣あまた侍ひけるなかに」という冒頭から私は源氏物語に抵抗があったし、枕草子などを「私千年も前からキャ

リアウーマンやってんの。どう、驚いた。ま、いいんだけど」式の桃尻語にいくら訳されても、差別の構造の方が気になって心穏かならず、私は大学で国文科を脱出した。「徳川家斉に五十五人の子供がいて」というと、「すっごーい」と生徒たちが呆れる。「女大学」の七去を説明しながら「子無き女を去るべし」で、生徒たちは「なぜ」という。「夫れ妻をめとるは子孫相統の為なればなり。但し妾めかけこめに子あらば妻に子無くとも去るに及ばず」で「ひどーい」と生徒が驚く。こうした実感ぬきに、虚学や偽善教育の進んだ所に問題があった。

「妾の存在教えるに及ばず」は、文部省の家永教科書へのクレームの一つだが大きなお世話だ。だが検定クレームは、重要箇所を教えてくれるから、そこに重点を置いて教える間違いない。農民は言う。「政府と逆のことをすると生きていけないですもんね」。天草の老漁民は言う。「お上ちゅうもんな決して下々につくもんじゃなか」と。

3 「不幸」はかく作られる

買春の構図は、すべてこの差別の歴史的構造の上にセツトされ、貧困・暴力・権力・麻薬・戦争などの諸悪によって作動する。一方、性のメカニズムは日常の立場を突き崩す。

某有名会社の重役と労組委員長が、仲よく少女買春した事件は典型的である。



吉原遊廓の張見世(はりみせ)。客に呼ばれるまで寒暑も厭わず座り続けて待つ女性たち。まさに檻の中の苦界、籠の鳥であった。

凶作につけ込む 娘買ひの悪周旋屋

青森地方では三圓の手付で

「凶作につけ込む」は、青森地方では三圓の手付で、娘買ひの悪周旋屋が、客に呼ばれるまで寒暑も厭わず座り続けて待つ女性たち。まさに檻の中の苦界、籠の鳥であった。

娘の身売増加の記事 (1931年 東京朝日)

けた」という)が買売春の深い構造を造り出す。東南アジアでは、セイコーの時計で目を覚ます。カオーで洗顔、シセイドーで化粧、アジノモトで調味、東レを着てホンダで出勤という訳である。民族資本は潰され、労働力は買い叩かれ、メイドインジャパンの消費財の洪水で途上国の農村は貧困化する。

挙句は娘たちがジャバ行き化し、そこ

米対日占領下の RAA 慰安婦問題は、杉山章子さんの論文に詳しい(『女性学年報』第9号)。占領下の犠牲となった慰安婦は別に特殊な女性たちでなく、日本の女性の地位の象徴である。

ポリー 賠償使節団来日で

は、賠償の手加減を期待する外務省の意向で、セックスを含む特別接待班を RAA で編成した。「唐人お吉」は生きている。「RAA に属する日本人の 90%」「米海兵隊一個師団の 70% が保菌者(性感染症の)」「(前掲書 40 頁)とされている。腐熟した資本主義の必然的諸矛盾(『当節は「バブルがはじ

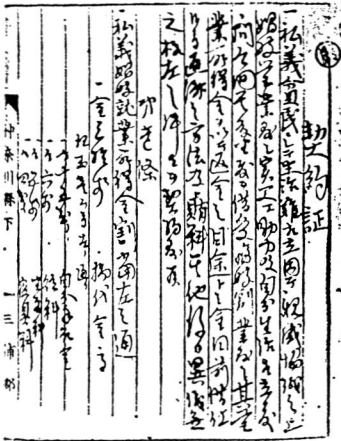
でまた日本人を中心とする下半身の国際化が始まる。娘たちを絞るのは暴力団、その資金源の麻薬の売人によって日本の少年少女たちも組織暴力・組織売春へ取りこまれ、新たな資金源とされる現状は深刻である。「不幸」の輸出国日本の国際化の接点で、財布と下半身という現実は大である。単純に金銭による買売春を、机上倫理や性的好奇心だけで論じる訳にいかない。

昔から売買される女性たちは常に小作農や零細庶民の貧困を背負い、負債で金縛りの状況にあった。経済不況は特に貧困と人身売買を生んだ。中国公安部資料で、'89 年摘発の売春は十一万五千件で、'86 年の 5 倍、女性価値が日本内で五万二千円から十一万八千八百円で売買されたという(『熊日』91・6・27) 米 FBI 発表の全米犯罪中、婦女暴行は昨年十萬二千五百

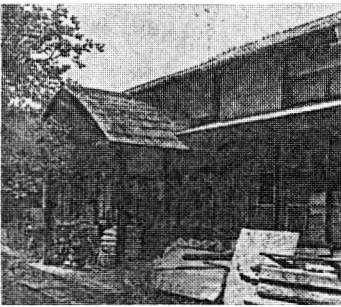
五十五件と報告された。(「熊日」91・8・12)。国連IFAD統計では、途上国農村女性の五億五千万以上が貧困にあり、過去20年で20%増である(「赤旗」91・7・29)。買売春の基本は、この世界の構造の中の性差別と暴力の価格標示に過ぎない。戦争の引き金は、それを直ちに無残な女性の命運として現出させる。

4 「戦争は命かけても阻むべし」

十一歳で軍の慰安婦にされようとした投書者は、七人の朝鮮人少女と十数人の沖縄の女性の一人として、日本軍四千の南大東島に送りこまれた(「朝日」91・6・4)。沖縄では千人以上が従軍慰安婦として徴発されたという調査があるし、「ひめゆり部隊」にすら、高級将校の慰安婦として扱われた



貧民の人身売買契約書



長野市松代の朝鮮人慰安婦の住んでいた家(91・7・19朝日)

少女たちさえあった。戦場での婦女子への暴行は、戦争を正義とする一点の弁明も許されぬ事実を、余す所なく晒け出す。「女子挺身隊」「従軍慰安婦」として戦場の軍隊に送り込まれ、ぼろぼろになって見殺しにされた女性たちが、朝鮮人や沖縄出身者に集中した差別の深刻さに、われわれは声もない。強制連行された朝鮮人慰安婦の一人は語る。

「朝から六十人の日本兵の相手をさせられたし、戦況悪化で兵は兇暴化し、最年少の十八歳の少女は、『オモニ(お母さん)』と言いながら死んだ」(「朝日」91・7・19)。雑巾のように使い捨てられてぼろぼろになった彼女の体と心は、自分の故国帰還さえ断念させた。

娘子軍というのは慰安婦船倉のハッチ閉じねばならなかった

懺悔(「朝日歌壇」91・7・28)。

朝鮮人慰安婦たちを船倉に閉じこめたまま、出口を封じて海底に沈めた男性兵士は、今年老いてその悔恨を言い残そうとする。女性たちの命運にわれわれは息を呑む。買売春の構図は重く、深いのだ。さればこそ、朝日歌壇の石井百代さんの歌が胸深く突き刺さって来る。「戦争は命かけても阻むべし母・祖母・おみな牢に満つるとも」

家族と家庭科

● 酒井はるみ

高度経済成長と

家庭の重視

70 (S45) 年の高校学習指導要領の改訂は、成長率二桁という急速な経済成長のただ中でなされた。家庭一般の目標は60年要領と比べると「家庭の幸福と健康」が「家族の幸福と健康」になり、保育領域に「親の役割」が加わっている。また、家庭経営の領域内ではあるが、「家庭生活と家庭経営」は「家族と家庭経営」に変わり、一度消えかけたかにみえた「家族」がまた浮上し、「家族の構成と役割」がとり入れられた。新たに「日常の作法」が導入され、家庭の経営においても、夫婦や家族の役割分担が言及されるようになった。

指導要領をながめているだけではうかがい知れないが、教科書を開くと、「いままでの家庭生活には昔ながらの慣習が残り、生活のしかたも著しくかわることはなかったが、現代

の世界では、私たちは、好むと好まざるとにかかわらず、社会の進歩に伴って生活を更新しなければならなくなる」(高校家庭一般、実教)、家庭生活でも「特に現代の都市生活は、生活環境、人間関係ともに悪化し、疲労しやすく、また孤独感や疎外感を受けやすい」(新編家庭一般、実教)ととらえている。

社会の急激な変化に敏感に反応し家族・家庭の内容においても、意識的にこの変化を記述していることや、家族や家庭などの用語もまた明確に使い分けて用いるなど、当時の社会状況に緊張をもって対峙しているという印象が強いのは、高校では占領時代以来のことである。

教科書を分析すると、家庭(生活)の意義(機能)が特に強調されているが、この背景に私は急速な核家族化をみる。核家族化と家庭の機能の単純化とは関連をもつて進行していると思われるからである(これが、「家族の構成と役割」をとり入れた理由だと私は考える)。そして、主婦の家庭外就労の増加による性別役割分業の危機、戦後二十年余にわたってつちかわれてきた、個人に価値をおく志向が家庭生活を動揺させてやまないことに対して、家族員個々がもちはじめた脱家庭的要因をどうおさえるかが、焦眉の課題だったのである。これらを視野に入れつつ、核家族化する家族に力を吹き込んで、家庭の機能を遂行させようとしたのだ。

家庭(生活)の機能については、①個人的な機能(心身の休養、子どもの養育・教育、経済的機能)と社会的な機能(労働力の提供、資本の提供と消費)がある(学研)、②衣食住の提供、教養・娯楽の提供、心身の休養、子どもの教育、老人・病弱者の保護である(一橋)、また機能は減少するが、今後とも家庭がになう「本来の機能」として、世代の継承と幼老の保護、経済的機能(家族全員に生活の保障を与えている)、精神的安定をあげるものもある(教図)。そして「私たちの家庭生活が果たす役割が大きく重要であることは、いかに科学・技術が進歩し、産業が近代化されても変わりはない」(学研)と家庭の機能が強調されたり、ある場合は美化されている。

さて、急速な核家族化は、特に高齢者問題への関心をよびおこし「拡大家族構成がくずれた結果、老人の経済的貧困・精神的孤独、身体が不自由になってからの生活などが新しく問題となってきた」し(高家、実教)、「若い者だけの家庭はいかに物質的に恵まれていても、何か精神的に乏しいものはないだろうか。……欧米の諸国では、小家族の欠点を痛感し、東洋には今でも祖父母を交えた楽しい家庭があるではないかとさえいっている」(教図)と述べるように、核家族化の進行に対して、障害者や特に高齢者の扶養の家庭外化への危機意識を高めつつも、家庭での扶養へと方向づけようとしたのである。

つぎに脱・家庭的要因である性別役割分業の危機については「従来のような『夫は外回り、妻は内回り』という固定した考え方では妻の負担が過重になりすぎる。変動の激しい生活実態に対応して、家庭生活を円滑に経営していくためには、従来の社会通念などにとらわれず、家族員が分担協力して家事を処理するような民主的な方針をとるべきであろう」(中教)というにとどまるのが精一杯で、「互いが常に信頼と敬愛をもち続」け(新家、実教)てことに当るというのが一般的である。社会化、外化という発想がない限り、家庭内で遂行せざるをえないからである。それにしても、妻の二重負担の軽減ははかるが、主たる担い手が妻であることには疑いもさしはさまず、これは家庭科四単位女子必修となったことに集中的に表現されている。

個人に価値をおく志向では「生活設計の根本は、民主的な個人尊重の生活意識に基づいて、個人の自由を認めるものであると同時に、家族が共同で責任を遂行するものでなければならぬ」(一橋)にみられるように、個人を尊重することを無下には否定しなくなっている。しかし、「家族が共同で責任を遂行」する際、譲歩が予想されているように思われる。だが、'68(S43)年の家庭生活問題審議会答申が、これらの教科書に影響を与えていると感じるのは、私だけではない。

男性学への契機

魔男の宅急便

■ 諸 橋 泰 樹

世界の終りと

ハーフボイルド・

ワンダーランド

名刺をさし出す時や、電話をかける時の「* *の諸橋ですが」に端的にあらわれているように、男性は、枕に肩書が付かないと不安でたまらない、というところがある。男が無職や主夫となったならば、肩書によってのみ成立していた男のアイデンティティは、たちどころに崩壊してしまうに違いない。この辺り「* *部長の妻」「* *君のお母さん」としてしか周りに認知されてこなかったような女性が、夫との離婚を無意識に恐れ、回避しようとする心理に、多少似ている（かもしれない）。だが、はなから「肩書」から遠ざけられる傾向が強かったがゆえに身ひとつで自由にいられる可能性をもつ女性に比べれば、男性にとっての所屬・肩書きは社会的拘束の喪失は、世界の終わりに匹敵する重要事なのだ。十代の最後から二十代の半ばまで、ぼく

は、準社員として量販店に勤めていたが、ぼくにとっては、その生き方は仮の人生、自分で認められぬ生き方であり、帰属意識はついに持つことがなかった。その後、そこで働きながら大学に入り、四年の後、卒論を書きながら大学院を受験しようとしたある朝、突然、憶えのある恐怖感と不安に襲われた。

——かつて、受験したどの大学の合格掲示板にも自分の名前を見出すことができないまま高校を卒業したぼくは、今日から自分はどこにも行く場所がなく、名乗るべき所屬先もないのだ、という空白感におしひしがれた。俺はあの恐怖感を知っている。いままた、全ての大学院に落ちたなら、あの高校卒業時の恐怖をもう一度味わうのか。再び量販店のみが自分の所屬場所となるのか。自分がいかなる者でもない、自分を必要とする場所のない、どこにも出かけなくてよい朝を迎えるのは、もうご免だ……。

男性が、実はそこ^{不思議の国}にいてもいなくてもどうってことのない「会社」というワンダーランドに、たとえノルマと残業に追われ過労死するぞと脅されても、ほとんどマゾヒスティックに通おうとするのは、「* *の諸橋です」と他者に対して自己紹介できることで自らのアイデンティティを保持できるといふ、そのことに尽きるのではないかと思われる。自分が人から必要とされる、これこそが自分の仕事である、という思い

は、よい意味で組織をスムーズに動かし、本人に自己実現をもたらず。人間はそもそも他者との関係においてのみその人となる社会的な存在であるのならば、必要としてくれる会社や上司や部下、夫や妻や子、生徒がいてくれることは、何と有難いことか。逆に、自分が誰からも必要とされていないことは、何とおそろしいことか。

だから、さして必要とされていないことがありうるとしたら（大いにあるのだ）、それを自覚することをしたがらないのも無理からぬことだろう。男性が、高熱を押してでも会社に出かけようとし、そして定年後、呆けたようになるのは、実感としてわかるような気がする。社会へ出て体を動かしてさえいれば、男性は安心し、諸矛盾を忘れ安定するのだ。社会は、そうやって、実はあまりに役に立っていない男をたくさん飼っている。飼うことによって男の思考を麻痺させ、女性も女性で、自分がいないと家庭が成立しないと思込むほどに麻痺させられている。

この六月、'91W夏季フォーラムの会場下見のために、実行委員の人たちと、八王子の大学セミナーハウスに出かけた。フォーラムのメイン会場となる講堂では、どこかの企業が従業員研修を行っているらしく、カーテンは閉めきられ、入口の内側には女性の社員がガンバっていて、内部を見学することはできなかった。その様子がひどく閉鎖的で秘密っぽい。

その時、講堂の中から、男性の泣きわめきとも怒号ともつかぬ、咆哮がきこえてきて、ぼくらは思わず顔を見合わせた。

——自分たちはやらなくちゃいけないんだ、一体きみたちは何をしているんだ、といったようなことを受講者が感きわまって叫んでいるのだろうか、精神の表層が無理矢理刺戟されハイになって出てくるだけとしか思えない、背筋の寒くなるようなかすれ声の怒号から、人格改造的な、すなわち「企業戦士」となるための集中的な集団セミナーなのだと言点がいく。彼らはいったん徹底的に自己否定されたのち、従業員に對しあたかく慈愛に満ちた会社のあり方に、一条の光を見出している最中だったのかもしれない。

こうまでして「会社」に適応し働こうとする男たちの、「降りたら？」と言われても簡単に降りようと思わない、滑稽ではあるが深刻なリアリティの背後には、会社が自分を必要としてくれている、必要としてくれる会社の一員でありたい、という帰属願望が横たわっている。会社から、そして家庭から、両者セットになった現行体制維持のためのシステムの「必要性」のくびきからの解放、そして同時に、ぼくが他者を必要とし、また誰かがぼくの存在を必要とする、そのような新しいゆるやかでやわらかな居場所（ワグ・スペース）の模索も、男性学の大きな、いや、もしかしたら究極の課題といえるだろう。

橋田の夢

愛という神の餌

武田 秀夫

私は二十九歳で結婚した。大方の人間が意外そうな顔をした。「センセイが結婚するとは思わなかったなあ」と卒業生の何人かに言われたし、友人たちは友人たちで、「言っていたこととずいぶん違うじゃないか」と私をからかった。

二十年以上も昔のことである。結婚についてどんな考えを抱いていたか、記憶はおぼろだが、周囲のそういった反応だけはよく覚えているから、それから推して、どうやら私は、「結婚なんて旧制度に縛られるのは」といった「過激な考え」を持った男と、回りから見られていたのは間違いないさそうだ。

若いころの私は負けず嫌いで、人と異なったことを言ってみたがる悪い癖があった。だから、内心はともかく、外に向かっては、結

婚について穏当な考えをもっている人にわざと議論を吹っ掛け彼らを困惑させるといった意地の悪いことをしたということは大いにありうるのである。

いやな野郎だと人は思っただろう。私にしても、思い出すだけでいやになるが、ちょっと弁解させてもらえば、私は、若いときにありがちな虚栄心からだけ、そうしたかわいげのない態度をとった、それだけでは必ずしもないようなのだ、思い出してみると。

私は若いころ、「結婚」ということについて、ちょっと妙な考えを持っていたのだったというところが、このごろしきりに思い出されてくる。

結婚する以上は、相手を選んではならない——それが当時の私の考えだった。Aという

女性とは結婚するが、Bという女性とは結婚したくないというように思うのだったら、人は、結婚すべきではない。Aという女性とBという女性との間に本質的に差異はないのだ、誰でもいいのだ、誰でもいい任意のひとりと暮らしを営むのだ、そう思えるまでにならなければ結婚をしてはならない。と、まあ、そんなアホな考えに、私は取り憑かれていたのである。

なんと観念的なと人は笑うだろう。なんと非人間的なと眉をしかめる人もいるだろう。私にしても、今になってみると、どこか間違っていたらしいと思わないではないが、正直に言うとも、愚かな私は、実は、今になっても、どこが間違っているのかよくわからないでいる。もっと言えば、もしかしたら間違っていないのではないかとひそかに思っている気配もあって、なんだかはずかしいのである。

「おれは結婚するとき、誰とでもいいと考えるべきだと考えた上で、お前と結婚しようと思っただけだ」

ある時私は、ポロッと妻にそう洩らして、ひどく糾弾された。

「あたしはあなたにとって、取り替え可能な、誰でもかまわない人間のひとりにすぎな

いのか」

そう詰問されて、私は、（まあ、誰でもそんなことを言われたら怒るよなあ）と認めつつ、一方で、（でも、その反発は、どこかおれの考えの核心をはずしたところから発せられているようだぞ。おれとしては、こんなに誠実な愛の告白はないと思うんだがなあ。なんで、そんなに怒るのかなあ）とぼやきもしたのである。いつかそのうちにちゃんとそのココロを妻に伝えようと思っていながら果たせないでいる。

「どうせ、私は、誰でもいい人間のうちのひとりだからね」と、妻は事あるごとに言う。

「またそんなことを言う。そうじゃないっから」

「何がそうじゃないのよ」

「つまりねえ……」

いつもそこで終わっている。

（まあ、言いたいことは、わからないじゃないけどね。でも、なんか、ワナが仕掛けられているようなんだよね、その考え方には）

妻の無言の中に、そんなつぶやきが含まれていることは、どうやら確かだ。

結婚して二、三年たったころだったと思う。

武田泰淳の「富士」という小説を読んでショックを受けた。結婚というものに関する私のなかなか人さまに広言できないいたひそかなる考えに、思いがけない光が与えられたように驚いたのである。

富士山麓の山荘に住む男が、庭に来るリスに餌をやり、一方で、ネズミ捕りを仕掛けて、家の中のネズミを殺そうとしている。その男は、山麓の精神病院の院長から、「やさしく」こう言われている。

「いつ来てもいいよ。君は入院の資格のある患者なんだからね」

さて、その男が手記に書きつけている奇妙な思念はというと、こうだ。

リスとネズミは、はなはだ似ている動物で、見れば見るほど同族のように思われてくる。

「それなのに、私、私たちは片一方を生かしてやろうとし、もう片一方を生かしてやるまいとしている」

「餌をあたえる者は『神』であり、餌をあたえられる者は『選ばれたる民』であるという教えには、どことなく卑しいもの醜いものがこびりついている」

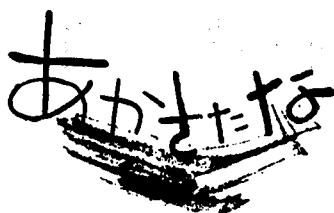
餌を与えることによってリスの生殺与奪の権を握っている自分は、リスにとってよき

「保護者」であると同時に、その気になれば、いとも簡単に彼を殺す「敵」になり得る。

「餌をあたえはじめたときから、その『神』は恵みの神、救いの神でありつつ、また怒りの神、抹殺の神でもありうるという運命をもつ」

さて、長篇小説「富士」の序章「神の餌」に触発された私の牽強附会的思念を開陳すれば、こうなる。

Aという人間とBという人間との間に、考えてみればそれほど差異がないのに、一方を好ましく思い、一方を厭わしく思うとはどういうことか。「愛という餌」をAには与え、Bには与えないということには、「どことなく卑しいもの醜いもの」がこびりついていないか。「愛という餌」が人を差別する根本原因とは言えないか。その一方、古来人は、AとBと二人の人間の差異にこそこだわってきたという、なにやら人性上の「絶対条件」と見えるものをそう簡単に捨象するわけにもいかず……。さて、この奇妙な「神のワナ」を逃れる方途として、「AとBと、誰とでもいいと思いつつ、任意のAとどこまでも行こうとする」という戦術は——、やっぱりどこかおかしいかな。



え・加藤由美子

ぶん・福田 緑

—ヤッちゃんとダンゴ虫—

「おはよう」

「おはよう。きょうはねえ、これ持ってきたんだ」

そう言いながらヤッちゃんが大事そうにランドセルから引っぱり出したのは、粘土ケースのようです。

「あら、粘土を持ってきたの？」

「うん。ダンゴ虫のお城」

「へえ、粘土でダンゴ虫のお城を作ったの？」

「うん」

うれしそうにうなづくヤッちゃん。私にはまだその本当の意味がわかっていなかったのです。

プレイルームに入って、

「ホラ」

と粘土ケースのフタをそっと開けて、ヤッちゃんが見せてくれたものは……

「ギョエ~~~~~!!」

なんと百匹位はいるかもしれない本物の正真

正銘の生きてうごめいているダンゴ虫だったのです。油粘土で作られた大きなかたまりには、ちゃんとフタまでつけてあって、中は空洞になっているようです。ヤッちゃんは、そのフタを開けて、次から次穴の中にダンゴ虫を入れていきます。

「この中に何人いると思う？」

「ううん、五十匹ぐらいかな? 百匹ぐらいかなあ」

「千人ぐらいいるよ。ホラ、こっちにも」

別のかたまりを持ち上げるとまた、ウジャウジャというわ、いるわ……。

そうこうしている間に、ヤッちゃんの目の届かない箱の横ちょをダンゴ虫がよじ登っていきます。あ、落ちそう。これはヤバイ。この部屋の隅っこにダンゴ虫がはい回るのを見たら、確実に恐怖の声をあげる人がいるし、子どもの中にもいそうだし。少なくともこの机の上から落ちないようにしなければ……と、私がシャープペンシルの先っぽでおそる

おそる箱の中にダンゴ虫を押し戻すと、

「手でやんないと痛いでしょう！」

すかさず叱られてしまいました。

「あ、ゴメン、ゴメン」

私もダンゴ虫の一匹や二匹、さわれないわけではありません。でも、こう一度にワァーッと大群で見せられると、正直、鳥肌が立ってしまふのです。一度そうなると、なかなか心のふるえは止まってくれません。出たり引っ込んだりする鳥肌を心の中でなだめながら、ヤッちゃんとの会話は続きます。

「あ、あんなに大きいのがいる！」

「そうだよ、これボ、シ、ユ」

「へえ、大ボスだ。こんな大きなダンゴ虫、初めて見たなあ」

「ホラ、こっちには白いのもいるんだよ。こちら、君はおうちにもどきなさい」

ヤッちゃんにとって、ダンゴ虫はあくまでも友だちなのです。



現代生活考

むらさき 数子

「髪の毛は命」——朝シャンの定着

「この頃Sの奴、色気づいてきて……」

「色気づく、ってどうしてわかるの?」

「毎朝、バリバリに髪型きめてくるのさ」

高一の息子とこんな会話を交わした頃「去ったのかな?」

朝シャン・ブーム(『朝日新聞』91・2・19)という記事に

高校生の朝シャン率が下がったとあった。ほんとかな?

八四年発行の落合茂『洗う風俗史』には、「朝シャン」は

予測されていなかった。

八六年九月、「遅刻してでも朝髪を洗って来る」『宿泊研修で、凍りそうな水しなくても朝シャンプーして風邪を引く』生徒たちの話を、埼玉県立高校に勤める友人から聞いてあきれかえったのだが、その秋、小六だった息子も朝シャン

派になっていた。

「朝シャン」が身近な話題になった頃、すでにシャンプー・リンス・整髪剤・シャワー付き洗髪洗面台が売り場にあふれていた。この年は、男性ファッション誌の創刊があいつぎ、男性のメーカーキャップ化粧も流行と騒がれた。八八年一〇月には朝シャン用タオル発売、爆発的な売れ行き。倍の価格で吸水力には大差ない「朝シャンタオル」、わが家にも今年、贈答品として入り込んできた。

「朝シャン」をめぐる業界の仕掛けは、「第二次ベビーブーム世代」と呼ばれる一九七一年から七四年生まれの巨大な人口を市場とし、彼らのおしゃれ志向と清潔志向を標的に、他世代にまで浸透しつつある。洗口液・抗菌ブラウス・新型便座、一回使い切りの薬品からパジャマにいたる使い捨て商品など「清潔商品」の数々……。

子どもの世界で、不潔はいじめの的。千葉縣市川市のKさん、「小五の娘は髪はめんどろがって週二回くらいしか洗いません。でも、四年生のころから、同じ洋服を二日続けて着ていたら『㊤』と言われるとか『フケツ』と言われると、毎日汚れてもいない服が家のあっちこっちにひっかかっている状態です」。

東京都北区の小五のT少年は、同級の女子の「髪の清潔な男の子がいい」と言う会話を聞いた日から毎日髪を洗い始め

た。体を洗うのは依然として数日おき。

男子高校生たちは言う。「だって、制服がビシッときまつて、カッコつけられるとこっていったら髪の毛ぐらいしかないじゃん」「オレたちにとって、髪の毛は命だってことを、もう少しわかってほしいな——」

「髪は女の命」なんてチョー古いのだ！

男子学生は「清潔でなければ、女性にもてない」と考え、社会に出れば「清潔に見えるのはマナーである」と脅迫され、中高年は若者に嫌われないために清潔を心がける。

私の八九年秋のアンケートの回答は、母親による一週間の観察結果だが、小学生から二〇代に至る子供たち六〇人のうち夜以外の時間帯に洗髪することがある「朝シャン」派の子は一人、二三%、毎日洗う子の三三%、週に五回以上洗う子の三九%が「朝シャン」することがある。

この数字は、世間がブームと言っているにしては案外低いものだが、神奈川県逗子市の中三のS少女は書く、「洗髪は毎日。だけどお母さんがうるさいし、朝は洗面所が大混乱するので夜にしている。そりゃ、髪型を決めるのは朝がいいけど」。東京都板橋区の中三のN少女は「毎朝ざりざりまで寝てて朝シャンどころじゃない」「朝シャン」したいけどできない状況にある子も多いようだ。

三〇—六〇歳の女性でも八八人の一五%が、「朝シャン」す

ることがあると答えている。一〇—二〇代の娘、息子が「朝シャン」するのに慣らされて始めたり（私もその一人）、水泳に行った後で洗う、などのことから、洗髪は夜入浴のときにするもの、という思い込みが揺らいで生活習慣が変わっていく。

「若い女性の朝シャンや減少」（『朝日新聞』91・7・30）との報告もあるが、「朝シャン」は性・世代・職種を越えて広がっていることから、ブームではなく「定着」しつつある、つまり、入浴、洗髪は一日の終わりにするものという意識が流動化していると言つてよい。

ところが、マスコミは「朝シャン」という語を、頻繁に長時間洗髪するという意味で使うことが多く、水・熱資源や健康の面での弊害への批判も、「朝シャン」批判という形をとる。「朝シャン」を「合成洗剤メーカー側が日本の若者たちにうえつけた奇怪な、そして驚くべき生活慣習」（『ブックレットくらしの科学③ やっぱり石けんをえらぶ』）と評するものもある。「I君も朝シャンやとりますか？ あれは体によくないそうやね」と孫を案じる姑も、「朝シャン」は頻繁長時間という理解。

新聞の投書欄に現れた「朝シャン」は、女子に対しては、朝食の用意も手伝わずおしゃれなんて、と。男子に対しては「男の分際で朝シャンとやらをする長男。実に情けない」と

か、「朝シャンドミノ倒しがこまでくると、もうオシャレどころでなく、病める美学とでもいべきで、背筋がゾッと寒うなる」などと、八六年に男性化粧の流行をめぐって交わされた「男らしさ」論議が繰り返されている。

けれども、朝、髪に櫛を入れ髭を剃るために鏡の前に立つことを「男らしくない」と非難する人はいない。たぶん、基礎化粧や「朝シャン」も、男の身だしなみの一部として容認されていくのではなからうか。

そもそも、頻繁に長時間洗髪することの環境・健康・経済への影響は、朝であろうが就寝前であろうが同じ、である（夜間電力料金は違うが）。

八九年秋の私のアンケートでは、洗髪の頻度も、毎日洗うというのはごく新しく、まだ一部（一四四人の一三％）の現象であり、隔日という人が最も多い。母・姑の世代一人では週に一回以下が五五％、残りも二、三回まで。

洗髪は一〇日に一回とか月に一回という記憶が七〇代以上の人であり、戦中・戦後もそうだった。私自身、二〇年前は週一回だったし、隔日になったのはこの数年だと思う。

昔から華族や芸者にとって入浴は一日の活動開始前の日課であったし、美容院や理髪店へ行けば、昼間でも洗髪した。

入浴は「一日の終わり」にするものとか、洗髪は入浴と同時にすべきだという思い込みは、「五日に一度は洗いましょ

う」から「毎日洗いましょう」へとシャンプーのコピーが変わったように、案外新しいものだったのではないか？

ところが、「もの心ついた頃から自宅にシャワーがあった」世代が育ってきた。すでに一九七〇年度の東京で七六％、現在では九〇％以上の世帯に自家風呂・シャワーがある。ジョン・ウェルズが『一〇代の子を持つ親の本』で描いた七〇年代のアメリカの子どもたちのように、毎日三〇分以上シャワーを占拠し、日に一度以上髪を洗う「半水生動物」に、日本の子どもたちもなりうる状況が熟していたのだ。プラス業界の仕掛け。

夜洗ってドライヤーをかけても、朝また寝癖を直さなくてはならない、いっそ、洗うのもドライヤーも朝のほうが合理的と実行に移すのは、大人の思うほど、とんでもないことではなかったのだ、少なくともわが家の「半水生動物」の場合は。息子の「朝シャン・シャワー+ドライヤー」に要する時間はせいぜい十分。夜やらない分だけ時間・水・ガス・電気が節約できている。

今後「朝シャン」はあたりまえの習慣になるだろうか？

経済大国のうさぎ小屋にはシャワーは二か所ない、S少女の嘆きは続くだろう。日本の「半水生動物」たちは、親となったときに、子どもが目覚めたら入浴させ、「外出する前にシャワーしなさい」としつけるだろうか？

オホーツクの潮風荒く…

■江口 凡 太 郎

(1) センセー、家族のいない人は どうするの？

「自分と家族の生活時間表」を書く作業をしているとき、A子が質問してきました。A子は、入学時の書類では母親と姉と暮らしていることになっていましたが、後でわかったことですが、実際には親戚の家に一人身を寄せて暮らしていました。A子には自分の生活時間だけ書くように指示して、その場をきりぬけました。

同じ時間、フラフラ歩き回って作業に取り組まず、再三私の注意をうけていたB子は、作業プリントに次のように書いてきました。「家族っていつても、ただおなじ家にすんでいるだけ。団らんだの協力だのという言葉はない。こんな課題を出されると一番こまる」。A子やB子のようにきつい状況の中で登校してくる生徒のことを、配慮しているつもりでした。この時も、教科書などには「家族全員」の生活時間の比較となっていたのを「自分と家族のだけか一人」とすることに気がついていましたが、充分ではありません。

した。さらに、問題点はそれだけではありませんでした。ほとんどの子が、「団らん時間が短い」などと、教科書的な「正解」を書いてきました。これでは家族生活のステレオタイプを暗に押しつけていることと同じです。

じつはこの作業、日々の授業内容の枯渇に悩まされ、苦しまぎれに取り入れたというのが正直なところですよ。彼らはわたしの話を五十分間おとなしく聞きます。こちらでも、黙って聞くような魅力ある話ができるわけではないので、授業で生徒が手を動かす場面、考える場面をつくるのに苦心しています。

駆け出し教員、失敗のひとつやふたつ笑ってごまかそう！と、事務処理ミスなどは開き直る時もありますが、日頃特に大切にしたいと思っている部分での失敗だっただけに、力不足を痛感させられました。

自分から意志表示をしてくれた二人には、個人的に話をすることでフォローしましたが、同じように感じていてもそのことをわたしに伝えられなかった子の気持ちは、十分に汲みとることができませんでした。

最後に、どの教科にもいえることですが、家族について丁寧に学習するには、教師の力量もさることながら、一クラス四十三人はあまりに多すぎるようです。

(紋別南高校家庭科)

家庭科の難しさと面白さ

—買売春を考える中で—



半田たつ子



今年のフォーラムはとりわけ楽しかった。
なんと素敵な方たち!

が、その余韻に浸る間もなく、日本女子大通
信課程の方たちのスクーリングが始まった。
この学生さんがどんなに熱心かはすでに経
験済みである。いま、教職にあって、ごちゃ
ごちゃ文句を並べている人たちに代われぬも
のかと思うほど。一時半きっかり教室に入れ
ば、一三二人びしっと着席して、授業を前の
めりに待ち構えている。朝八時半から始まる
授業をたっぷり受けて、昼休みは夫が連れて

きた赤ん坊にお乳を飲ませることで使ってし
まった人、出産や家族の病気やらで、二、三
年休み、状況が許したので勉強を再開した人
……が、目を輝かせて机に向かっていている。

私も五時までの授業を終えて帰宅すると、
この号を考えるために求めた『売春の社会
史』（筑摩書房）を読みふけるハードな日々
だった。昼と夜と、全く違うテーマを追って
いたけれど、実は両者はつながっていた。

古代オリエントから現代まで、と副題がつ
いたこの本は、ニューヨーク州立大学の歴史
学の権威バーン・ブローと看護学部の前学
部長ボニー・ブローの共著で、初の本格的
世界通史。五百ページを越すボリュームに圧
倒されつつも、買売春の構図が解けていくの
は面白かった。女性の地位の変遷の歴史であ
り、男女関係の歴史でもある。いや、世界の
歴史は買売春の視点から書き改めることがで
きるのではないかとすら思った。

元売春婦のためのコロー「かにた婦人の
村」を訪ね、さっちゃんの話聞き、その作
品を見せていただいた時の感動を新たにし
た。大阪の川のはとりで性を売っていた彼女
は、保護された時、身重だった。生年月日は
もちろん自分の名も知らないの、大川幸子

と名付けられて「かにた」に送られた。どん
なに教えても、「ち」しか書かない。「さ」
は向きが気にいらないので、ちちちちちち
と書いて「おおかわさちこ」のつもりだとい
う。そのさっちゃんが、過去を葬って土をこ
ね、絵を描いた時、眠っていた才能が輝き出
す。彼女の作品を見せて下さりながら、施設
長深津文雄氏は「さっちゃんが描いた絵を順
に並べて、それに見入っていると、まるで壮
大なシンフォニーを聴くようです」と言われ
た。「人間が、この地上に生を享ける限り、
それが全く無用なものであるはずがない。我
々がもし造物主の目をもって洞察しうるな
ら、無用といわれる人々の中にも、必ずなん
らかの可能性を発見しうるに違いない。それ
がどうしても見えないとならば、それこそ信
ずるはかはない」とも。

十二年前のこの訪問記は「人間って不思議
」の中に納めたが、その時書けなかったこ
とがある。自分の名も知らない知恵遅れの女
性も性を売ることが知っていたのだらうか。
知恵遅れをいいことにして、彼女に売春させ
食いのものにしていた男がいたのだらうか。そ
れを深津氏に尋ねるのは、さっちゃんに失礼
に思えて、私は疑問を飲みこんでしまったの

だ。

もう一つ売春について、私をぐさっと刺した
ものがある。ナワル・エル・サーダウィの『0度
の女—死刑囚フィルダス』（三一書房）だ。貧しい百姓の娘としてエジプトに生まれ

たフィルダスは、幼い日割札を受ける。悲惨な子供時代を経て、叔父の助けで学校に行き、勉強が好きで高等学校を優秀な成績で卒業する。しかし、大切な卒業証書と優秀賞を生かす基盤が彼女にはない。売春まがいの生活に引きずり込まれ、売春婦を取締まる警官すら彼女の体をはしきまにし、金も出さずに放り出す。絶望の中の彼女をエレガントな寝室に誘った男が、翌朝十ポンド紙幣を指の間にすべりこませる。フィルダスは、生まれて初めて、だれの干渉も受けずに、自由に食事をする。この日から、彼女は自分の心と体を自分の思い通りにすることができるようになった。性を売しながら…。

しかし、客の一人が真直ぐに彼女を見て「尊敬に値しない」と言った時、彼女の人生は転機を迎える。高校の卒業証書を生かして、会社勤めをし、会社の革命委員会の委員長と輝くばかりの恋をする。が、彼は社長の娘と婚姻してしまう。彼女は売春婦としての屈辱

よりも深く深く傷付き、売春婦のほうが、どの女子従業員より尊敬されていたと気付く。血の中の浄らかさの最後の一滴を捨て去り、彼女は誇り高い高級売春婦となる。

政府の高官、外国の要人すら彼女を得ようとして躍起になる。彼女は言う。「最も安いのが妻の体だ。私は利口なので、奴隷のごとき妻にならないで、自由な売春婦になった」と。遂に彼女は、自らの誇りを踏みにじった男の首を、胸を、腹を、あらゆる部分をナイフで刺し、殺してしまふ。その直後、つきあっていたほしいと言いつつアラブの王子、その彼がフィルダスの殺人を信じないことで、平手打ちをくらわせ、逮捕され、死刑を宣告される。大統領に恩赦を訴えては、との勧めを敢然と退け、フィルダスは、誰も知らない場所の旅立つ。王や王子、どんな支配者よりも優越感を持つて。

四年前に読み、その時も鮮烈な感動を覚え、Weにも短い紹介文を書いたが、『売春の社会史』の後で読み直すと、新たな感慨があった。

『売春の社会史』は、あらゆる時代・社会で売春の皆となっているのは、性の二重規範であるところり返し述べている。同時に売春の温

床となっている貧困、薬物依存、その他の社会悪も排除しなければならぬが、このようなユートピア的な解決に到達するまでは、あるがままの姿の売春とよりくまなければならぬ。こうして、売春が人間の性の営みに占める割合は減り続けるだろうが、売春婦への需要はなくならないだろうと言いきる。

スクーリングの学生さんは、最後に十一班に分かれ、二人ずつ組んで模擬授業をした。沢山の意欲的な授業が展開されたのだが、一方で売春を考え続けてきた私には、知識を与えて、心がけを話して、「分かりましたね。……するようにしましょう」と結んで終わる家庭科に、深い疑問を持った。どんなに熱心に学んでも、一週間そこそこで、新しい発想の授業を行うのは無理というものが。これは家庭科のベテランの先生の授業にも見られる弱さであり、82ページの分校淑子さんの意見にも通じる問題だ。買売春が人間の尊厳を冒すものであると分かって「あなたたちは、売春も買春もしないよう」と言うだけなら簡単だ。なぜ買売春があり、なぜなくならないのか、そこを深く考えさせることが一番大事なのだ。——家庭科の難しさと面白さを、再び三たび、四たび思った。

こだま

「小学生が『死』を考える」

を読んで

(編集部)

七月号「小学生が『死』を考える」は、大きな反響を呼びました。授業をされた植垣一彦さんから、左のお便りが届きました。下田小四年二組の子どもたちのお母様の反響をお知らせします。

(6・23)

◆クラス全員分のWeをお送りいただき、ありがとうございました。次の手紙を添えて、子どもたちに渡しました。

植垣 一彦

四年二組 御父母のみなさんへ

挨拶状が添えられて、子どもたちの書いた作文の掲載誌が贈られてきました。依頼がなかったら、私も子どもたちも、ここまで真剣に「生と死」の問題を考えなかったかも知れません。その意味で、ウイ書房の半田たつ子さんに深く感謝申し上げます。

それにしても、子どもたちの作文は、未知の野見山美子ちゃんに対して限りなく優しく、「生と死」に対して誠実です。読み返すたびに胸が詰まります。(略)

「先生は、十人ぐらいの作文を選んで、あとは参考にしたんだけど、編集部の人々が、全員の載せましよう、とおっしゃってくださって、全員の作文が載ってます」と言うのと、「おー」と拍手が起りました。

そしてその後、きつい一言をもらいました。「先生、十人だけだったら、どうするつもりだったの?」

「うん、そりゃあ、しかたないから、あやまるつもりだった」

全員分、本当にありがとうございました。渡した次の日、すぐ一人のお母さん(普勝さん)から連絡をいただきました。反応がすばやくて、とてもうれしく思いました。

なお「死の教育」で気になっていること。多くは、どうもあちら(外国)の方法に目が向きすぎているのではないか。わが伝統社会

の死をめぐる知恵にもっと目を向けて、「死の教育」は構想されるべきではないか、とまとまらないままに考えたりしております。

昨日、夏休み前の懇談会がありました。

We誌の作文をめぐって、というテーマで、いろいろと話しました。そして何と、石橋真理ちゃんのお母さんが、「生と死を考える会」に、行ってきたところですよとおっしゃって、まあ、びっくりしました。

その後、この件で連絡帳をもらいましたので、ご紹介します。

(7・9)

◆裕美は、この作文の件を何も話していませんでしたが、「人間は何で死ぬの?」というようなことを、一時くり返し聞くことがありました。しばらくして、あけっぱなしのランドセルの中から野見山美子ちゃんの作文のプリントを見て、私も後から後から流れてくる涙をどうすることもできず、また裕美が、食事時やお風呂に入った時などに、くり返ししてきた質問の意図もわかった次第です。

私も小学二年生のころ「死」についてずい分考えました。そして、やはり自分の死より両親の死のほうがずっと重かった記憶があり

ます。その当時、夜中によく目をさましては母親の寝息に耳を澄まし、安心してまた寝つくということがよくありました。

今、命なんて無くなったらコンビニで買ってくればいいと思っているとしか見えないような粗雑な死にかたをする若者たち。テレビで写し出される戦争の様子を、「きれい」とか「かつこいい」という見方をする子どもたち。そして、その戦争を引き起こし、加担するのにも感じない大人たち。子どものころからもともと「命」の大切さを、「死」というものを、私たちはくり返し教えていかなければならないと思います。この「We」誌の長谷川孝さんの言葉にもあるように「生と死（いのち）」を考えることは、自分が自分らしく生きることへの感受性や主体性を育てることにつながる大事なこと」ですから。

（普勝）

◆「We」を読ませていただいて、子どもたちなりに、美子ちゃんの気持・境遇を受けとめて、しっかりと内容・文章力での執筆、どの子どもたちにも拍手を贈りたい気持です。

そして、お父様を亡くされた美子ちゃんは今本当にお気の毒ですが、何の不自由もない今

の子もまた心の心を動かす、すばらしい文章を書いてくれた美子ちゃんにも拍手を贈りたいと思います。そして、クラス全員の文章を掲載していただいたこと、心より感謝いたします。

わが娘、自分の文が活字になったことがとてもうれしかったらしく、両方の祖父母に送りたいとのこと、二冊購入したいと思っています。よろしくお願い申し上げます。（金平）

◆「We」ありがとうございます。家中で回し読みしました。「タバコ・ビール・お酒、おそくかえってくるのはやめてねって」というところは、赤線を引いて、主人に見せました。タバコ・お酒・睡眠不足は体に毒、という私の口ぐせを、父親への思いをこめて、文人なりに表現したのでしょう。主人も、しみじみと心打たれて、しばらくじっとしており

ました。文人は、神社仏閣・墓・仏壇にまいる時はいつも家族・親戚（植垣先生も、もちろん含んでおりますが）の「永遠の命」を願っておりましたが、今年の正月に祖父を亡くし、永遠であると信じて疑わなかった人の命にも限りがあると知り、「永遠というのはわりかも

しませんが……」に変わっていったのです。

通夜、葬儀、火葬場、親類や町内会の人々の酒席と、八歳の文人は初めて死と直面し、恐ろしさと共に、厳肅な気持でそれを受けとめ、大きく成長したのでした。

「永遠の命」のお願いは「永遠が無理なら、せめて死ぬ時、皆が苦しい思いをしませんがよろしく」に変わり、死の観念が、おぼろげに確立されつつあるのだと思います。

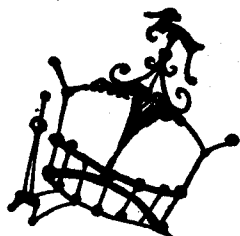
クラスの皆の作文を読みながら、あの腕白ぼうずが、あのおてんばな子が、と思いながら、外見から見えない内面のやさしさ、ナイーブさに触れて、古今東西、子が親を思う気持の深さ、美しさに心打たれました。

文人の作文を、今、もう一度読み直しても涙がじわっとわいてきます。いつまでも、この純な気持、やさしい気持を失わずに、大人になっていつてほしいと、切に願わずにはいられません。これから先、難しい年ごろになった時、また、この作文を読み直してみましよう。反抗的になった時、文人の原点はこの作文にあるのだと考えようと思います。

植垣先生、私たち親子にすばらしい贈り物を、ありがとうございます。

（上村）

We
に
なんでも
言おう
なんでも
聞こう



◆四月号の佐藤通雅さん—私はどこかで、「歌詠みの佐藤先生」が、頭にしみついてしまっていて、連載中も「黒縁の眼鏡の角ばった顔の、どっしりと落着いた方」とばかり思い描いていました。やがて「ひと」欄をみてあまりの違いにびっくり仰天。そしてこの度この文章に出会って、もう一度驚きました。学校を外から眺めて感じていた苛立ち、無気味さを、学校の内側からも見抜いていらっしやることに。

「学校も、家庭も、こういう若者を共有してしまっているのだ」という観点を、教師と親が共有することができれば、事態はよい方向に向かうでしょうか。

「わたしの一九九一年一月十八日」の金田富佐江さん—臨場感あふれるこのような声が、誌面に記録されて残るのは、大切なことだと

思いました。新聞やTVに登場する「市民の声」は、情報の渦の中に吸い込まれて消えてしまいうさだし、インタビューに応えた受身の声が多いようだし……。

「湾岸戦争についての夫婦の対話」は、QとAに役割を固定しないで、自由会話方式にすればよかったのに……。でも、ただの解説記事より確かに読みやすく、わかりやすく、複雑な湾岸情勢を見る目を養われました。

「教育の現場」の納已孝志さん—目立った暴力沙汰などは影をひそめても、ごく当たり前に、日本中の学校で日常起こっている問題をよく反映した報告だと思いました。47頁下段の「生徒たちは限られた世界でしか生きていない。…家庭と学校…どちらか一方の人間関係がおかしくなると、いろいろ問題が起きる」との指摘にうなずき、子どもたちの生きる場所を、広げてやることを、大人たちもつとめなければ、と改めて考えました。（それにしても「教育の現場」というタイトルのつけ方に、もう一工夫欲しかった）

（東京・川名はつ子）

◆四月号の教師たちの多様な意見、感心するものもあれば、がっかりするものもありました。私が最も感心したのは、埼玉の高校の先生、納已孝志さんのものでした。私も全く同感です。We誌も、ときどきはこのように「家庭科」や「女性」の枠を越えた教育論を試みられるといいのでは、とふと思いました。

なお、河上氏および「プロ教師の会」の相当詳しい主張については、JIC出版の「別冊宝島129—ザ・中学教師、子どもが変だ!」（一九九一年三月）に載っています。同誌の内容のほとんどは、河上氏らの原稿で埋まっています。抹消的な個々の記述内容を問題にするよりも、彼らの子ども観・教育観・人権観など、基本的な部分に、大きな誤り、欠陥があることが、この雑誌を読めばいっそう明白になります。We誌で再度取り上げてみるのも面白いかもしれません。（高梁・岡本隆夫）

◆七月号の特集は、私にとって非常に関心のあることなので、多くの共感を持ちながら、読ませていただきました。私は今、職業訓練校で介護を学び始めて、三か月になるのですが、介護を学ぼうと思ったのは、それによってターミナル・ケアにアプローチできたい、と考えたからです。

六年前に祖母が亡くなり、その一年後に父が亡くなりました。祖母は九十四歳でした。高齢の祖母に会う度に、元気な祖母に会うの

はこれが最後かしらと思ったり、いや、この人は永遠に生き続けられるのではないかしらと思ったものでした。

一年もたたないうちに父が亡くなりましたが、この時に、人間の命というものは有限であり、世代的には祖母、父と続き、次は自分の番ではないかと強く感じました。つまり、自分の命の有限であることを、はっきり自覚させられました。

父の六か月の闘病生活を見ていて、種々の疑問がわきました。それなら自分はどのような闘病生活を送りたいかに関心がいき、ターミナル・ケアがあるということを知りました。

そして、自分もなんとかターミナル・ケアに関われないかと考えるようになりました。七月号を読んで、ターミナル・ケアに関心を寄せる自分の根本のところには、自分の命は有限であるという思いがあることを再確認させていただきました。

(東京・草間葉子)

◆最近のWeは、毎号のテーマが楽しみです。

七月号は特に「生と死」がとりあげられていて、学校教育云々をおいておいても、興味のある内容でした。

このテーマをあげられたのは、あるいは半田さんのご経験からなのか、とも思いました

が、東京衛生病院のこと、三育学院短大のこと、とても深い思いで読ませていただきました。というのも、実は私の父が最近、病い重たいことを知らされて、身近な人の看取りは、私自身の問題になっている、ということがあります。私などは、自分の問題になってはじめて実感されることばかりで、今までは何といてもひとごとだったんだな、と改めて思っているようなことです。半田さんのお心を観察しています。

死の問題から逃げない生き方が、これからますます求められるでしょうし、「教育」の中でそのことを真正面から取り上げていこうという姿勢は、さすがWeだ、と感じ入っています。

(長岡京・菅原充子)

◆「死」をテーマにした七月号、とくに興味深く読みました。私も現在、このテーマに関連して、メキシコでのフィールドワークの体験を書いているところでした。あちらでは、十一月に「死者の日」というのがあって、子どもたちが、文化の厚みの中で死に向かい合っています。私も滞在先のメキシコ人家庭の母親から、私の名前を書いた「しゃれこうべ」をプレゼントされました。砂糖菓子でできていて、死者の日に食べるのです。詳しくは、い

ずれました……。

(長岡京・吉田敦彦)

◆七月号は、私にとってすばらしい内容でした。友人にも見せてあげました。今後ともよろしく願います。

(大分・大岩比佐枝)

◆七月号に私の文章を載せていただき、ありがとうございます。日々看護学生と接していますと、小さいお子さんの考え方がわかりにくいのですが、「小学生在」「死」を考えることで、自分自身に引きつけてとらえられることがよく分かりました。また、たいへん誠実に深く考えておられることに敬服しました。このことは、授業でも生かすことができますし、大変参考になりました。厚く御礼申し上げます。

(東京・平田文子)

◆「高齢化社会、そのデザイン」という夏増刊号のテーマは、75歳をこえた私には、まことに何よりも勉強して知りたく、考えたことのすべてのように思えます。これからじっくりと読ませていただくとうとハリキッテいます。平常に交流のある千葉大の天野正子先生もお書きになっていらっしゃる、といっそう楽しみです。

(東京・宮下喜代)

◆私は30歳で、書店で働いています。8・9月号の特集「ひとと生殖」、ヤンソン柳沢由

実子さんの「出生率低下、これからのビジョン」#1・57という数字はちっともショックではない」というお考えに同感です。また吉廣紀代子さんの「つぶやきから叫びへ変わった『産みたくない』女の声」、このお二人の文章を読んで、日ごろ考えていることをお伝えしたくなりました。

まず、結論から申しましょう。私は、現代のような社会に、人間は子どもを産んではないかと考えております。人の一生は、苦んで苦しんで苦しみ抜いて死んでいく過程にすぎないのに子どもを産むというのは、罪悪であると考えられています。

今の日本に産まれてくる子どもたちを待っているものは、差別と競争です。学校では、小学校から大学に至るまで、知識・技能獲得競争と学歴獲得競争がえんえんと続けられ、テストの点数によって順位がつけられ、トップから最下位まで並べられます。そして、それぞれ知識量・学歴に応じた職業へと振り分けられます。そうやって送り込まれた企業の中で繰り広げられているのは、マネー獲得競争です。金に振り回される生活が、死ぬまで（いや、死んだ後も）続けられることになります。自分の時間など少しも持てないほど

の長時間労働とともに。金がなければ一日たりとて生きていけない社会なのですから、誰一人として、貨幣の呪縛から逃れることはできません。

現代を生きる日本人は、知識獲得競争と、マネー獲得競争と、そして、恋愛・結婚と呼ばれる異性獲得競争に明け暮れ、傷つき、心身ともにボロボロになって死んでいくのです。産まれてくる子どもたちには、こんなひどい現実しか待っていないのに、子どもを産むことに意味などあるのでしょうか。

現在の私は日々の仕事に追われ、休日は一日もとれないというありさまです。これから後何十年も、このまま働き続けなければならぬでしょう。どこにも希望を持ってない自分の現状を思うとき、子どもを産むという行為は罪悪だ、産まれてくる子どもがあまりに可哀想だという思いがますます強くなります。

We編集部みなさん、そして読者のみなさん、どうかぜひ一度、子どもを産むという行為は許されるのかどうかというのを、人間はなぜ子どもを産むのかということ、地獄そのものである社会に子どもを産んでもいいのかどうかということを、真剣に考えてみて下さい。私は、みなさんのお考えを知りたい

のです。（浜北・高柳俊彦）

◆「もうひとつの学びの場」登録拒否と『学校』を考える会」で、吉田敦彦氏の話があり参加しました。私は女性が働き続けるのが当たり前の社会にしたいと思っています。そのために家庭科の男女共修は大きな力になること。あと二年で中学、三年で高校の男女共修が始まるが、その時の問題点をWe六月号と一月号を回して見てもらいながら、吉田敦彦氏と知り合ったWeでの縁などを話しました。

この会に参加しておられた林美代子さんからウイ書房に注文書を送りましたと、うれしいはがきを先日受け取りました。また、注文したいけれど、お金がいまいからと言われた方があったので、一号分ずつでも、切手でも注文したら送ってくれるよ、と返事してしまい、まるで自分の会社みたい……と一人苦笑したりしました。でも本当に、自分もウイ書房の一員のような錯覚に陥り、子どもに「We拡販部」という名刺でも作ったら、などと冷やかされています。（長岡京・金森順子）◆昨日、東京から鳥取までの飛行機の中で隣の人がWeを読んでおられ、面白そうなので一月号から送って下さい。

（倉吉・笠田絃史）

Weの 読者会だより



〈We兵庫の会〉

◆七月七日(日) 神戸学生青年センターで、五月に開かれたWe関西初夏のつどいのテーマをひきつぎPART2として「ひとりの人として出会えたらーヨメ・ムコ・シュートメスランブル」と題してWe兵庫の例会が開かれた。参加者はなじみのメンバーに加えて、新聞で知って参加した八人家族のヨメをやっているTさん、前からWeには参加したくつてやっと実現したという高校家庭科教師のNさん、養護学校につとめているKさん、と新しい三人も加わって十五名。いつもの例会よりやや少なめだが、大きな会の後にはじっくり話しあえるこんな会もいいと好評。

この日のレポーターは、最近シュウトメの介入のひどさが原因で離婚した大阪のKさん。「夫は典型的なモーレッツ会社員、何回か話し合ったが夫の働く姿勢は変わらない。そ

れどころか年齢的にいっても最近はずますのめりこんでいく感じ。近くに住むシュウトメは夫の代替として孫を溺愛、二人の子供のうち特に長男への偏愛が著しい。このままでは子供をダメにしてしまう。そして自分も神経がすりへっていくと離婚を決意。長い間悩んだ揚句のこと。離婚した当初なんともいえない解放感を味わった。夫はシュウトメのもとに帰った。いっしょに暮らしている時は子供の顔すら見たこともなかった夫は、週一回の子供と会う日を楽しみにして確実に実行。子供も現在のパパとの関係を喜んでいる。大人の感情のもつれのなかで喘いでいた子供の気持ちも近頃は安定してきた。今の状態がバリエクトだとは思っていない。これから考えていきたい」と語るKさんの表情は明かるい。かつての憔悴しきった表情はどこへいったのか。夫君もひとりの人間として見る時、いい人だと思うとのこと。見えないイエニ制度のなかで期待がかけられる息子―孫の直系にマザコンを作り出している。そしていまもおヨメ・ムコ・シュウトメの図式が描かれる。この構造を明らかにし、ひとりの人間としてお互いに出会える関係をつくっていくには……などの意見が出された。散会后、話し合いの

余韻がさめず誰からともなく二次会に流れ、七夕の夜に気炎をあげた。(入江一恵)

◆Weと出会って、四年がすぎました。投稿はしたことのない消極的な読者ですが、Weと出会った時の感動が今も続き、毎号毎号とても楽しみにしています。最近嬉しいことがあったので、初めてですが、お便りいたします。

堺にもWeの読者会ができそうなのです。今年の五月号に載った村上邦彦さんと少し前に出会い、彼のお誘いから、石けんを広める河野さんと出会い、お互い「こんな近くにWeの読者がいたなんて！」これだけいれば読者会ができそうネと顔を見合わせ、呼びかけを早速、村上さんをお願いしてしまいました。

それにこししばらくの間、We知ってるよとか以前読んでいたとかいう人に何人か出会いましたので、その方たちにも声をかけて……。

今まで、すばらしい大阪や兵庫の会に時々参加させていただいていたけど、堺の会でもできれば……。大阪や兵庫と同じところもあるけれど、少しちがう、やっぱりちがう堺市。その堺市とその周辺で、働く人そして住む人たちと、石けん・環境・共修その他、いろいろなことを話できたらと夢がふくらみます。

(大藤裕子)

わたくしから あなたに



◆日本家庭科教育学会で「社会と家庭の関連をふまえた『家族』の授業―出生率をテーマとして―」というテーマで発表しました。好意的なご意見もいただきましたが、「家庭科的ではない。これは現代社会だ」との指摘もありました。「家庭科ってなんだろう？」またわからなくなっていました。しかし、学会に参加して家庭科教育のいろんな側面を見ました。その中で、特に二点気にかかったことがありました。一つは「人口問題と家庭科教育の果たす役割」というテーマについてです。出生率の低下について「好ましくない」ということからのアプローチで、家庭科教育の力によって回復を……ということでした。第3報ではサブタイトルも「子育て大好き」指導内容案となっており、家庭科の危険性を感じました。しかし、現場レベルではこうい

うアプローチ等がきつと沢山行われているのだらうと思えました。もちろん批判的なご意見がありました。演者の方は「それでもやはり、やるべきだ」とおっしゃいました。

二つめは、環境教育についてです。私も、くらしを見つめる視点は大切なことだと思っております。でも、環境教育の中に、ある種の道徳的なにおいや偽善的なにおいを感じてしまうことが多くあるのです。環境問題について、事実は伝えたいと思うし、よい方向に向かってはほしいとも思う。だけど、それらを教育の力で行うとき、何かしら危い感じがするのです。「人類、いつか滅びるんだから、仕方ないじゃない」と言いきる高校生にも嫌悪感を抱くと同時に、「家庭科で、行動にまで結びつけられる環境教育をしなければなりません」と言う先生にも、「この人は、本当にそんな生活をしているのかな？」と疑惑の念を持ってしまうのです。私には、そこまで言えないな、と思ってしまうのです。人口問題と環境問題、一歩まちがうと恐ろしいことになりかねないと思うのです。そして、家庭科って、つくづくその教師の価値観がまともに出る教科で、だからこそすばらしいのですが、今の私は「だからこそ、こわい」の方が若干

勝っています。そんな私の授業は、やっぱりしらせています。この状態を早く抜け出したいな……と思う反面、抜け出せるのだろうか？ ととても不安です。（金沢・分校淑子）

◆『木犀の匂う朝に』いいですね。表紙もすてきだし、なんと表現すればいいのでしょうか。しみじみと心にしみてくるような、そんな文章でとても好きです。まだ全部は読んでいないのですが、もう少し落ちついてから、ゆっくり味わって大切に読みたいなあと思ひ、ながめているところです。

職員会議で、三年の男女の選択科目に家庭科を入れるぐらいうすぐ実現すると、初めは簡単に考えていたのですけれど、何と五年目にしてやっとなのです。でも、来年から、男子も教えることができるかもしれないなんて、うれしくてうれしくて……。

職員会議では「男子は選択しても二、三人多分ゼロだろうけど」と言われました。でもそんなことは気にしないで、男子にはどんなPRをすればいいかなど、これからどんどん考えていきたいです。（大阪・浅井由利子）

泉

この頁はあなたと
私の情報交換の場
小さなスペースで
すが、ご利用くだ
さい。

◆お茶くみの政治学討論会

―フェミニスト議員の質問から―

女子差別撤廃条約が批准されても、男女雇用機会均等法が施行されても「お茶くみは女の仕事」。この現実各地のフェミニスト議員がいつせいに質問。それをもとに討論を。

。日時 九月二十一日(土) p.m. 一時半～四時

。場所 婦選会館 二階会議室

。資料代 五百円

。主催 「お茶くみの政治学」実行委員会

〒166 杉並区阿佐谷南二―十九―十一―

〇一 三井マリ子事務所気付

。連絡先 中嶋里美 ☎03-42-7560

三井マリ子 ☎03-3318-5860

◆くらしのサロン「シーモア」

開催予定セミナーのご案内

。湾岸戦争シリーズ1「湾岸戦争裏話―実体

験を語る―」

。日時 九月二十五日(木) p.m. 一時半

。講師 川村晃司(テレビ朝日ニュースステーション報道局員・現地取材員)

。内容 イラクのクウェート侵攻から一年。

現地報道員としてイラクを取材した川村氏にテレビでは報じられなかった中東の様子を独自の視点でお話しいただく。

。会場 東京都社会福祉総合センター視聴覚室(飯田橋セントラルプラザ6F)

。参加費 資料代五百円

。問合先 (財)日本チャリティ協会くらしのサロン「シーモア」担当・竹森

☎03-3358-6394

◆アムネスティ・インターナショナル一九九一年キャンペーン

☆教科書は女性をどう表現してきたか

。『女性と人権』連続講座第四回

。『教育と女性』講師 紙子達子

。日時 九月二十七日(金) p.m. 六時半～

六時十五分開場 参加費 五百円

。場所 キリスト教会館四階会議室

。主催 アムネスティ・インターナショナル女性と人権チーム

。問合先 アムネスティ日本支部東京事務所
新宿区西早稲田二ノ三ノ二十二 第三山武
ビル ☎03-3203-1050

◆「江の島映像フォーラム」のお知らせ

「さまざまな愛のかたち」女と男、女と女、それぞれの愛。今年の映像フォーラムは真面目に「愛」を考えます。(チラシより)

。第一回 九月二十八日「ドライビング・ミス・デ이지ー」 a.m. 十時～十一時三十九分

p.m. 一時半～三時三十九分

。第二回 十月十九日「サラーム・ボンベイ」 a.m. 十時～十一時五十三分 p.m. 一時半～三時五十三分

他毎月一回'92年二月まで

。参加費無料 一時保育(二歳から)有り

。問合先 神奈川県立かながわ女性センター生涯学習部 〒251 藤沢市江の島の十一の一 ☎0466-27-2111

◆東京・強姦救援センターが「もし、強姦の被害にあったら 警察編」というリーフレットを作成しました。

。定価 二百円 送料六十二円

。郵便振替 東京七―五四二六六九 東京強姦救援センター書籍部

。問合先 同センター ☎03-3207-3692



十字路



「北海道」 「反原発」が地元酪農家を追いつめる……（北海道7/6）

泊原発事故の不安から、札幌の消費者グループが、原発と隣接する後志管内岩内町の牧場で生産された牛乳の共同購入を中止することを決めたことに、地元の酪農家などは大きな衝撃を受けている。これまで原料乳を買い入れてきた地元乳業メーカーが、再三の「風評被害」に「これ以上不買が広がったら経営していけない」と、八日限りで岩内酪農組合との取引停止を卸元のホクレンとの間で合意したことが重なったこともある。酪農家は「買い入れ先がなければ、廃業するしかない。反原発の運動が弱い立場の側を追いつめていいのか」と割り切れぬ思いで怒りをぶつけている。

（高橋芳恵）
〈千葉〉ゴルフ場の農薬三割減 使用抑制へ足並み（朝日7/4）

九〇年度の県内ゴルフ場の農薬使用量が、前年度に比べ全体で三〇・二％減ったことを、三日の県議会本会議で沼田知事が明らかにした。九〇年四月から新設ゴルフ場については無農薬化が義務付けられたが、既存のゴルフ

場も農薬抑制で足並みをそろえつつあるようだ。県農薬改良課のまとめによると、新設したゴルフ場を除く県内百四のゴルフ場で九〇年度中に使われた農薬は、前年度を九十五・六トン下回る二百二十・六トンだった。同課は「一定の評価ができる数字。無農薬化を目標に指導を続けたい」としている。

（木田直子）
〈神奈川〉高齢者や障害者が社会参加できる環境づくり、産・学・公が共同で研究（朝日8/8）

高齢者や障害者が気軽に社会参加できるような環境をつくろうと、県内外の企業、大学、公共機関が互いに研究者を出し合い、共同で新型の車いすやバス、ニューメディアなどの開発を始めた。五年以内に実用化したいとしている。社会に貢献する科学技術のネットワークづくりを目ざす県の音頭で手を組んだもので、県主導で産、学、公の研究者が一つの研究に力を合わせるのは初の試みという。

（青木昭美）
〈東京〉ミスコン反対運動の成果、都が後援を中止（全国婦人新聞7/10）

「性の商品化」であるとして、女性たちが反対運動をし、その運動の盛り上がりから、後援を取り止める地方自治体も出ている「ミス・コンテスト」だが、このほど、東京都では「ミス東京コンテスト」の後援を止めることにした。

（編集部）
〈愛知〉「地球にやさしい」文化祭 西陵商高（朝日8/8）

環境問題を高校生の立場から考えてみよう、と、西区の西陵商高の生徒会が十月に開く「西陵祭」に、ごみや資源の再利用などを取り上げる。テーマは「青春がここにある——地球と私たちの今と未来を見つめて——」。手始めに招待状も牛乳パックを再生して作ることにし、生徒約千二百人に協力を求め、約千箱集まった。夏休みに生徒会役員が二千四百人に出す招待状の用紙をほぼ作り上げた。西陵祭では、三年六組が牛乳パックでピラミッドを作り、環境の悪化が砂漠化を早めている、と訴える。二年一組は、空き缶で校門にシンボルアーチを設け、資源の多くが捨てられていることを知ってもらおうという。

（山本直子）

〔福井〕「友達の輪」広がった―複式学級の児童三百五十三人交歓（福井 8/1）

大勢で遊ぶ機会の少ないへき地の児童らに集団活動の楽しさを知ってもらおうと、県へき地複式学級児童交歓会が三十一日、県営体育館で開かれた。県内四十六校から小学四年生三百五十三人が集まり、学校紹介やプレゼント交換、レクリエーションを通して親交を深めた。

（上山悦子）
〔京都〕子連れで出かけよう 京都の母親らがガイドブック出版（朝日 7/19）

子育てしながらだつて学びたい、遊びたい、仕事もしたい。そんな母親のためのブックレット『KYOTO子連れパワーアップ情報』を京都の女性たちが自費出版した。子連れで活動する時の便利情報が「たのしむ」「まなぶ」「はたらく」など六章にわたって紹介されている。A5判四十八ページ、送料込みで八百円。申し込みは郵便振替京都9―5880「京都子連れパワーアップ情報」へ。

（塚崎美和子）
〔福岡〕福岡県教委、教諭十四人を懲戒処分（朝日 8/7）

福岡県教委は六日、今春の卒業式や入学式で日の丸掲揚を妨害したり、君が代斉唱の指示に従わなかったなどとして、中間市内の小学校教諭ら計十四人を停職、減給、戒告などの懲戒処分にした。また、君が代斉唱時に起立しなかったとして、中間市教委は六十二人、築上郡築城町教委は九人を、懲戒処分にはあたらない文書訓告にした。文部省によると、今春の処分は、福岡県以外では東京都教委の減給、戒告の計二人だけ。福岡県以外で文書訓告などを受けたのは全国で計百二十三人（7/22日現在）。福岡県教委の強硬姿勢が際立つ。

福岡県教委、ずさん調査 こっそり理由訂正（毎日 8/10）

福岡県教委が「日の丸・君が代妨害」で懲戒処分にした中学校教諭のうち、女性教諭（34）の処分理由に誤りがあり、県教委がひそかに訂正していたことが九日、明らかになった。この教諭は、入学式の日、年休をとって長男が新入学する別の小学校の入学式に出席していた。例のない厳しい処分が、ずさんな調査に基づいていたことになり、波紋を呼

びそうだ。（安部宣人）

〔長崎〕民間の団体・企業大活躍（朝日 6/25）

雲仙・普賢岳の火山災害で、救援活動に追われる島原市では、周辺の町おこしグループや民間企業のボランティア活動が盛んになってきた。島原半島の一市十六町の町おこしグループなど約二十団体の青年らでつくる雲仙岳災害ボランティア協議会は二十三日、島原市内約二十カ所の公衆便所の掃除をした。市西部の焼山の公衆便所入り口には三、四センチの火山灰の泥が積っている。若者たちは板切れで灰を取り除き、バケツの水で流した。同議会では今後、東京での募金活動や地域復興へ向けたシンポジウムなども検討している。

一方、民間企業の日本通運とヤマト運輸は今月初旬から、宅配用ワゴン車をそれぞれ二台と、社員数人を毎日、島原市へ派遣。救援物資は、市役所や市内五カ所の倉庫に一時保管されており、派遣社員らは、これらの物資を各避難所へ無料で配達。運送作業のプロだけあって、市職員と共同作業の積み込み、積み下ろしも、手ぎわがよい。（中野志保）

十字路

りぎりで見られているが、来年度政府予算案は今年末には決まるため、最終答申でゴーサインが出た場合に具体化作業が一年近くたなざらしになるのを避けるため、答申に備える形での予算要求を決断した。

脳死者からの臓器配分のためのシステムとしては米国の「全米臓器配分ネットワーク」(UNOS)やヨーロッパ各国を結ぶ「ユーロトランスプラント」などがあり、東京女子医大での生体肝移植手術に際しては、ユーロトランスプラントを通じて再移植用の脳死者の肝臓が、ベルギーから空輸されてきたばかり。国内では脳死移植に意欲を見せている医療機関がそれぞれ、医師の個人的なつながりで連絡網を作成している現状。このため厚生省は、このままなし崩し的に脳死移植が始まってしまうと、有力医師のコネなどに頼れる人だけが移植を受けられる、といった形になりかねない、としている。(8・16日付 朝日)

★「日の丸・君が代」一律明記

来春から小学校で使われる教科書に対する文部省の'90年度検定の結果が30日、公表された。検定全体の意見数は目立って減る中で、新学習指導要領が重点とした6年生社会の「国旗・国歌」の部分では統一的な検定姿勢が貫かれ、戦後初めて小学校社会科の全教科書に「日の丸が国旗・君が代が国歌」の記述が入れられた。新指導要領と新検定制度が初適用され、二重の意味で新しい検定だったが、新制度の「重点化」という狙いそのままに、東郷平八郎の記述もすべてに登場するなど、新指導要領の核心は徹底されている。(7・1日付 朝日)

★「性教育」一惑いと不安の教師

学習指導要領の改訂にともない小学校の新教科書では、保健と理科に性の題材がかなりもり込まれることになった。これまで体育の項目として教科書がなかった保健は、4分の1を「体と心の成長」に割り、男子、女子の全裸や性器のカラー図を配置している。「発毛」「ちぶさ」「声変わり」「性器の

発達」などの2次性徴を図示し、射精についての詳しい記述も目立つ。

理科では、生物学の立場から「人の誕生」をとり上げ、「精巣」「子宮」などを図入りで掲載、受精の様子を示している。

もともと「難しい年ごろ」になる小五の担任は、ここ10年ほど多くの学校で希望者が減少しているが、今まで敬遠して養護教諭などに任せてきた性教育を、来春からは新教科書をもとに担任が教えなくてはならなくなる。(7・3日付 読売)

★男女園生、コンテナ懲罰の死

広島県三原市沖の島にある私立の情緒障害児更生施設「風の子学園」で、職員がたばこを吸った男女園生2人を反省させるため、猛暑の中、懲罰室に使っていたコンテナにカギをかけて閉じ込め、45時間も放置、死亡させる事件があり、広島県警などでは監禁致死の疑いで園長等から事情を聞いている。(7・30日付 読売)

文部省は、同事件を重く見て7日、登校拒否児を受け入れている全国の施設を一斉に調査することを決めた。同時に、各教委から学校に、施設に通う児童の追跡調査をするよう指導する予定だ。(8・8日付 朝日)

★転勤はイヤ／

幹部候補生にあたる総合職採用で「転勤」がネックになって一般職に変えてしまう女子学生が少なくない。このため、総合職につきものの転居を伴う転勤がないのが特徴の「新総合職」「エリア総合職」などと呼ばれる、条件付き総合職制度を女性だけを対象に設ける企業が増えてきている。学生援護会が今年3月、4年生大学卒業予定の1300人を対象にした調査では、就職先の決定理由として、文系女子の4割強、理系女子の3割強が「自宅から通える」をあげている。また同会の調査で男子学生の4分の1も「自宅から通える」をあげており、いずれはこの新総合職は、男性からの応募も予想される。(6・25日付 朝日)

★ストップ児童買春

フィリピンで最近日本人男性の児童買春性暴力事件が相次ぎ、現地各紙が「ペド」(ペドファイル＝幼児性愛者の略)事件と、大々的に報道した。児童買春は'80年代に入ってフィリピンやタイなどアジア各国で社会問題化し、これまで欧米の観光客や軍人などが中心だった児童買春に、日本の男性も加わり始めた。また、人身売買で日本の性産業に来る少女たちの中にも年少者がふえ、日本の児童ポルノ雑誌にもアジアの子どもが使われている。

こうした児童買春に、第三世界観光問題連合(本部バンコク)は「アジアの観光による児童買春ストップ」キャンペーンを先進国に呼びかけ、ユニセフなども協力。国連の子どもの権利条約も「子どもの性的搾取の禁止」を明記するなど国際的な運動が巻き起こっている。(7・27日付 朝日)

★慰安婦問題一南北共同で補償要求

日中戦争や太平洋戦争で「女子挺身隊」の名で戦場に送られた朝鮮人従軍慰安婦の実態を調査している韓国挺身隊問題対策協議会(16団体、約30万人)の尹貞玉・共同代表は、5月に東京で「アジアの平和と女性の役割」シンポジウムが開かれた際、朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)代表との間で、朝鮮人慰安婦の補償などを日本政府に共同で要求することで合意したことをこのほど明らかにした。尹さんは同シンポで北朝鮮代表と会った際、従軍慰安婦問題が日韓両国の戦後処理問題で置き去りにされていることを指摘。北朝鮮側は「北朝鮮に帰った従軍慰安婦の実態を独自に研究し、データを持っている」と述べ、今後「共同で取り組む」ことで意見が一致したという。(7・31日付 朝日)

★「対決」から「共存」へ

国連安全保障理事会(15カ国)は8日、公式協議を開き、韓国と朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)の国連加盟を一括して認めるよう総会に勧告する決議案を無投票で

採択、南北朝鮮の国連同時加盟が事実上決まった。9月17日から開かれる国連総会で正式承認の見通し。南北朝鮮の国連同時加盟は、アジアにおける冷戦終結の象徴となるとともに、「対決」から「南北共存」路線への転換を示す歴史的意義をもち、東アジア情勢全般に大きな影響をもたらす。(8・9日付 朝日)

★ソ連一産党支配に終止符一

19日のタス通信はソ連のゴルバチョフ大統領を「健康」上の理由で解任、ヤナーエフ副大統領が同日から大統領に就任するとした「副大統領令」を發布し、同日より6か月間ソ連全土に非常事態宣言を布告したと伝えた。しかし、クーデター派の武力行使も市民の強い抵抗にあい3日で失敗。ゴルバチョフ大統領は、ただちに復権、クーデター後の政局刷新にあたり、九共和国との新連邦条約調印を急ぐ一方、24日にはソ連共産党中央委員会の解散を勧告し共産党の実質的解体を宣言。74年間の社会主義支配に幕を下した。(8・20～26日付 各紙)

★平和維持軍参加は「合意」

海部首相は9日の参院本会議での代表質問で、国連平和維持活動(PKO)協力のなかで、平和維持軍に参加する問題に関し、「昨年(の国連平和協力)法案では直ちに参加できるようになっていなかったが、武力行使問題など厳しく限定して、憲法との関連で問題を生ずるものはないとの基本原則を立てた」と述べた。武器の使用は「自己防衛」に限るなど条件をつけることにより、政府の従来憲法解釈に抵触しない、との立場で国会論議を乗り切る意向を示した。(8・10日付 朝日)

★脳死臓器の提供システム

厚生省は15日、脳死者からの臓器を公平迅速に患者に提供するための「臓器提供システム」に関する調査費を、来年度予算の概算要求に盛り込む方針を固めた。脳死臨調の最終答申がまとまるのは来年1月末ぎ

編集後記

◆「高校生には校則で、セックス禁止」をするしかない」などと教師から言われると、現場にいない私はびっくりしてしまふ。目に余ることの連日なのだろう。性を買売春から考えてみた。今日的に言えば、性産業を悪者にしてつるし上げる格好のテーマと思つた時、「朝鮮人従軍慰安婦」の問題が飛びこんできて、また別の角度からこのテーマに向き合わされた。(青木)

◆従軍慰安婦問題を考える在日同胞(女性の会(仮称))のパンフを読む。韓国でも最近になつてやつと明るみに出たというこの問題を、「自分たちのアイデンティティの原点を探る」もの、と語る在日の女性達。先日の夏季フォーラム全体会での李順愛さんからの問題

提起に重ねつつ、この問題はどう受けとめていくかは、日本のフェミニズムにとつて一つの試金石、と思う。(稲邑)

◆「タイの女性は日本の女性と違って優しく、気を遣ってくれるから」とは、大かたの買春をする男の言い分。日本の女性解放は他のアジアの女性たちに売春を強いてしまうことになるのだろうか。金の力で得た男としてのアイデンティティ。その空しさにいつになつたら男は気づくのだろう。餌食となる子どもたちのことを思うと、自覚を待つてなどいられない。(河村)

♥長い夏休みと思っていたのに、アツという間に過ぎてしまいました。夜にはコオロギやスズムシの声が秋をはこん

できています。

♥我家には中学生の息子がいますが、夏休みの間に何度となく、塾の勧誘や、教材セールの電話がかかってきました。塾には入れない考えではいるけれど、不安がよぎります。塾へ行かないのは不思議なことなのかしら。(渡辺)

★個人の「思い」がすべての出発点。個人が大切にされなければ、どんなに理論として美しく、理念として正しくても、人を動かすことはできません。同時に、ものごとを成就させるには、個人を超え、相当数の人間がダイナミックに動く必要があります。ソ連のクーデターと、その失敗は、他山の石と言えましよう。

★次号は「アジアの中の私たち」がテーマです。とみに関心が深まってきたアジア、ご期待下さい。(半田)

Weバックナンバー (在庫があります。ご注文は、最寄りの書店「地方小扱い」または、料金をおそえの上、振替で直接ウイ書房へ)

- 90/6 「家庭生活」をどう語る(¥567)
- 90/7 「環境・資源」を見つめる(¥567)
- 90/8.9 消費者教育は、何を指す?(¥567)
- 90/夏増刊号 家庭科が変わる
—情報化のうねりの中で(¥721)
- 90/10 地域をよみがえらせる(¥567)
- 90/11 高齢化社会がやってくる(¥567)
- 90/12 マス・メディアは何処へ(¥567)

- 90/冬増刊号 出会いは歴史をつくる(¥721)
- 91/1 性役割の固定化は揺らいだか(¥567)
- 91/2.3 新しい家庭科を創る(¥567)
- 91/4 「教師」という仮面を脱ぐ(¥580)
- 91/5 少年・少女の現在(¥580)
- 91/6 心からからだへ(¥580)
- 91/7 生と死を授業で(¥580)
- 91/8.9 ひとと生殖(¥580)

新しい家庭科—

Vol.10 No.7 1991年9月20日発行
定価580円(本体563円+税17円)送料共
年間購読料・定価7200円
編集兼発行人/半田たつ子

発行所/(有)ウイ書房

〒182 東京都調布市西つつじヶ丘2-25-14
☎・FAX03(3326)1380 郵便振替 東京6-59867
第一勧業銀行 調布仙川支店 普預1075292
印刷所/(有)岩佐印刷所〒112文京区春日1-6-7

ウイ書房が贈る最新刊

人間と教育を追求するあなたへ

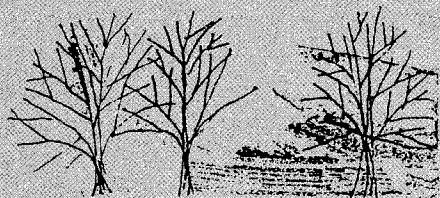
「We」創刊十年！ この歳月に、著者が
出会い、思い、考えてきたことの集大成
半田たつ子

目次

- I くらしの中で
- II 人とのかわりの中で
- III 女と男
- IV 教育をめぐる
- V 私、そして家族
- VI いのちを考える

木犀の
白うら
朝

定価 一八〇〇円
〒 二六〇円



好評既刊

「We」創刊一年の記念として

人間って
不思議
の視角

半田たつ子

人間は、人間を信ずる
ことができた時、人間
の美しさに酔う時、最
高の幸せを味わう。
家庭科にかけてきた著
者の、人間を見る一つ
の視角をここに

定価 一五四五円
〒 三二〇円

- 直接小社にご注文の場合は、書名、冊数および住所・氏名を明記の上、代金に送料を加えた金額をお送り下さい。
- 二冊以上の場合の送料は、実費をご請求いたします。
- 電話、はがきでお申し込みの際は、代金、送料を記入した振替用紙を同封いたしますので、到着次第お支払い下さい。

ウイ書房

〒182 調布市西つづじヶ丘2-25-14 ☎ 03-3326-1380 (振替・東京6-59867)